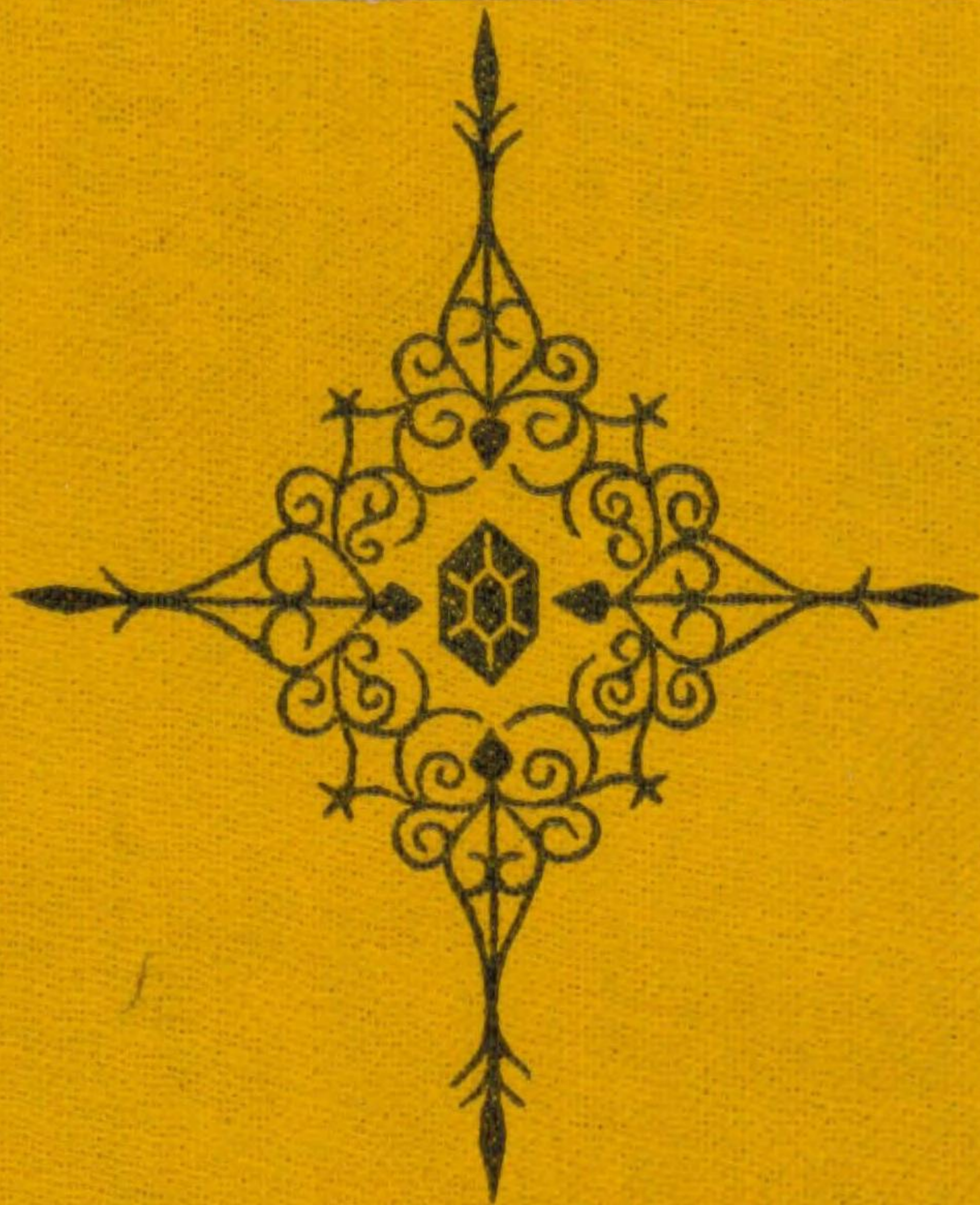


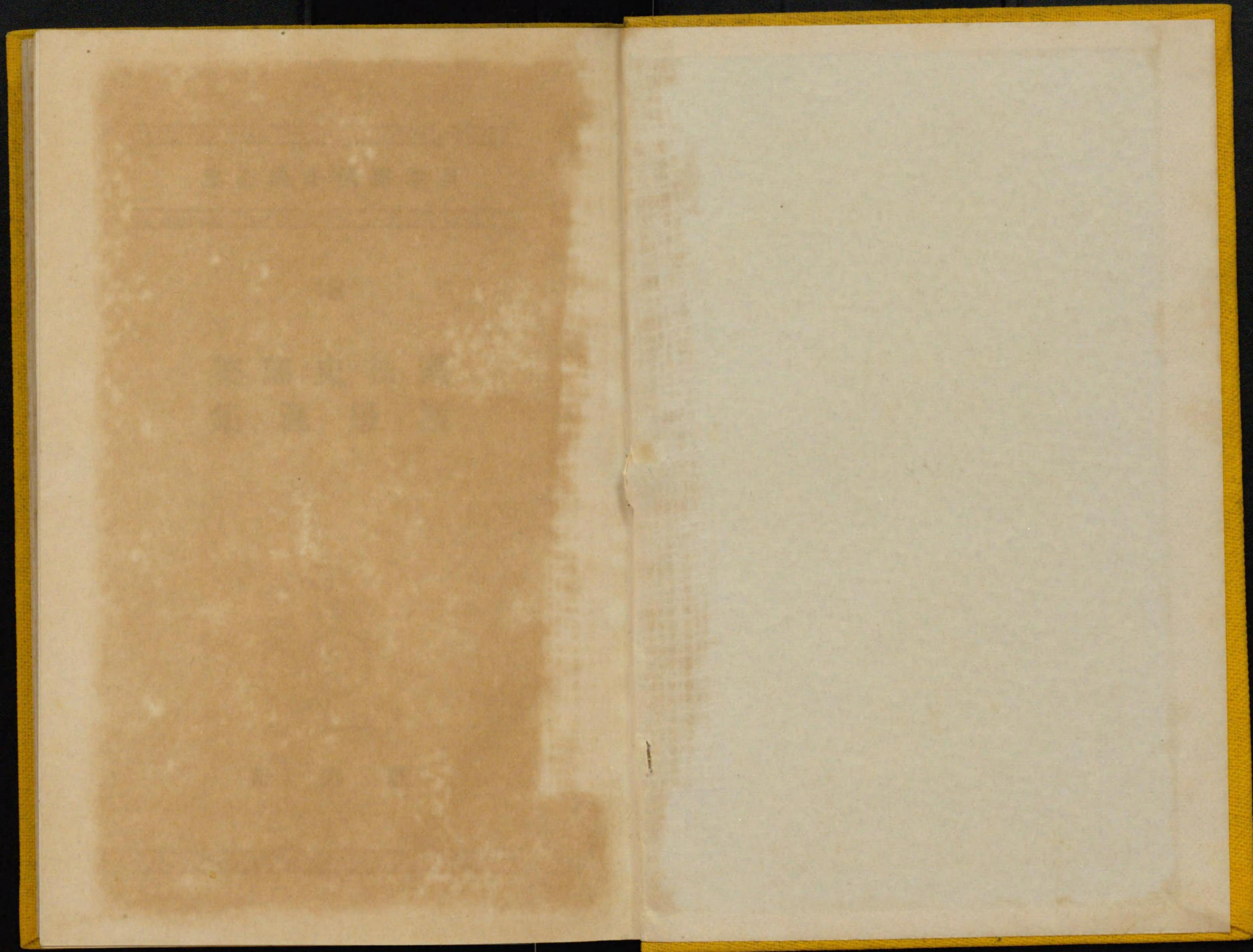
569-167



1200502071689



56
集
56
56



日本探偵小説全集

18

國枝史郎集
渡邊溫集



改 造 社

日本探偵小説全集

81

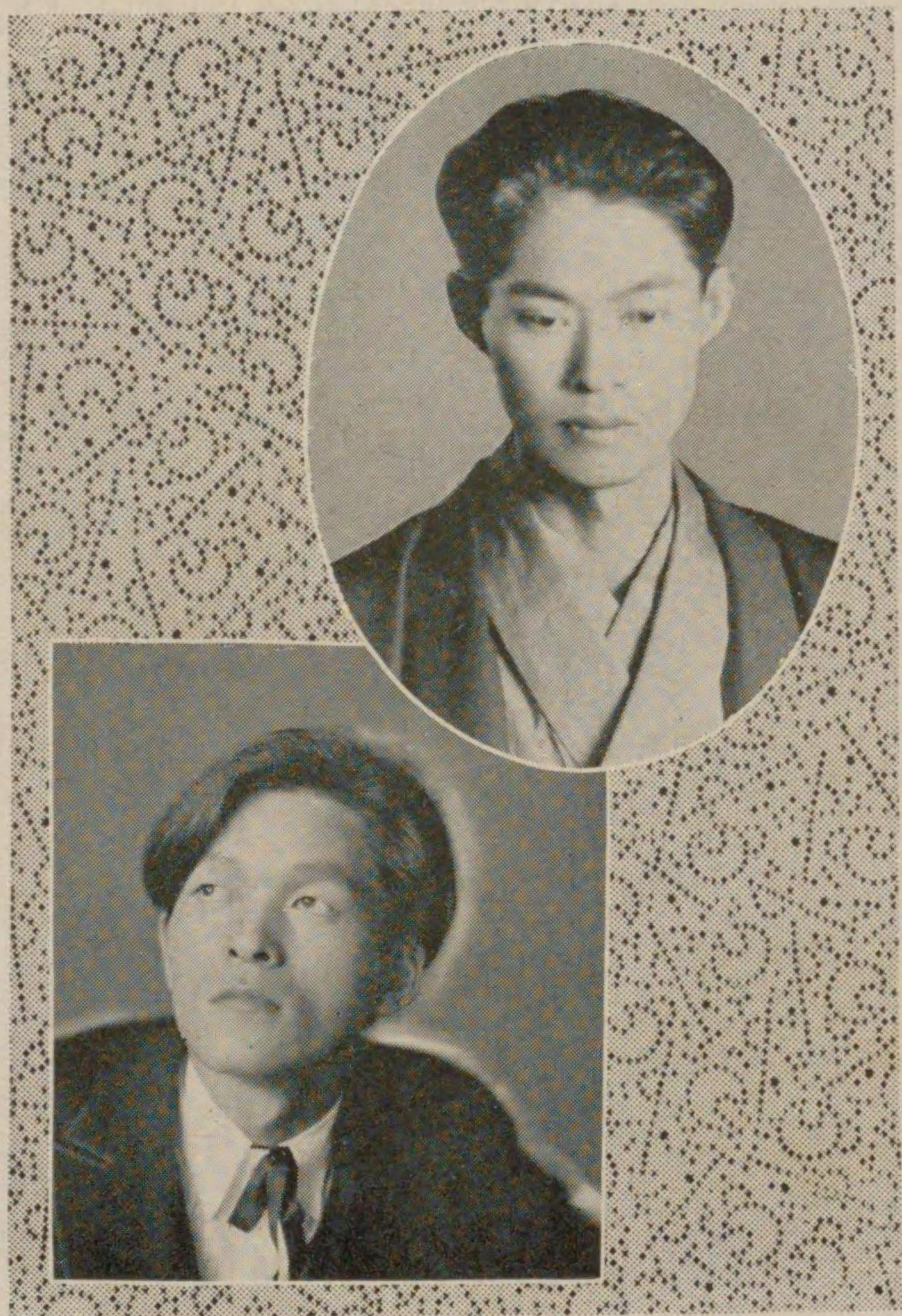
國枝史郎集
渡邊溫集



改 造 社

569

167



(上) 國枝 史郎氏

(下) 渡邊 溫氏



I 種

W



1200502071689

目次

國枝史郎集

沙漠の古都

奥さんの家出

渡邊温集

嘘

少女

戀

國枝史郎集	三
沙漠の古都	五
奥さんの家出	二〇六
渡邊温集	二三五
嘘	二三七
少女	二五五
戀	二六五

赤い煙突……………二七三

風船美人……………二八七

勝敗……………三〇一

可哀相な姉……………三二二

父を失ふ話……………三三九

シルクハット……………三四六

花嫁の訂正……………三五二

兵隊の死……………三七〇

影……………三七二

映畫シナリオ(九篇)……………三八三

國枝史郎集

沙漠の古都

目次

「マドリッド日刊新聞」の記事……

怪獸再び市中を騒がす。

去月十日午前二時燐光を發する巨大の怪獸何處よりも無く市中に現はれ通行の人々を脅かし府廳官邸の宅地附近にて忽然消滅に及びたる記事は逸速く本社報の報じたる所讀者の記憶にも新たなるべきが其後怪獸の姿を認めず或は怪獸の出現も通行の人々の幻覺に過ぎず事實上かゝる怪獸は存在せざりしには非ざるやと多少の不安と危懼とを以て兩度の出現を待ち居たる所……。

「ホ、オそれぢや又怪獸が出現したといふのだね？」

民間探偵のレザールが全部新聞を讀んで了はないうちに、傍で聞いてゐた友人の油繪畫家のダシチョンが、驚いたやうに斯う云つた。

「どうやら再び現はれたらしい——ところが今度はこの前と違つて、顔ばかりに……寧ろ眼の縁だけに燐光を帯びてゐる。獸ださうだ。まあ聞き給へ讀むからね。」

南歐櫻の咽せ返へるやうな濃厚な花の香が窓を通して室の中いつばいに擴がつてゐた。その室でレザールとダンチョンとは肘掛椅子に腰かけたまま軽い朝飯をしたゝめた後、折柄配達された新聞を斯うして讀んでゐるのであつた。

「いゝかい讀むぜ。聞き給へよ。」

そこでレザールは讀みつゞけた。その要點はかうである。

——昨夜、即三月十日、時刻も丁度午前二時頃、兩眼の縁に燐光を纏つた、犬のやうな形の動物が、忽然街路に現はれたが、府廳官邸の宅地まで行くと、其儘姿が見えなくなり、それと同時に一軒の家から、恐怖に充ちた男の聲が、一瞬間鋭く響き渡つたが、其れも其まゝ靜かになつた。そして不思議にも怪獸の姿は、どこにも見えなかつたと云ふのである。

「燐光を放す動物なんて、實際そんなものがあるのだらうか？」

「さあ。」とレザールは考へ深く「全然無いとも云はれない。魚には確かに有るのだからね。」

「そりや魚にはあるだらうけれど——例へば烏賊などは其通りだが、眼の縁だけに燐光を放すそんな獸つてあるものだらうか——それは夫れとしても一つこの新聞記事で見るとどうやら奇怪な動物なるものは、二匹あるやうに思はれるね。」ダンチョンはレザールの顔を見て審かしさうに云つたものである。

と、レザールは微笑を浮かべたが、

「つまり眼の縁だけ燐光を放す昨夜あらはれた怪獣と、去月十日にあらはれた身に燐光を放す獣と、都合二匹といふのだらうね……君も仲々眼敏くなつた。僕も新聞を見た時からこいつを可怪しく思つたんだ——燐光を放つた獣なんか一匹あるさへ不思議なのに、二匹もあるといふのはどう考へても腑に落ちないね……なあに矢つ張り一匹だらう。」

「記事からいくと二匹だがね。」

「往來の人の錯覺で此前は全身が光るやうに見え、昨夜は眼瞼だけ光るやうに見え、それで驚いたに違ひないよ……で僕は一匹だと思ふ……だが或は、或はだね、一匹もゐないのかもしれないよ。」レザールは微妙に云つたものである。

「全部を錯覺にするのだね？」ダンチヨンは首を横に振つて、「一度ならず二度迄も一人ならず數人の者が、さういふ獸を見たのだから、錯覺とばかりとは云へないね。」

「君の云ふのが本當か或は僕の説が正しいか、探つて見なければ解らないが、ただ怪獣が出たといふばかりで世間の害にならないのだから、探つて見ようといふ興味もない……依頼者でもあれば兎も角だが。」

「しかし。」とダンチヨンは遮つて、「無害といふことも云はれないね。現に其獸に脅されて悲鳴をあげた者があるといつて、この新聞にも書いてあるんだからね。」

「無理に難癖をつけるとして秩序紊亂といふ奴かな。怪獣の秩序紊亂かな……どうも獸ぢや仕方

がない——それとももしや其獸の……オヤ誰か來たやうだ。こんなに朝早く來るからには火急の事件に相違あるまい。」

コツ／＼と扉を打つ音がした。

「お這人。」とレザールは聲をかけた。扉が開いて一人の貴婦人があわたゞしげに這入つて來たが、レザールとダンチヨンの二人を見ると當惑したやうに立ち停まつた。

レザールは恭々しく立ち上がったが、

「私がお尋ねのレザールで——これは友人でございます。極めて氣の置けない友人で……ええと所で市長の奥様、どういふご用件でございますませうな？」

極めてなれ／＼しく云つたものである。

「オヤまあ私を御存知で？」

市長夫人は手を差し出しレザールにそれを握らせ乍ら、

「いかにも私は仰有る通り市長の案内でございます。」といくらか驚いた様子である。

「マドリッド市民は誰にしまして自分の町の首腦者の——つまり市長でございますね——内助者たるところの奥様を知りたいと思はないものほございません。」

恭々しくレザールは微笑した。

「でも。」と夫人は首を振り、「體がひどく弱いものですから、こちらへずつと参りましてからも、

毎日たれ込めて居りまして、それこそ町へなどは一度も出で、重大な社交にさへ顔を出しませんのに……」

「おつしやる通り奥様はあの米國の大統領のハーディング夫人とそつくりで、社交嫌ひだとか申しますこと——けれどたつた一度だけ招待會には出られました筈で。」

「さうくたつた一度だけ——主人が印度から當地へ参り市長の職に着きました時、極めて少數の知人でしたが、お招きしたことがございました。屹度あの時でございませう？」

「左様、あの時でございませう。あの時私は舞踏室で、奥様をお見かけいたしました。」

「それは少し變ぢやございませうか——あの時およびした人達の中に、あなたのお名前は無かつた筈で。」

「レザールといふ名はございませうでした。しかしマドリッド日刊新聞の社長の名前はありました筈で。」

夫人はしばらく考へてから、

「ポンピアド様といふ名前の六十過ぎた立派な方？」

「獅子のやうな頬髯を生やした人で。」

「たしかにお招き致しました。」

「それが私でございませう。」

「まあ。」

と夫人は呆れ返へり、

「でも、お見かけ申しました所、あなたはやつと三十ぐらゐ、それだのに一方ポンピアド様は……」

「ですから奥様尙一層化け易いのでございませう。三十男のこの私が矢つ張り他の三十男に化けるといふことは困難ですが、六十の老人に化けることはいと易いことでございます……もしも御不審におぼしめすなら、五分間御猶豫を頂いて、化け直してお目にかけてませうか。愛想よく輕快に云ひ放した。」

しかし夫人は手を振つて、淋しく美しく笑ひ乍ら、「いゝえ夫れには及びません。成程さうかも知れませんが、名譽の探偵でいらつしやいますもの……それにしても本物のポンピアド様は、どう

していらつしやらなかつたのでございませう？」

「たしか旅行中でございました。」

「それではあなたはポンピアド様に斷わらずにおやりなすつたので？」 軽く夫人は非難した。

「毎々のことでございますよ。」レザールは愉快さうに微笑した。

「そんな権利がございました？」と夫人の聲はやゝ鋭い。

「左様。」とレザールは眞面目になり、「私と、それにもう一人、私に執つては大先輩で、且又非常

に仲のよい——奥様も或は名前ぐらゐはご存知でゐらつしやるかもしれませんが——ラシイヌといふ探偵だけには、さういふ権利がございますので。どうしてと申しますに我々二人は、政府の機密に参加したり、皇室のご依頼に應じたり、これ迄數度その方面で働いたことがございますので、政府は我々二人の者へ特權を與へてくれました。」

すると夫人は頷いて、

「さうでございませうね、よくわかりました。——たゞ今お話しのラシイヌ様、知つて居るどころではございません。たゞ今お逢ひして參りましたので。」

「あゝそれぢやもうお逢ひでしたか。」

「さうしまするとラシイヌ大探偵が私にこのやうに申しました——レザールにもご依頼なさるやうにつて。」

レザールは苦笑を浮かべたが、ダンチヨンの方を振り返り、

「ラシイヌが僕を驗すらしいね。」

それから夫人の方へ頭を下げて、「それではどうぞお話しを——ラシイヌへ仰有つたと同じやうに、私にもお話しを願ひたいもので。」

椅子に寄つたまゝ暫くぢつと市長夫人は黙つてゐた。それから靜かに話し出した。

「……どこからお話し致しませう？ 矢つ張りずつと最初からお話しな方がよさうです——先月十日の眞夜中でした。午前二時頃でもございましたでせうか、突然良人の居間の方から呻くやうな聲が聞えましたので、暫く聞き澄まして居りましたところ、それつきり物音が致しました。屹と夢でも見たのだらうと、そのまゝ眠らうと致しますと、庭の方へ向いた室の窓が不意に明るくなりましたので吃驚りして起きようと致しました。左様でございませうね、その光は銀のやうな光でございました——ところが窓のその光も次の瞬間には消えましたので、起きかゝつた床へまた這入り夜の明けのを待ちました。朝のお茶の時に食堂で良人の顔を見ましたところ、大變蒼いぢやございませんか。どこかお體でもお悪くて？ 私に訊きますと首を振つて、いゝやと一言云つたとき、黙つてお茶をのむのでした。そこへ新聞が來ましたので何氣なく取り上げて見ましたところ、思ひあたる記事がございました。燐光を放す巨大な獸が、昨夜市中にあらはれて、府廳官邸の宅地まで來ると消えて了つたといふ記事です。私はハツと思ひました。それでは昨夜窓に映つた銀色をしたあの光は、扱は怪獸の光だつたのかと……。」

「あなたは昨夜變な光を窓からごらんになりませんか？ 私には良人に訊いてみました。すると良人はひどく顫へ蒼白になつたぢやありませんか！ けれど變化したその表情は、直ぐに良人

の強い意志で抑へられて了つたのでございますね。良人は冷静に斯う云つたものです。

「いゝや、そんな光は見なかつたよ。」

それで私は新聞の記事を良人の方へ向けまして、

「昨夜二時頃この町へ怪獣が出たさうでございますね。」

「ふうむ、怪獣？　どんな怪獣？」良人は益々冷静に、「町の人達の錯覚だらう。燐光を放す獣なんか此世に有る筈は無いからな。」

「でもねあなたその光を、昨夜私も見たのですよ。」

「お前が見たつて、その光を？　それぢやお前も錯覚の仲間入りをしたつて云ふものさ。」

斯う云つて良人が笑ひましたので、私もそのまゝ安心して黙つて了つたのでございます。

けれどどうやら夫れからといふもの、良人の様子が沈んで了つて、考へ込むやうになりました。

そんな時私が話しかけても、碌々返辭さへ致しません。さうかと思ふと何んでも無い時に、お前今何んとか云はなかつたかい、などと訊く事がございます。一體の様子が何か斯う遠い昔の思ひ出事に耽つてゐるやうに見えまして、氣味が悪いのでございます——こんな鹽梅でつい昨日まで目を送つて來たのでございます……ところが昨夜、いえ今朝です、それも午前の二時頃です、私は再度室の窓が燐の光に反射して、銀色に輝くの認めました。そこで私は飛び起きて窓の側まで走つて行つて、首を出して戸外を覗きましたところ……。」

夫人は此處で聲を呑んだ。

「恐ろしい〜何んて恐ろしいんでせう！　私は今でも思ひ出すと夢では無いかと思ひますの。どうでせうほんとに眼の縁だけ燐のやうな光に輝いてゐる大きな犬のやうな動物が、良人の居間の窓の枠へ前足を二本しつかりと掛けて、硝子戸越しに主人の居間を覗き込んでゐるではございませんか。あやうく叫聲をあげようとしてやつと私は聲を呑み、狂人のやうに手を揉みながら、ちつと聞耳を立てました。良人の室から噎れた良人の言葉が洩れましたから……」

——POV——湖！——埋もれた都會！……歸つてくれ〜恐ろしいコ……マ……イ……

又……—。

噎れた良人の聲の中から私に聞き取れた言葉と云へばたゞ是丈けでございました。それとて私には何んのことだか些少も意味は解かりませんでしたけれど——主人が喋舌つてゐる間中、怪獣は身動き一つせず、ちつと聞き澄ましてゐるのです。主人の聲が途切れた時突然獣は飛び上がりました。さうして一本の前足を硝子戸の枠へ掛けたかと思ふと、どうでせうスル〜と硝子戸が、横へ開いたではございませんか。良人は叫び聲をあげました。さうして床へ倒れたと見え、ドシンといふ音が聞えて來ました。其後の記憶はございません。私も氣絶致しましたので。

市長夫人は沈黙した。室が俄に寂然となつた。

「大體事情は解りました。」レザールが其時靜かに云つた。「そこで奥様のご心配は——何よりも奥

様のご心配は、市長閣下の健康が以前からあまり勝れてゐず、現在あまり質のよくない心臓病にかかられてゐる、その點にあるのでございませうね？　ところで閣下の御容態はどんな鹽梅でございませう？」

「おや！」

と夫人はまた呆れて、

「どうしてそんな事御存知でせう？　良人の心臓のよくないことは、私以外どなたも知らない筈ですのに。」

「しかし探偵といふものはこれと思ふ人と逢つた時、たゞぼんやりと其の人を見守つて居るものではございませぬ——顔の特徴、體の様子、そして又握手などする場合には、其人の脈膊をさへ計ります……市長閣下にお目にかゝつた時、流石は有名な探検家として阿フリカを初め印度南洋中央亞細亞新疆省と、蕃地ばかりを經巡ぐられて太陽の直射を受けられたゝめか、お顔の色の見事さは驚くばかりでありましたが、さてかんじんの脈膊はといふと、どうやら亂れ勝ちでございました。ハ、ア心臓がお悪いな。その時私は思ひましたので。」

「仰有る通りでございませぬ。夫人は憂はし氣に云つたものである。印度から故郷へ歸りましたのも、その病氣のためでございました。」

「ところで目下の御容態は？」

「危険といふほどではございませぬけれど……醫者が私に申しますには、もう一度こんな様な驚愕を——神経と心臓とをひどく刺戟する病氣に大毒な驚愕を最近に經驗するとなると、生命の程も受け合はれないなどと……或は脅かしかも知れませぬけれど……」

「は、あそのやうに申しましたかな？」

レザールは黙つて考へ込んだ。僅に開けられた窓の隙から春の迅風に巻きあげられた櫻の花瓣が洞を巻いて、洋机の上へ散り亂れてゐたが、ふたゝび吹き込んだ風に飛ばされ何處へともなく舞つて行つた。

隣室で時計が十一時を報じ、なま暖かい春陽の光が洪水のやうに室に充ち窓下の往來を樂隊が、笛や喇叭を吹き乍ら通つて行くのも陽氣であつた。

夫人は深い吐息をして、

「さういふ譯でございませぬので、燐光を放す怪獸が二度と窓の邊へ來ないやうに、致したいのでございませぬけれど、併しこれを警視廳へ届け、警官の方に来て戴いて邸宅を守つてなどいたゞいては、事がある限り大仰になり、世間一般に知れましたら良人が意氣地なしにも見えますし……」

「いかにも左様でございませぬ——世間一般に知れますより、敵黨の連中に知られることが閣下に執つては不得策の筈で。」

レザールは片眼をつむりながら、少し皮肉に云つたものである。

「はいその通りでございます……良人が市長になるに付いては大分反対者がございまして、選挙も苦戦でございました……ですから良人が今になつて心臓の悪い病人などと敵黨の人達に知られましたら、乗ぜられないものでもなし、それに犬のやうなそんな獸に脅かされたなどと思はれましたら、市長の威厳に關しますので。」

「それで私達民間探偵に御依頼なさらうとなすつたので？ いやよく事情はわかりました。出来るだけお力になりませう。」

「どれほど費用はかゝりましても、その點は御心配下さいませんやうに。」

夫人は云つて口籠つた。レザールは領いたばかりである。で復二人は黙り込んだ。

「それで」とレザールは重々しく、「御依頼の件は怪物が今後一切窓の側へ現はれないやうに警戒する——たゞそれだけでございませうか？」

夫人はちよつと躊躇したが、

「はい、たゞそれだけでございます。」

「怪物の正體は何であるか？ 何故窓の側へあらはれたか？ 閣下が怪物を見られた時、何故獨言を洩らしたか？ そして何故卒倒なされたか？ 調べる必要はございますまいか？」

夫人は復も躊躇したが、

「いゝえ必要はございません。」

レザールは其眼をグル／＼と廻はし、彼獨特の惡戯兒のやうな、無邪氣だけれど意地の悪い、微妙な笑ひを洩らしたものの、夫人の消れた様子を見ると直ぐその笑ひを引つ込ませた。

彼は母指の爪を噛み——彼の一つの癖である——天井の方へ眼を遣り乍ら、可成り長い間考へてゐた。それから夫人へ質問した。

「奥様、あなたは御良人と何時頃御結婚なさいましたな？」

「はい、今から一年前、印度に主人が居りました時に……私も印度に居りましたので。」

「それでは奥様はそれ以前の閣下の行動に關しては御存知ないわけでございますな？」

「良人が話してくれませんでしたので。」

「それでもう一つ最近に於て——先月十日以前に於て、誰か様子の怪しいやうな訪問客はございませんでしたかな？ 閣下に對する訪問客で……」

「いゝえ、一人もございませんでした。素性の解かつた方達ばかり他にはどなたも参りませんでした。」

「それでもう一つ閣下に於かれては、どなたと一番お親しいので？」

「私と違ひまして私の良人は誰とでも快く逢ひますので來客も多うございますが、探検好きでございませうから、矢つ張りこれも探検好きのエチガイさんとは特別に親しいやうでございませう。」

「は、あエチガライさんでございませうか？ 動物園長のエチガライさん？」
 「はい、さやうでございませう。」

三

「これは重大のことですが。」レザールは俄に重々しく、「エチガライさんが来られた場合の閣下の態度はどんなやうでせう？」

「大變親しいのでございます。すぐと書齋へ引つ込んで内から扉へ錠を下し、一時間でも二時間でも話し合ふのでございます。良人がこれまで探検したいろ／＼の地方から發掘した動物の骨とか瓦とかそんなものを二人で研究したり、それに就いて二人で議論したり、そしてどうやら二人して著述にでもかゝつて居りますやうで。」

「いゝことを聞かして下さいました。大變参考になりさうです。」

レザールは親しうにかう云つたが、

「ところで園長のエチガライさんは、たしか閣下の御周旋で今の位置につかれたといふことですか？」

「左様でございます。私達が印度を引き揚げて當地へ参り、ものゝ一月と経たない頃訪ねてみらしたのでございまして……」

「どちらから来たのでございませうな？」

「あの方は良人の友人で、私とは關係がございませんし良人も私にあの方に就いては何とも話してくれませんので、どちらから参られたか存じません——けれど良人に執りましては、大事な人と見えますして、たゞ今の地位も見つけてあげるし、金銭上の援助なども、時々するやうでございませう。」

「もう一つお訊ね致しますが、印度から當地へ参られてから、盜難とか又は紛失とか、さういふ種類の災難におかゝりなすつたことはございませうまいか？」

「さあ。」と夫人は首を傾げ、しばらくちつと考へてゐたが、「いゝえ、無かつたやうでございませう……けれど、たつた一度だけ——いゝえ恐らくこんな事は参考になんかなりませうまい。」

「それは一體どんなことですか？」レザールは却つて熱心に訊いた。

「先月の初めでございましたが、新米の女中が誤まつて良人の書齋を掃除しながら、捨てゝはならない紙屑を掃きすてゝ了つたとかいふことで、良人が大變な權幕で叱りつけたことがございました。」

「すてゝはならない紙屑を女中が掃きすてたといふのですな？ ハ、アこいつは問題だ！ 閣下が憤慨なさる筈だ！ そして女中はどうしました？ 勿論お宅には居りませうまいが？」

「短氣な女中でございますして、叱られたのが口借しいと云つて暇を取つて歸つて了りました。」

「行衛は不明でございませうな？」

「女中の行衛でございませうか。いゝえ判つて居りますので。」

「え、何んですつて？ わかつてゐる？ さうして何處に居るのですかな？」

「エチガライ様のお宅にですの——エチガライ様がその女中を最初にお世話して下さいましたので。」

レザールは元氣よく立ち上がった。さうして夫人へ頭を下げ、例の微妙な微笑をして、

「奥様、御安心なさいまし——もう怪獣はこの市中へは、決して姿は出しますまい。出さないやうにいたさせよう。」

夫人もスラリと立ち上がった。

「それで安心いたしました。」かう云つて右手を差し出して、レザールにその手を握らせてから、レザールに扉口まで送られて、夫人は室から出て行つた。

レザールは椅子迄歸つて来たが、先刻から黙つて聞いてゐたダンチョンへ其眼をふと注いで、
「どうだダンチョン、此事件は？ 面白い事件とは思はないかな？」

「面白さうな事件だね、どうやら怪物の正體が君には解かつてゐるやうだね。」

「まあさういつた所だらう。」レザールは腕を組みながら、獨言のやうに云ひつゞけた。「市長は有名な探検家で……新置省へも行つた筈だ…… RV の沙漠……埋もれた都會……それからさうだ

湖だつた……エチガライといふ變な男……それ前に狢犬があつたつけ……怪しい女中……紛失した紙片……燐光の怪獸に市長の氣絶……そして市長は心臟病だ……百萬の富を有してゐる——どうだダンチョン、これだけの事實がこれだけ順序よく揃つてゐたら、君にだつて真相は解かるだらう？」

「ところが僕には解からない。」

「よつほど君は鈍感だよ。併し素人だから爲方が無い……所で夫人の話の中で、怪しいと思つた人間が君には一人もなかつたかな？」

「エチガライといふ男が怪しいね。」

「即ち動物園長だ！ 動物園長が怪しいと見たら君はどういふ處置を執るね？」

「何より先に動物園へ行つて、園長の様子をうかがうね。」

「まづそれが順序だらう……ところで既にラシイヌさんが動物園へは行つてる筈だ——もうすぐ電話のかゝる頃だ。」

さういふ言葉の終へないうちに、卓上電話のベルが鳴つた。

「さうら見給へ！ 云つた通りだ。」

レザールはいそいで受話器を取つた。

「モシ〜。」と彼は呼びかけた。「ラシイヌさんでございませうか？……私はレザールでございま

す。あなたから電話のかゝるのを待ちかねてゐたのでございますよ……え、何んですつて？ 市長夫人？ 市長夫人でございますか？ 市長夫人は先刻参つて今歸つたばかりでございます。大分心配して居りました……それで、事件の真相は、解決なすつたのでございませうね？……今迄手がけた事件のうちでこんな樂な事件はございせんので。全く一目瞭然です……ところで、ところ……え、何んですつて？ 私を馬鹿だと仰有るので？」レザールはひどく驚いて耳へあてた受話器を下へ置いた。が復あわて、耳へあてた。ラシイヌの聲が聞えて来る……。

「……今まで手がけた事件のうちでこんな樂な事件はございませんで？ 籠が弛んだぞ、おい、レザール！ 君はまるつきり此事件の性質といふものを知つてないな！ 表面きりしか見てゐないな！ だから暢氣でゐられるんだ！ 君はほんとにお芽出度いよ！ 君はまるつきり赤ん坊だ！ 事件の奥の奥の方をちよつとでも君が覗いたら君はおそらく恐ろしさに夫れこそ氣絶して了うだらう！ 君はこの事件の根本を一體何んだと思つてゐるんだ？ 戀愛でもなければ金でも無い！ もつともつと執念深い、もつともつと破天荒な人種と人種との争ひなんだぜ！ さうして、いゝかい、しかも今夜、僕達が迂濶りしてゐるやうなものなら、このマドリツドの市民達の數百人は殺されるのだ！ さうして、いゝかい、この市中は、猛獸毒蛇の巢になるのだ——で君に命令する！ 今夜二時にどうあつても動物園まで来てくれたまへ。いゝかいレザール、忘れるなよ。僕の命令と云ふよりもマドリツド市民の命令なのだ！ 命令といふより懇願なのだ！」

ラシイヌの電話は此處で切れた。レザールは兩腕を組んだまゝ、深い疑惑に陥入つた。

四

動物園は市の中央、且公園の中にあつた。公園の周圍は目抜き通りの街路で、十二時を過ぎても向人通りが賑かにゾロ／＼續いてゐた。しかし流石に二時となると、商店では窓々の扉を鎖ざし電車の軋りも間遠となり、時々疾走する自動車の音が、人々の眠りを醒ますばかりであつた。

公園は樹木に圍まれてゐた。百年又數百年、年を重ねた大木が、枝を交へ葉を重ね、その下に深い闇にして夜空を轟々と聳えてゐた。且公園は一週すると殆んど二里にも達しよう、森に林に丘に池、所々に建物が立つてゐて、到る所にベンチがあつた。四邊は嚴重な煉瓦の壁で、壁を蔽うて内と外に藪々と樹木が繁つてゐた。晝間のあひだに騒ぎつかれて夜は靜かな鳥や獸の深い眠りを驚かすのは、近頃阿弗利加から送られて來た二匹の牝牡の獅子であつた。

檻に馴れない沙漠の王は格子の間から空を眺め、初めは悲し氣な呻り聲、それから次第に高くなり、やがてその聲を聞いたゞけでも氣の弱い獸は血を吐いて死んで了ふと云はれてゐる雷のやうな吠聲をあげるのであつた。

その雷のやうな吠聲がだん／＼嘆くやうな呻きとなり、そしてブツツリ絶えた時、夜は一層深くなり闇が一層濃くなつたやうに思はれる。……

今その聲が絶えたばかりで、あたりは死んだやうに静かであつた。其時一つの人影が闇の中から産れたやうにどこからとも無く現はれて正門の横の潜戸の前で、戸に身を寄せて立ち止まつた。内部を窺つてゐるらしい。すると忽然潜戸の戸が内の方から開けられて、そこから一人の園丁が上半身を突き出した。

「レザール君かい？」と園丁は闇をすかして聲をかけた。

「ラシイヌさんですか？ レザールです。」闇の中の人影は前へ出た。

「恰度時計が鳴つたとこだ。確に今は午前二時だ……さあすぐ内へ這入りたまへ。」

レザールは潜戸から忍び込んだ。忽ち潜戸の戸が閉まる。

二人は暗い園内をそろりと先へ歩いて行く。ラシイヌは一言も云はなかつた。それが一層レザールには物凄いいことに思はれた。

二人は成るだけ木下闇の目目にたゝない闇の場所を、選りに選つて歩いて行く。

「止まつて。」

と突然ラシイヌは鋭い忍び音で注意した。で、レザールは立ち止まつて前方の闇をすかして見た。窓々へ鐵戸を嚴重に下ろして、屋内の燈火を遮断した、小柄の洋館が立つてゐる。園長の住んでゐる官舎らしい。闇に馴れた眼をちつと据えてレザールは官舎を注視した。すると意外にも官舎の前の芝生の上

に一團の、蠢めくものゝ形があつた。よくよく見ると人間で、十人に近い人数である。圓く芝生に胡坐をかき、額を土へ押し宛て、何事か祈つてゐるらしい。ブツ／＼といふいとも小さい呟きの聲が聞えて来る。祈禱の聲でゝもあるらしい。

すると突然その中から一人の男が立ち上がった。やゝ明瞭と云ふのを聞けば、それは回教の祈禱であつた。

「アラ、アラ、イル、アラ……唯一にして絶對なる吾等の神よ……吾等をして強くあらしめたまへ！ 吾等をして敵を殺さしめたまへ……何物をも吾等より奪ふ無く、何物をも吾等に與へたまふ神よ！」

その男は両手を空へ上げ、手をあげたまゝ腰を曲げ、地面へその手の届くまで、上半身を傾向けた。それから再び腰を延ばし、両手で空を煽ぎ立てた。それから復も腰を曲げ、地面へ両手を届かせた。さうしては延ばし、さうしては曲げ、幾十回となく繰り返した。

其時かすめた太鼓の音が——鈴の音のする手太鼓の音が、圓座を作つた眞中から、夢のやうに微妙に聞えて来た。と夫れへ銀笛の音が混つた。幽に幽に鉦の音も——その不思議な調和といふものは！ 人をして深い眠りを誘ひ、夢中で人を歩かせる様な、又この歐洲の何處へ行つたとして、到底聞く事の出来ない様な、東洋式の其調和！ 單調で物憂い太鼓の音。人間の靈魂を地の底から引き出して来るやうな笛の音。聞く人の心をせき立て、犯罪の庭へでも迫ひやるやうな、

慘酷な調子の鉦の音……小聲で唱へる合唱の祈禱。さうして何時迄も何時迄も同じ禮拜をつづける男！ 時刻は深夜の二時である。

レザールは物凄さに身顫ひした。

物凄さはそれだけではすまなかつた。次の瞬間に起つた事件の物凄さと不思議さとはレザールに執つて生涯忘れられないものであつた。

見よ、正面の石造の、洋館の扉が徐々に開いて、そこから静々とあらはれた、燐光を纏つた動物を！ 動物の全身は白金が朝の太陽に照らされた様にカッと凄まじく輝いてゐる。怪獣は石段を一飛びに飛んで、回教徒の圓座へ近寄つて來た。さうして四本足を折り、彼等の前へ蹲まつた。

教徒の唱へる讚美の聲は其時一際高くなり、深沈と寂しい音樂の音は次第に急速に鳴り渡つた。空間に手を上げ手を下げて何物かを熱心に招いてゐた彼等の中の一人が、その時其手を怪獣の背へ、電光のやうに觸れたかと思ふと、燐光の怪獣は一躍し恰度火焰の球のやうに、廣大な園内を一文字に門のある方へ走り出した。と其門が大きく開いて怪獣はそのまゝ街の方へ矢よりも速く走つて行き見る見るうちに見えなくなつた。

怪獣の姿が見えなくなるや音樂の音色は急に止み、十人の教徒は立ち上がった。そして動物の檻の方へ足を早めて歩き出した。手を上げて何物かを招いてゐたその男が先頭に立ちながら。

ラシイヌは急にしつかりとレザールの手を握つたものである。

「見たまへ、先頭のあの男を！ 女中に化けて市長の家へ住み込んだのが彼奴だよ。」

「それでは女ではないのですね？」

レザールは驚いて訊き返した。

「なんの彼奴が女なものか。それに決して西班牙人でも無い。」

「では一體何者なので？」

「長く歐羅巴にはゐたらしいが、たしかに彼奴は東洋人だよ。回鶻人といふ奴さ。」

「回鶻人ですつてあの男が？ 併し現代の社會には回鶻人といふ奴はゐない筈ぢやありませんか。」

「歴史上では滅びてゐるが、しかしあの通りゐるのだよ。」

「一體どこから來たのでせう？」

「新疆省の羅布の沙漠、羅布湖のある邊の流沙に埋められた昔の都會！ そこから彼奴等は遣つて來たのだ！」

「で、どこへ行くのでせう？」

「檻を開放しに行くのだよ。猛獸や毒蛇を檻から出して、マドリッドの市中へ追ひ放し、深夜の市中を騒がすためにね。」

「いづれ理由があるのでせうな？」
 レザールは髪を掻きむしつた。
 「理由はつまり復讐だ！」
 「マドリッドへ復讐するのですか？」
 「マドリッドの住人のある一人が、彼等を憤怒させたからさ。」
 「どんな悪いことをしたのでせう？ さうしてそれは何者です？」 レザールは益々いらいらした。
 「マドリッド市長が彼等の寶の、經文の一部を取つたのだ——つまり發掘したんだね。そこで彼等はその經文を取り返へすために出て來たのさ。」
 「ふうむ。」とレザールは呻くやうに、「市長の書齋を掃き乍ら、贖物の女中が掃きすてたといふ、例の紙屑といふ奴が、その經文の一部ですな？」
 「その紙屑を取り返へすために、女中に化けて住み込んだり、燐光を放す狛犬を、人工で拵へておつ放し、市長を脅したつてもものさ。」ラシイヌは悠々と説明した。
 「私も贖物だと思ひました。」レザールはいくらか昂奮したが、「……つまり私はこの事件を、こんなやうに解釋しましたので……」
 「話はゆつくり後で聞くが……君は一體怪物を——燐光を放す怪獸を——何の贖物だと思つたかね？」

「恐らく犬か狼へ、燐光を放す薬品類を塗つたものだと思ひました。」
 「犬か狼かいつれ直さに彼奴の正體は解かるだらう。……見給へ見たまへ回鶻人が、猛獸の檻を開らいたから。」
 見ると彼等は四方に分かれ五つの檻の前へ立ち、パツと一齊に戸を開けた。そして烈しく叱咤した。
 「シート、シート、シート、シート、シート、シート、シート、シート。」
 しかし猛獸は——獅子も虎も、容易に現はれては來なかつた。
 が、その次の瞬間には、五つの檻から猛獸が——猛獸のやうな眞黒のものが、吼え乍ら一時に現はれて、回鶻人を取り圍み、彼等を捕へようと轟めいた。
 園内は回教徒と警官との格闘の庭と一變した。檻から出たのは警官であつた。
 「歸らう。」

とラシイヌはゆつくりと門の方へ足を向けた。
 「是でもう萬事片づいた。後は警官に任せて置かう。」
 レザールは何んとも云はなかつた。たゞ黙々と蹤いて歩く。
 警官の叱咤、回教徒の怒號、鳥獸の吠聲や啼聲で戦場のやうな動物園を、見返へりもせず二人

の者は正面の門から街へ出た。街には何んの異状も無い。市民は眠つてゐるらしい。其時、一臺の自動車、突然横手からあらはれた。警官が数人乗つてゐる。「とまれ！」とラシイヌは立ち止つて、片手を上げて合圖をした。

「どこで怪獣は捕らへたな？」
ラシイヌが笑ひ乍らかう云ふと、警官達も笑ひ出し、「府廳へ行く道の中央で。……いや飛んでもない怪獣だ。」
「レーザル君、見るがいゝ。これが怪物の正體よ。」

ラシイヌはレーザルを押しやつた。
自動車の中には東洋犬の毛皮を冠つた人間が、昏々として眠つてゐた。
レーザルはその顔を見詰めたが、

「こりや園長のエチガライだ！」
「即ち怪獣の正體さ——よろしい、諸君、では怪獣を病院へかまはず運んでくれ給へ。」
自動車は再び爆音をたて、街路を迂るやうに走り去つた。
「行かう、レーザル、ぢや左様なら……明日君の家を訪問しよう。その時君の話しを聞かう。今夜は眠いから失敬する。」
ラシイヌはクルリと體を向け、横町へズン／＼這入つて行つた。

五

その翌日のことである、ラシイヌとレーザルと美術家とが、レーザルの室で落ち合つた。矢つ張り麗かな春の陽が、南歐櫻の香と一緒に室の中へいつぱいに射してゐた。
「……夫人の話聞いてゐるうちに、動物園長のエチガライが、疑はしいと思ひましたので……」

レーザルはいくらか恥しうな、思ひ違ひを取ちるやうな、感激の伴はないぼやけた聲で、自分の解釋を一通り、ラシイヌに説明するのであつた。
一さぐつて見ようと思ひましたけれど、ラシイヌさんのことですから、私より先に動物園へ行つていらつしやるに違ひないと此友人のダンチョン君とも噂してゐたのでございます。すると果してあなたから電話がかゝつたといふものです——しかし私はエチガライが、自分で犬の皮を着てマドリッド市中を駆け廻はつて市長の窓まで行つたとは夢にも想像しませんでした。私はこのやうに思ひましたので——市長もエチガライも探検家だ。ところが市長は財産家で選ばれて市長の職にも就いた。そこへエチガライが訪ねて来ると市長は熱心に周旋して園長の職に就けてやつた。時々金銭の援助もする。普通の友人の情誼としては少しく親切に過ぎるやうだ。或は二人の間には他人に云はれない利害關係が……つまり市長が探検先で不正財寶の發掘でもしてそれで財

産家になつたのを、あのエチガライが知つてゐて、世間へ發表しない代りに動物園の園長といふ立派な位置を得たのではないか？ かう思つてゐると又夫人が、市長の書齋の紙屑を、エチガライの世話した新米の女中が、掃き出して了つたと云つたのですから、ハ、アそれではその紙屑は、不正財寶と關係のある、地圖か證書かに相違ない。それを女中に盗ませたのはそれを種にして屹度市長を脅迫して金でも取らうとしたのだらう——さうして例の怪獣は、動物園の犬か狼へ人工で燐光を纏はせたもので、それを市長の眼前へ出して、驚かせたといふものも、矢つ張り脅迫の意味からで、即ち燐光の怪獣と、不正財寶の間には何等かの脈絡があるのだらう。それを市長が見た以上厭でも應でも脅迫者の自由にならなければならぬといふ、奇怪な弱點であるのかも知れない。そして市長が怪獣を見るや、ROV、湖、埋もれた都會と絶叫したといふことだから、不正財寶を發掘したのは、支那新疆の羅布の沙漠の、羅布湖のほとりに相違ない。そして市長は尙叫んで、恐ろしい狢犬といつたといふから、燐光を纏つた怪獣は或は羅布湖の岸の邊に住民の尊敬する神殿でもあつて、その社頭の狢犬と深い關係でもあるのかも知れない。兎に角事件の張本は園長エチガライに相違ないと斯う睨んだのでございますが、併しまさかに園長自身が怪獣であるとは思ひませんでした。」

「夫人の話の聞いただけで其處まで看破したところに君の天才が窺はれるね。」

ラシイ又は愉快さうに頷いたが、

「實はね、僕も、正直のところ、動物園で調べる迄は、矢つ張り君と同じやうにエチガライを疑つてゐたものさ。あいつが犯人に違ひ無いとね。ところで僕は君の考へより、一つだけ餘分に考へたつてものさ。それは燐光の怪獣だが、是には必ず何等かの迷信がからまつてゐるだらう——そこで圖書館へ飛んで行つて、回鶻邊に擴がつてゐる土人の迷信を調べて見ると、有つた有つた大有りだ。あの邊に僅に残つてゐる、回鶻人の後裔達は——土耳其人との混血兒だが——燐光を纏つた狢犬を彼等の神の本尊とし、狢犬を祭つた神殿に對し、もしも無禮を加へたものは恐ろしい神罰を蒙るだらうと、かう書いてあるその後へ、神罰の例が二つ三つ記してあつたといふものさ。神社の財寶を盗める者——狢犬の吠聲を耳に聞き、悪性の熱病にかゝる可し。神殿の經文を盗めるもの——狢犬の姿を三度認め、三度目に命を失ふ可し云々……」

「それでは園長のエチガライは回鶻人の後裔かな？」僕は其時疑つたものだ。兎に角僕は大きく遠くから金貨を一つ投げてやつた。すると女中は兩足を開けて、腰を曲げ乍ら受け取つた。で男だとわかつたのさ。投げられた物を受ける時女なら兩足を閉ぢるからね。それから後は君が昨夜、親しく見た通りといふものだ。回鶻人といふ奴は——彼等だけでは無いけれど、一體に無智

の人間ほど不思議な力を持つてゐるもので、彼奴等はつまり妖術者なのだ。催眠術かも知れないが、兎に角一種の法力で、人間の心や體付まで獸類に一變させるのだよ。……見込まれたのが園長だ。園長は決して悪人では無い。一個の學究に過ぎないのさ。學者といふ者は馬鹿のやうなものだ。融通が利かないで正直だ。其處へ彼奴等はつけ込んだのさ。その上園長は市長の友で市長の家の案内を知り抜いてゐるから都合たつた譯さ。そこで彼奴等は法術で——謂はゞ一種の呪縛だね。園長の意志を縛つて了つて、彼奴等の意志を代りに注ぎ込み、兼て用意をして置いた細工を凝らした獸の皮をスツポリ園長へ着せて了つて、そこでおつ放したといふものだ。かうして市長を脅したのさ。經文を盗んだくらゐだから、勿論市長はその狛犬の迷信も知つてゐたに違ひない。燐光を放す狛犬を見てハツと思つたのは當然さ。それに市長は心臟病だ。一度ならず二度三度、そんな狛犬を見たとすると、心臟麻痺を起すかも知れない。さうしてほんとに死んだかも知れない……眞個にあぶない所だつたよ。それで彼奴等は昨夜を最後に、引き上げようとしてゐたものさ。行きがけの駄賃に猛獸を放し、憎いマドリッドの市民達を——つまり彼等は東洋人で、あらゆる歐羅巴の人間を人種的に憎んでゐるのだからね——食ひ殺させようと計つたものさ。幸ひ僕が氣がついてすぐ警視廳へ電話をかけ、警官をひそかに呼び寄せておいて、園丁達に云ひふくめ、豫じめ猛獸を檻の中から出しておいたからよかつたものゝ、左様でなかつたら市民達の圓かな眼は醒まされたらう。」

「しかしどういふ方便で回鶻人のあの男が園長と知るやうになつたのでせう？」
 「そんなことどうだつていふぢや無いか。そこが學究の馬鹿な點さ。實はね、此處へ来る前に病院へちよつと寄つたものさ。エチガライ氏にいき逢つてその點に就いて訊いて見ると、その説明が面白い——それは或時エチガライ氏が町を散歩してゐると、若い女の乞食が来て手の中を乞ふたといふものだ。と見ると女の容貌が微妙な雜種を呈してゐて氏の好奇心をそゝつたので、そのまま家へ連れて来て女中に使つてゐるうちに、友人の市長に懇望され讓つてやつたといふことだつた。」

「聞いて見れば何んでもありませんなあ。」

レザールは思はず呟いた。

「どうです。」とラシイヌは畫家を見て、「あなたがもしも小説家ならよい小説が出来ますな。」

「神祕でそして幽幻で大變面白い材料です。空想畫として面白い。燐光を放つて走つて行く、獸のやうな人間を、一つ油繪で描きませうかな。」

「獸人といふやうな題にしてね。」

ラシイヌは笑つて云つたものである。

麗かな春の午後である。

六

(以下は支那青年張教仁の備忘録の抜萃である)
 夕暮は室へも襲つて来た。卓上のクロツカスの鉢植の花は、睡むさうに首を垂れ初めた。本棚の上に置かれてあるバスコダガマの青銅像の額の邊へも陰影がついた。隣室を割つた垂帳のふつくりとした襞の凹所は、紫水晶のそののやうな微妙な色彩をつけ出した。壁にかけられた油繪のけばけばしい金縁の光輝さへ、黄昏時の室の中の、鼠紫の空氣の中で毒々しく光ることは出来ない。あちこちに置かれた玻璃の道具、錫の食器、青磁の瓶―
 燈火の點かない一刻を假睡の夢でも結んでゐるやうに皆窃やかに静まつてゐる。
 月はもう空に懸かつてはゐるが併し太陽は没してゐない。晝でもなければ夜でも無い。夜と晝との溶け合つた眞に美しい一刻である。
 薄暮時のこの一刻を、私は暫く味はふとして食堂の椅子へ腰かけてゐた。
 耳を澄ませば窓の外の色蕉や蘇鐵の茂から孔雀の啼聲が聞えて来る。名残の太陽を一杯に浴びてまだまだ戸外は明るいと見える。孔雀の啼聲と競ふやうに高い鋭い金屬性の鸚鵡の啼聲も聞えて来る。窓外の壁板に纏つてゐる冬薔薇の花が零すのであらう、嗅ぐ人の心を誘つて遠い思ひ出へ運んで行くやうな甘い物憂い又優しい花の香が開け放された窓を通して響つて来る。その花の

香に誘はれて私の心は卒然と三年前に振りすてた故國の我家へ歸つて行く。……
 夕の鐘が鳴り出した。回教寺院で鳴らす祈禱の鐘だ。冬といつてもこの西班牙のマドリツドの暖さは何うだらう！ 秋の初めと變はりが無い。雪は思か雨さへも此一ヶ月降らうともしない。乾き切つた十二月の空を通して鳴り渡る回教寺院の鐘の音の音色の高いのは當然だ。しかし神々しい鐘の音ももう明日からは聞かれまい。明日はこの國ともおさらばだ。東洋と西洋とを一つに蒐めて亞弗利加の風土を取り入れたやうな、異國情調の極めて深い世にも懐しい西班牙を立つて明日は沙漠へ向かはねばならぬ。支那の西域羅布の沙漠！ そこへ私は出かけるのだ。沙漠は私を呼んでゐる。其呼聲を聞く時は西班牙を懐かしむ心などは跡方も無く消えて了ふ！ 私は今日までまあどんなに其呼聲を待ちかねたらう……冬薔薇の匂がまた匂ふ。三年前に立ち去つた故國の我家の面影が復もわが眼に映つて来る。私の思ひ出は其家へ今なつかしく歸つて行く。

支那廣東花街。そこに私の家がある。家といつても父も母も遠い昔に死に絶えてたつた一人の妹だけが老婆の召使と二人きりで寂しく暮らしてゐるばかりだ。父母は革命の犠牲となつて袁世凱の軍に殺された。そして家財は没收され家の大半は焼き拂はれて了つた。其時私は十五歳であつた。さうして妹は十一であつた。忠義な召使夫婦の者に私達兄妹は救はれた。焼け残つた家へ立ち歸つて父母の屍を葬つてからの私達兄妹の生活は昔の榮華に引き代へて世にも貧

しいものであつた。南支那切つての貿易商、南支那切つての名門の家——その家の形見の私達兄妹は世間の人達からは嘲笑され生き残つた召使達には逃げられて、私達兄妹を助けてくれた老召使夫婦の者だけに傳かれて僅に生きてゐた。そのうち召使の老人は彈傷が原因で此世を去り私達二人の孤兒は良人を失つた老婆一人を手頼りにしなければならなかつた。私は實際其時迄はただ可哀さうな名門の兒——意氣地の無い貴公子に過ぎなかつたが此時慨然と震ひ立つた。私は劍を執つたのだ。革命黨に參じたのだ。孫逸仙の旗下に従いたのである。

「黄蓮！」と私は或日のこと——慨然と立つたその日のこと妹に決心を打ち開けた。「私を自由にさせておくれ。私を戦に行かせておくれ。父母の仇敵は袁世凱だ。彼奴を生かしては置かれぬ。彼奴は民國の仇なのだ！ 彼奴を此まゝ放抛つて置いたら屹度皇帝になるだらう。あんな匹夫を皇帝に戴いて私達は生きて居られるかい。彼奴は匹夫で姦賊なのだ！ 曹操のやうな人間だ。なんの曹操にも當たらぬ。彼奴は寧ろ王莽なのだ！ 王莽を皇帝に戴いた時の漢の天下はどらだつたらう？ 垂い塗炭の苦みに人民はどんなに跪いたか知らなかつた。王莽よりもつともつと袁世凱は匹夫なのだ。その上父母の仇敵だ。私は彼奴を討つために革命軍に投じようと思ふ。どうぞ私を行かせておくれ。私が行つて了つたらお前は屹度寂しいだらう。お前の寂しさを思ひ遣ると私の決心は弛むけれど、國の大事には代へられない。たとへ戦に出て行つても時々家へ歸つて来よう。さうしてお前を慰めてあげよう。私は決心したのだよ。私を自由にさせておくれ。」

れ。」

すると妹は微笑して——眼には涙を溜めてはゐたが——私の言葉に頷いた。

「私に心配はいりません。」妹は優しく云つたものである。「私は老婆とお留守をして何時までも此處に居りませう。そして兄さんの御決心が遂げられるやうに神様へお祈りをして居りませう。」

優しい妹のこの言葉で決心は一層堅くなつた。そこで充分妹のことを老婆に頼んだその後で私は家を出たのであつた。孫文元帥の陣中では私は最初旗手であつた。しかし間もなく自分から望んで軍事探偵の任務を帯び密かに北京へ忍び込み警敵の動靜を窺つた。袁總統の權勢は飛んでゐる鳥を落すほど容易に接近出来なかつた。それでも私は根氣よく彼の身邊を窺つた。斯うして星移り物變り幾星霜が飛び去つて行つた。果然王莽は頭巾を脱いでその野望をあらはした。袁皇帝と稱へやうとした。釜で煮られる湯のやうに中國は俄に騒ぎ立ち袁討伐の呪ひの聲が津々浦々に迄鳴り渡つた。國民の輿望を一身に負つて袁討伐の征鼓を四百餘の洲に響かせたのは孫文先生その人で、漢の代の王莽を滅した劉秀が此世へ現はれたかのやうに、先生の態度は勇ましく先生の人望は目覺しかつた。

その頃私は名を變じ身分を變へ、輕奴となつて袁總統宮殿の門衛の一人に住み込んでゐた。さうして機會を窺つて國と父母の仇を刺さうとした。

或夜深更のことであつた。折柄春の朧月が苑内の樹立や湖を照らし紗の薄衣でも纏つたやうに大體の景色を藹たけて見せ、諸所に聳えてゐる宮殿の窓から垂帳を通して零れる燈火が花園の花木を朧ろに染め、苑内の有様は文字通り全く幻しの園であつた。私は詰所から迂濶々々出て苑内深く逍遙つて行つた。あたりは森と静かである。誰も咎める者もない。

「寂寂タル孤鶯ハ杏園ニ啼キ、寥寥タル一犬ハ桃源ニ吠ユ——」

自分は其時劉長卿の詩を何気なく中音に吟じ乍ら奥へ奥へと歩いて行つた。さういへばほんとに花園の中で鶯が寢とぼけて啼いてゐる。犬も遠くの方で吠えてゐる。

「顛狂スルノ柳絮ハ風ニ随ツテ舞ヒ、輕薄ノ桃花ハ水ヲ逐フテ流ル——」

杜工部の詩を吟つた時には湖水に掛けた浮橋を島の方へいつか渡つてゐた。橋を渡つて島へ上り花木の間に設けられてある亭の方へ靜に歩いて行つた。

その時囁れた老人の聲が亭の中から聞えて來た。

「そこへ來たのは何者ぢや？ いや何者でも構はない。話し相手になつてくれ——さあ此處へ來て腰をかける。」

私はちよつと驚いたが構はず中へ這入つて行つた。でつぷり肥えた小作りの、粗末な衣裳を身に纏つた老人が縁に腰かけてゐる。大輪の木蘭の花の影が老人の顔の上に落ちてゐるのでハッキリ輪廓は解らなかつたが、老人はちよつと眼を閉ちて何か考へてゐるらしく、身動き一つしなかつ

た。私も縁へ腰かけた。斯うして二人は暫くの間ものも云はずに向ひ合つてゐた。

と、老人は眼を開き、その眼を私に注いだが、

「お前は此の景色を何う思ふな？ 林泉、宮殿、花園、孤島、春の月が朧ろに照らしてゐる。横笛の音色が響いて來る……美しいとは思はぬかな？——尤もお前は打見たところまだ大變若いやうだ。自然の風景の美しさなどには無關心かも知れないが。」

「美しい景色だと思ひます。雄大ではありませんが華麗です。自然といふよりも人工的で技巧の極致を備へて居ます。」

「君はなかく批評家だ。いかにも君の云ふ通り技巧に富んだ風景ぢや。君は斯ういふ庭園を所有したいとは思はぬかな？」

「所有つてみたいとも思ひますし、所有つてみたくないとも思ひます。」

私が云ふと老人は囁れた聲で笑つたが、

「君はなかく皮肉屋だね。ところで君のその言葉の、意味の説明を聞きたいものぢや。」

「これといふ意味もありませんが、斯ういふ庭園を持つ者は王侯以外にはございません。斯ういふ庭園を持つといふ意味は王侯になることでございます。男子と生れて王侯となる目覺しいことでもございませし願はしい限りでもございませが、擬王侯になつて見たら側目で見ただほどには楽しくもなく嬉しくもないかも知れませぬ。楽しくも嬉しくも無いのならこんな庭園を所有するや

うな王侯になつても仕方が無い。斯う思ふからでございます。」
 すると老人は忍び音に面白さうに笑つたが、
 「君は老子の徒輩と見える、虚無恬澹の男と見える。二十そこそこの若い身空でさう恬澹では困るぢやないか。どうやら君は此處へ来る時詩を徴吟してゐたらしいが、無慾の君のことだから、
 「贈僧」といふ杜荀鶴の詩でも、暗誦してゐたんぢやあるまいかな？」
 「いゝえ。」と私は笑ひ乍ら、「杜荀鶴のその詩は存じません。私の吟じたのは杜工部です。」
 「知らぬといふのなら教へてやらう——私には思ひ出の詩ぢやからの。」
 老人の言葉には威厳がある。底知れないやうな深みもあり聴いてゐる人を押しつけるやうな壓力さへも持つてゐた。私は次第にこの老人に敬服するやうになつて来た。そして私は疑つた。「この老人は何者だらう？ 官人かそれとも府の役人か？ たゞ者のやうには思はれない。」しかし老人の顔の上には依然として木蘭の花の影が黒々と落ちてゐるために確めることは出来なかつた。
 その時老人は感慨を籠めて杜荀鶴の詩を徴吟した。
 「利門名路兩ナガラ何ゾ憑ラン、百歳ハ風前短焰ノ燈、只恐ラクハ僧ト爲テ心了セザルコトヲ、僧ト爲テ心了セバ總テ僧ニ輪セン——どうぢやな、これが杜荀鶴の詩ぢや。上手の作とは思はぬが私に執つては思ひ出の詩ぢや。只恐ラクハ僧ト爲テ心了セザルコトヲ、私は若い時此の詩を讀んで一生の目的を定めたのぢや。實はこの私も若い時には恰度お前と同じやうに名利の念に薄か

つた。布衣であらうと王侯であらうと人間の一生は同じことぢや。王侯などになつたなら却つて苦勞が多からう。布衣の方が仲々氣樂らしいなど、思つてゐたものぢや。然るに此詩を見た時に私はほんとに斯う思つた。浮世を捨て、僧に成つてさへ決して心了せないものを布衣であつたら尙のこと心は満足しないだらう。どのやうな位置にゐたところで人の心は安まらない。同じく心が安まらないものなら、人と産まれた果報には、思ひ切つて此身を働かせて大事業をするのも面白からう。それが男子の本懐ぢや！ つまりこのやうに思つたのぢや。そこで私は考へた。富貴に向かはるか王侯に成らうかとな、俺は兩方を征服しよう！ 慾深くこのやうに考へた。それから私は努力めたものだ。二十年三十年四十年、馬車馬のやうに突き進んだ。そして美しくかつた青年の私が、いつの間にかこんな老人となり死病にさへもとりつかれて餘命少くなつて了つた。成程私は人間として得べきだけの福祿は得たけれど、得れば得るほど尙得たいといふ望蜀の念に攻められて安穩の日とは一日もない。そして私には敵がある。兇刃、鳩毒、拳銃の類が四方八方から取り巻いてゐる。そして私には死んだ人々の怨靈が日夜憑いてゐて安らかな眠を妨げる。私は金持だが金持だけでもつと大金が欲しいのぢや。小さな野心は大野心を孕み大きな野心は最大の野心を産む。あらゆる人間は野心のために自分の身心を切りきざむ。私はその例の好い標本ぢや。そこで私はかう思つた。杜荀鶴の詩を讀んだ時に何故こんな決心をしたのだらう。こんな決心をする代りに一層出家をしてゐたら多少の安心は出来たらうと。今になつては返らぬ愚痴ぢ

や。もう何うしようにも爲方が無い境遇が私を引つ張つて行く。今更ら出家はもう出来ぬ。私は境遇の傀儡となつて盲目滅法に進む迄ぢや。斯ういふ憐れな境遇に居る私のせめてもの慰めといへば、夜な夜なこのやうに姿を變へてあらゆる人間から遠ざかり、一人自然の懷中へ這入つて悠々と逍遙することぢや。しかし唯一のその樂みも長く味はう事は出来ないだらう。私は死病に憑かれてゐてぢきに死ななければならぬから。

老人はしばらく考へたが重々しい調子で云ひつゞけた。

「明日にも私は死ぬかもしれぬ。斯う云つてゐるうちにも死ぬかもしれぬ。そこでお前に頼みがある。いゝや頼みといふよりも寧ろお前に徳憑るのだ。さうだ徳憑るのだ。」

斯う云つて老人は懷中から小さな手箱を取り出したが、それを私の前へ置き、

「これをお前に進呈する。家へ歸つて開くが、お前の今後の運命は是に依つて屹度定まるだらう。もし手に餘ると思つたら謹んで土に埋めるが、これは天から授かつたものぢや。最初は私に授かつた。私は天からの授かりものを自分のものにしようとした。しかし今ではもう運命の命數は定まつてゐて、どうすることも出来ないのぢや。それで私への福運を改めて私からお前へ譲る。天から授かつたと同じことぢや。しかしどのやうな幸福でも夫れを得ようと思ふには先づ艱難を冒さねばならぬ。手箱の中にある幸福を完全に握らうとするからには矢張り艱難を冒さねばならぬ。その艱難が恐かつたらその幸福を捨てるが、手箱を土中へ埋めるが、

……しかしお前は私の初めて逢つた他人のお前へこんな大切な幸福の箱を何故易々と渡すのかと思ふかもしれないが、それは決して不思議ではない。正直のところ此私は手箱を譲つてやりたいやうな味方を一人も持つてゐない。私の周圍に居る者は一人残らず皆敵ぢや。衣を纏つた狼ぢや。で私は素晴らしい幸運を他人のお前へ渡すのぢや。」

不思議な老人は斯う云ふと縁からスラリと立ち上がった。そして私へは構はずに亭を離て歩き出した。私はしばらく呆氣にとられ老人の姿を見送つてゐたが氣がついて背後から聲をかけた。

「御老人！」と私は忍び音で、「お名前をおきかせ下さいまし、一體どなたでございますか？」

すると老人は振り返つたが、

「この國で一番不幸な男！それが即ちこの私ぢや。」

「この國で一番不幸な男？それが御老人だとおつしやいますか？」

「世間の人は反對にこの國で一番幸福者がこの私ぢやなど云つてゐる。」

「どうも私にはわかりません……」私は老人を見守つた。

「こゝにある宮殿や庭園はみんな此私の所有物ぢや……四百餘州の天も地も今では私の自由になる。私はさういふ人間ぢや。」

私は尙も老人を折柄雲を出た月に照らして、ぢつと仔細に見廻はしたが、吃驚りして飛び上がった。

「あなたは！ さうだ！ わかりました！」
 「わしは寂しい人間だよ！ 一人の味方も無い人間だよ。」
 老人は低く呟いたがそのまゝ静かに歩き出した。そして浮橋を渡つて行つた。私は其後を見送つた。いつ迄もいつ迄も見送つた。民國の仇の後姿、父母の敵の後姿、袁世凱の後姿を手を拱いて見送つた。何故飛びかゝつて行かなかつたのか？ 手箱を貰つた恩義のためか？ いや、決してさうではない。總統の威嚴に打たれたからか？ 何んの何んのその反對だ！ 私は全く袁世凱の寂しい姿に打たれたのであつた。
 ……私は手箱を取り上げた。鐵で造られた粗末な手箱！ 私は月光に照らして見た。何んの奇も無く變もないけれども、ほんとに奇もなく變もないこの貧弱の手箱から私の運命を左右するやうな世にも奇怪な羊皮紙が忽然として出て來ようとは…
 果然、其夜から間も無い或日、袁世凱の突然の死が、世界中の新聞に發表されて世の中の人を駭かせた。あまり突然であつたため、世人は死因に疑を抱き暗殺ではなからうかと噂した。暗殺か自殺か自然の死か私だけには解つてゐた。彼は寂しさに堪へられず寂しさに食はれて死んだのだ。
 其後私はどうしたかといふに、孫文先生の旗下を離れ一旦自家へ立ち歸つて妹や婆やと邂逅した。それから再び家を出て世界の旅へ上つたのである。旅へ出かけた目的は？ 恐らく私が説

明しても誰も信用しないだらう。餘りに荒唐な話しだから。つまり私は手箱の中の羊皮紙に書いてある文字を手頼りに雌雄二つの水晶の球を探し當てようその爲に世界の旅へ上つたのである。斯うしてその球を見つけた時こそ私の運の開ける時で、實に私は一朝にして巨億の財産家になれる筈であつた。
 ほんとに私は三年の間世界の國々を経巡つた。金が無くなれば勞働をし、金が出来ると先へ進み、亞細亞と亞米利加と歐羅巴とを殆んど皆尋ね廻はり三月前から西班牙のこのマドリッドへ來たのであつた。多くの支那人がさうであるやうに料理にかけてはこの私も可成り自信を持つてゐた。いよく金が無くなつて勞働をしなければならぬ時には私はいつも料理人になつた。おんなじでんでマドリッドへ來るや傳を求めて此旅館の料理人に私はなつたのである。そして機會を待つたのである。阿弗利加へ渡るその機會を…が併し今では阿弗利加などは全く眼中になくなつて了つた。珠は手近で發見された。そして私はその球を追つて西域の沙漠へ向ふのだ。彼等と一緒に向ふのだ。彼等探検隊の一行と—
 私は喜びと不安とのためにドキ／＼心臓が動悸をうつ。しかし勇氣は衰へない。何んの勇氣が衰へるものか。何が一體不安なのか？ 彼等探検隊の一行の中の頭領とも云ふべきラシイ又探偵、副頭領とも云ふべきレザール探偵、二人を恐れるその爲にか？ ほんとに二人は抜目の無い鋭い人間には相違ないがしかし私は恐れない。何んの私が恐れるものか、先方で此方を恐れるが

いゝ。
卿等、探検隊の諸君達！ 卿等の守つてゐる運命の珠を出来るだけ大切にすることがいゝ。隙を見
て其珠を奪はうとする支那の青年が居るのだから。料理人として卿等が雇ひ入れた張といふ支那
の青年に眼を離さない方がよいだらうと敢て僕は諸君に警告する……

——孔雀の啼聲が聞えて来る。鸚鵡の啼聲が聞えて来る。冬薔薇の匂ひが匂つて来る。陽の落
ちた後の夕空を夕映が赤く染めてゐる。明日は恐らく天気だらう。この食堂ともおさらばだ。そ
ろ／＼料理人部屋へ歸つて行つて荷造りの眞似でもやることにしよう。
明日は沙漠へ向ふのだ。沙漠が私を呼んでゐる……（備忘録下略）

七

「あの女を君はどう思ふね？」
ラシイヌは小聲で囁いた。

「前から氣がついてはゐましたが、土耳其型の素晴らしい美人ですね——あれをモデルにして描
きたいものだ。」

「描かざる畫家」のダンチョンはこれも小聲で囁いた。ラシイヌはちよつと舌打ちをしたが、一
ヤリと苦笑したものである。

「君の描き度いねも久しいものだ。描きたい描きたいといふばかりで何一つ君は描かないぢやな
いか。だから皆が君のことを描かざる畫家のダンチョンだなんて下らない綽名をつけたのさ——
あれほど君が意氣込んでゐた「獸人」の繪だつてまだ描かない。ほんとに君はなまけ者だ……そ
れはさうと向ふのあの女だが、君は變だとは思はないかね？」

「變だつて何が變なんです？」
「さういふ返辭が出るやうなら君には向ふのあの女の變な所が解らないと見える。いゝかい好つ
く見てみ給へ、今あの女は下を向いて熱心に新聞を見てはゐるが、其實新聞を見てゐるのではな
く僕等の様子を見てゐるのだよ。」

「なんで僕等を見るのでせう？」
「さあね、そいつは解からない。わからないから不思議なのさ。一體どこからあの女は此列車へ
乗り込んだのだらう？」

「チエリアピンスクからだと思ひます。」
「よく君はそんなことを知つてゐるね？」ラシイヌは鳥渡不審さうに訊いた。
「知つてるわけがあるんです。」ダンチョンは何んでもなさうに繪葉書を買はうと思ひまして
ね、チエリアピンスクで汽車が止まると僕は早速下りました。プラットホームへ下りたんです。

下りた拍手に僕の胸へぶつかつて来た者があつたのでヒヨイと顔をあげて見るとですね、土耳其美人が立つてゐるのです。「ごめん遊ばせ。」と佛蘭西語で云つて顔を赧めたといふものです。見ると女の荷物を擔いだ赤帽が背後に立つてゐました。だからあの驛で乗車つたんですよ。」

「ふうん、あの女がぶつかつた？ たしかに君にぶつかつたんだね？ 實は僕にもぶつかつたのさ。クルガンの停車場へ停車く前に煙草を喫まうと思つてね、喫煙室へ出かけたものさ。あの女の前を通つた時だ。不意に女が立ち上がつて僕の腰の邊へぶつかつたよ。その時僕は敏捷に働く手の觸覺を感じたものだ。ズボンのポケットの邊にだね。」

「きつと偶然に障つたんでせう。あんなに美しい若い女がまさかには拘摸はやりませう。」

「……」ラシイヌは返辭をしなかつた。見て見ないやうな様子をして、列車の片隅に腰かけながら新聞を見てゐる疑問の女へちつとその眼をやつたものである。

十二月極寒の西伯利を、巨大なインターナショナル・ツレインは、吹きつける吹雪を突き破り百足のやうな姿をしてオムスク指して駛つてゐる。併し室内は暖かい。暖かい室内には乗客達が各自好みの外套を着て毛皮の襟をしつかりと合はせ座席に腰かけて話してゐる。一等客室のことであるから、誰を見ても大概はカルチュアされた立派な紳士や淑女達で話してゐる言葉も上品であつた。モスクバ訛りの鼻聲で聲高に話してゐる夫婦者、病身らしい十八九の蒼ざめた娘はその横の方でぢつと黙つて聞いてゐる。恐ろしい程によく肥つた寶石商らしい老人は、自分の前に腰

かけてゐる貴公子風的美男子をとらへて、パミール高原で見つけたといふ黒金剛石の話話を話してゐる。その横の方では支那商人が、あたりの様子には無關心に、琥珀のパイプで雲南煙草をポカリ／＼と喫つてゐる。見廻りのボーイがやつて來ると周章てパイプを隠すのであつた。小露西亞あたりの地主らしいむんずりと肥えた四十男は先刻から熱心に玻璃窓を通して日没の曠野の光景を一人黙つて眺めてゐたが、やがてポケットから骨牌を出して一人で占なひを遣り出した。蒙古の豪族とも思はれる五人の伴を連れした老人は、卵型をした美貌を持つた妙齡の支那美人を側へ引き寄せ仲よく菓子を食べてゐる。五人の従者はその様子を東洋流の無表情の眼で寧ろ慇懃に眺めてゐる。トルキスタン人の一團はずつと向ふの客車の隅で、何か間違ひでも起つたと見えて、口八釜しく論じてゐる。そのトルキスタン人の一團を左手に見た片隅に、土耳其型の美貌の持主の問題の女があるのであつた。極めて豪華な狐の毛皮の大型の外套をふつくりと着て體全體を隠してはゐるが、強靱な、それでゐてスラリとした、きやしやではあるが弾力のある、素晴らしく優秀な肉體が外套を通してうかゞはれる。いちじるしく目立つのは其帽子だ。それは深紅の土耳其帽で、帽子を洩れて漆黒の髪が頸へ幾筋かかゝつてゐる。匂ふばかりの愛嬌を持つた、それでゐて鋭い鋼鐵の眼、羅馬型では無い希臘型の、顫へつきたいやうな立派な鼻、その口は——平凡な形容だが——全く文字通り薔薇のやうだ。可愛らしく小さい紫色の靴、形のよい細そりとした黄色い手袋……

彼女が新聞を膝へ置いてちよつと小首を傾げた後、側のバスケットの蓋をあけて中から林檎を取り出した。それから彼女は手袋を脱いで林檎の皮をむき出した。露出した手首が陽に焼けて鳶色を呈してゐることは！

「ね。」とラシイヌはダンチョンに云つた。「どうしても怪しい女だよ。あれだけの美貌とあれだけの服装。どう踏み倒しても命婦だね。土耳其皇帝の椒房に居る最も優秀なる命婦だよ。皇妃と云つてもいいかも知れない。ところがどうだい、あの手の色は！ まるつきり労働者の手の色だ……で其處で僕は思ふのだ。彼奴は唯の女ぢやないよ。」

「それぢや拘摸たとおつしやるので？ あの素敵もない別嬪を？」ダンチョンは不平さうに云つたものである。「僕には怪しいとは思はれませんね。彼女は屹度旅行家でせう。だから陽に焼けてゐるんですよ。」

「手首だけ陽に焼けるわけがないよ。」

「土耳其婦人はいつの場合でも面纱で顔を隠すさうです。顔や頸が焼けなくて手首だけ焼けるのはそのためでせう。」

「成程。」とラシイヌは微笑して、「その解釋はよいとしても、どうして常時僕等の方へあゝも視線を向けるのかね。彼奴の注意を引くやうな好男子は一人もゐない筈だ。」

「視線を向けると思ふのは恐らくあなたの眼違ひでせう。僕にはさうは見えませんがね。」

「よし。」とラシイヌは語氣を強め、「レザールの意見を聞くとしよう。」

彼は車中を見廻したが、同業であり後輩である私立探偵レザールは、どこの腰掛にも見えなかつた。はるか向ふの窓際に此一行の立役者の博言博士マハラヤナ老が——世界を擧げて探しても十五人しかゐないといふ回鶻語の學者とは思はれない程の好々爺然とした微笑を含んでコクリコクリ居眠りをしてゐる横に、是れも矢つ張り同行の冒険好の醫學士で一行の衛生を擔任してゐるカルロス君がゐるばかりで、レザールの姿はどこにも見えない。

ラシイヌはいくらか不安になつた。といふのは一行の守本尊の水晶の珠を密封した鐵の手箱をそのレザールが體に着けてゐるからである。

ラシイヌは席から立ち上がった。しかし其時連結されてゐる隣りの客車の扉があいて、レザールが其處から現はれたのでラシイヌは安心して腰かけた。

レザールは何故か眉をひそめラシイヌの側へやつて來たが、耳へ口をつけると囁いた。「あなたは料理人をどう思ひます？ あの張といふ支那人を？」

「變つたことでもあるのかね？」ラシイヌは不思議さうに訊き返へした。

「地圖を持つてゐるのですよ。」

「地圖!？」とラシイヌは眼を見張つた。その眼でレザールを見守つて、「もつと詳細く話したまへ。」

「今……」とレザールは話し出した。「オムクスへ着くのも間もないので一應道具類を見て置かうと三等の客車へ這入つて行きますと、監視を命じておいたあの張が道具の積み重ねを前にして熱心に何かを見てゐるのです。近寄つて肩越しに見るとですね。西域の地圖ぢやありませんか。「張！」と私が聲をかけるとバネ仕掛けのやうに飛び上つて地圖を懐中へ隠しました。「地圖を見せろ！」と嚇してもどうしても見せようとしませんのです。「何んのために地圖を持つてるか？」とかまはず詰問しましたところ。「幸ひに縁あつて皆様の探検隊の一員となつて西域に向ふことが出来る以上は極力私も骨を折つて皆様のお手傳ひが致したいと思ひ西域の地圖を求めました。」と斯ういふ彼の云ひ草です。「どこでその地圖を手に入れたか？」尙も私が尋ねますと。「西域は支那の領地です。私は支那人の事ですから地圖などは容易に手に入ります。」と何んでもない様に云ふのです。成程理窟にはかなつてゐますが、それほど理窟にかなつてゐるなら尙の事地圖を見せればよいのにどうしても見せようとしませんのです。「レザールはちよつと云ひ淀んだが、「こんな具合であの支那人は胡亂な人間だと思ひますので、一層思ひ切つてオムクス邊で解雇いたしたら如何でせう？」

「解雇するのもよからうが旨い料理が食へなくなるね。」ラシイヌはニヤ／＼笑ひ乍ら、「ところで張のその地圖と僕等の持つてゐる西域の地圖とは全く同一のものだらうかね？」

「私は瞥見したゞけで正確のところは云はれませんが同一のものらしく見えました。」

「僕等の持つてゐる西域の地圖はヘヂン博士の著した實地踏査の寫生地圖で他に類例の無いものだがそれを持つてるといふからには料理人は確に怪しいね。僕等の地圖を模寫したか若しくは瑞典まで出かけて行つてヘヂン博士に邂逅つて手づから地圖を貰つたか、どつちみち尋常ぢやなささうだね……僕等一行の行動は——つまり僕等が組織的に人跡未踏の羅布の沙漠を徹底的に探るといふ此の著しい行動は、「第二「獸人」の事件」と一緒に世界的に評判されてゐて秘密を包んだ水晶の珠の如何に尊いかといふことも世間の人は知つてゐる。そして尊いその珠を僕等が守護してゐることも世間の人は知つてゐる。だから僕等は僕等の珠を世間の悪い人間共に盗まれまいと用心して、毎晩持主を代へてゐる程だ……斯うまで用心をするといふのもたゞ盗人が恐ろしいからさ。怪しい人間は遠慮なくドシ／＼遠ざけるがいゝだらう。」

「明日は早朝五時頃にオムスクへ汽車がつかますから其處で解雇を云ひ渡しませう。」

「よからう。」

とラシイヌは頷いた。さうして改めて土其古美人を迂散くさうに眺めた後、レザールに窃つと囁いた。しかしレザールにはその美人が怪しい曲者とは見えなかつた。そんなことよりも張コツクが先刻持つてゐた西域の地圖を、明日解雇を云ひ渡してから何うしたら取り上げることが出来るかとそればかりを懸念に考へてゐた。

……しかし實際には、張料理人を解雇することは出来なかつた。解雇することが出来ないばか

りか彼等は彼に助けられた。と云ふのはオムスクへ着かない前、その夜の恰度十二時頃に、車中に恐ろしい事件が起つて彼等を全滅させようとしたのを張がいちはやく助けたのであつた。

事件といふのは斯うである――

夜が更けるに従つて天候は益々悪くなつて怒濤のやうな音を立て、吹雪が車窓へ吹きつけて来た。車内の乗客は玻璃窓を開ち、戸までも堅く下ろして、スチームの暖氣を喜び乍ら眠かにお喋り舌りをつゞけてゐた。すると其うち人々は次第に談話を途切らせた。さうして皆睡氣を感じて寢臺へ行く人が多くなつた。ラシイヌも睡氣を感じたので立ち上つて寢臺へ行かうとした。不思議とどうにも體が弛い。「變だぞ。」と彼は呟き乍ら室内の内をいそいで見廻はした。マハラヤナ博士もレザールもダンチヨンさへも昏々と壁板へ頭をもたせかけて人心地もなく眠つてゐる。よく見ると乗客全部のものが皆他愛なく眠つてゐる。たしかに眠つてゐるらしい。しかし誰も彼も可笑しなことにはその眼を大きく明けてゐる。それで眼醒めてゐるのだらうか？ それにしても彼等は身動きをしない。その時ラシイヌはふと先刻から、東洋でくゆらす抹香のやうな、死を想はせるやうな「物の匂ひ」が、閉ぢこめた車内を一杯にして、匂つてゐるのに氣がついた。彼は或事を直感した。で彼は危難から遁れようと急いで窓へ手をかけたが、もう其時は遅かつた。見る見る身内の精力が消え、四肢が棒のやうに硬直し眼だけ大きく見開いたまゝ、腰掛の上へ轉がつた。しかし意識は明瞭であつた。あらゆるものがよく見えた。乗客も手荷物も窓硝子も。しかし一本

の指さへも動かすことは出来なかつた。尙、物音もよく聞えた。列車の突進する轍の音、窓に吹きつける雪の音……ラシイヌは其時室の隅で女の笑ふ聲を耳にした。笑聲の起つた室の隅を彼は辛うじて眺めて見た。口と鼻とへマスクを掛けた一人の女が立つてゐる。赤い土其古帽に黄色い手袋、狐の毛皮の外套を着て、紫の靴を穿いてゐる。そして右手に青銅で造つた日本の香爐を捧げてゐる。大變小さい香爐ではあるが其處から立ち昇る墨のやうな煙は強い匂ひを持つてゐた。女は室内を見廻はした。それから香爐を腰掛へ置いてツカ／＼と此方へ近寄つて来た。少しも躊躇することなしに彼女はレザールへ走り寄つた。同じやうにちつとも躊躇せずには彼女はレザールの上着を剥いだ。それからチョッキを又剥いだ。そして下着を引き破り胴巻に包んだ鐵の手箱をそこからズル／＼と引き出した。彼女は胴巻を床へ棄て手箱を眼の前へ持つて来て暫く仔細に見てゐたがやうやく納得したと見えて外套の内隠へしつかりと藏ひホツと初めて吐息をしてそのまま隣室の扉へ行つてドアの取手に手をかけた。併し女が捻らない先に鐵の取手がガチャリと鳴つて扉が向側から押し開いた。女は二三歩よろめいた。その鼻先へ突き出されたものは自動拳銃の銃口である。女は復もよろめいた。すると扉口から一人の男――料理人姿の東洋人――張教仁が現はれた。

「手をお上げなさいお嬢さん！」立派な佛蘭西語で張は云つた。女の顔は蒼褪めた。そして神妙に手をあげた。張は肩手で拳銃を握り空いてゐる片手を働かせて女の外套を探つたが、素早く鐵

箱を取り出した。

「さあもう是で用は無い——ねえお嬢さん、さぞあなたは残念にお思ひなさるでせうが、それは少々気が宜すぎます。併しあなたの行き口は全く上手なものでした。支那西域の唐魯克格の淡水湖に限つて住んでゐる。丰丰といふ毒ある魚の小骨の粉末を香に焚いてそれで人間を痲痺させるなんて實際あなたはお怜悧でした。さういふ秘傳を知つてゐる者は支那の道教の信仰者か西域地方を踏破した人か、どつちかに限られてゐる筈です。どうしてあなたがそれを知つてゐるか、そんなことはお尋ねしますまい。私といふ人間がゐなかつたらあなたの行かれた方法は立派に成功したでせう。私のゐたのはあなたに執つては飛んだ災難といふものです……汽車が徐行を始めましたね。まだオムスクへは着かない筈だ。扱は石炭の供給かな。兎に角あなたには好都合です。さあ早くお下りなさい。警察官へ渡すにはあなたは餘りに美しすぎる。それにあなたは東洋人だ。そして私も東洋人だ。同情し合はうぢやありませんか。」

張は一方へ身を除けながら、出口の扉を開けてやつた。すると女は猫のやうにプラツトホームへ飛び下りた。そしてそのまゝ其姿を吹雪の闇へまぎれ込ませた。

闇の中から女の笑ふ美しい聲が聞えて來た。
「美しい支那の貴公子よ！ 今日はお前が勝つたけれど何時かは私が勝つて見せる。沙漠で逢はうね又お前さんと……私は沙漠の娘だよ。沙漠ではお爺さんが待つてゐます。では左様なら、左

様なら！」

ほんとに其聲は美しい。張は石のやうに佇んだまゝ其聲の後を追つてゐた。戀愛を覺えた人のやうに。

まだ車中では眠つてゐた。香爐からは煙が上がつてゐた。

八

(以下は支那青年張教仁の備忘録の抜萃である。)

私達はオムスクで一泊した。翌朝早くホテルを出てイルチツシ河の河岸へ出た。流程二千三百哩、廣々と流れる大河の態は大陸的とても云ふのであらう。一行は汽船へ乗り込んだ。セミパラチンスク迄行くのである。兩岸はキルギスの大平原で煙の上がるその邊には彼等の部落があるのであらう。セミパラチンスクで二泊した。これからは陸路を行くのである。塔爾巴哈臺までの行程にはたゞ秃山があるばかりだ。一望百里の高原は波状をなしてつゞいてゐる。ところ／＼に湖水があつて湖水の水は凍つてゐた。馬と駱駝と荷車の列——私達の一行はその高原をどこ迄もどこ迄も行くのであつた。塔爾巴哈臺からは支那領で、それから先はどことなく沙漠の様子を呈してゐた。ノガイ人種を幾人か頼み彼等に駱駝をあつかはせ、烏魯木齊指して進んで行つた。烏魯木齊の次が土魯番で私達はウルマチとトロバンとで完全に旅行の用意をした。悉皆馬を賣り拂ひ

駱駝を無數に買ひ込んだ。氷の塊を袋に詰め充分に食料を用意した。探検用の専門の器具は木箱に入れて嚴封した。ノガイ族キルギス族土耳其族、それらの幾人かを又雇つた。同勢すべて三十人。いよいよ沙漠へ打ち入つた。幾日も幾日も一行は沙漠を渡つて行く。……

×
もう此處で十日野營を張る。いつ迄野營をするのだらう。何時迄でも野營をするがよい。私はそれを希望する。私はこの地を離れまい。美しい謎の土耳其美人を自分のものにする迄は斷じて私は離れまい。

阿勒騰塔格の大山脈と庫魯克格の小山脈とに南北を劃られた羅布の沙漠の恰度この邊は底らしい。何方を見ても茫茫とした流れる砂の海ばかりだ。遙かに見える丘陵も矢つ張り砂の丘であつて一夜の暴風で出来たものだ。ところ／＼に沼がある。しかし其水は飲めなかつた。多量に鹽分を含んでゐる。立ち枯れの林が一二ヶ所白骨のやうに立つてゐて野生の羊がその周圍を咳をしながら歩いてゐる。遠くの砂丘で啼いてゐる獸は矢つ張り野生の駱駝である。私達を恐れてゐるのだらう。夜な／＼無數に群をなして草原狼が現らはれたが、火光に恐れて近寄らない。一發銃を撃ちはなすと慌て、姿を隠すのであつた。

河の流れも幾筋かあつた。しかしその水は飲めなかつた。矢つ張り鹽を含んでゐる。これらの

河や沼や池は、全く不思議な化物で絶えずその位置が變はるのであつた。動く湖、移動する沼、姿を消して了ふ河や池——全くこの邊のすべてのものは神祕と奇怪とに充ちてゐた。ある夜突然空の上から微妙な音楽が聞えて來た。多數の男女の笑ふ聲も。しかし勿論姿は見えなかつた。音楽も風のやうに消滅した。さうかと思ふと又或晩は氷塊と駱駝とを盗まれた。氷塊も駱駝も私達にとつては命と同じに大事なものだ。みんなはすつかり恐怖した。さうして嚴しく警戒した。又或晩は木片の面へ不思議な文字を書きつけたものが天幕の中へ投げ込まれた。博言博士はそれを見ると顔色を變へて説明した。

「これが 即 回鶻語ぢや。誰が一體書いたんだらう。まだ墨痕は新らしいが。」それから其の語を翻譯した。

「——沙漠の靈を穢す勿れ。汝等の最も尊敬する貢物を捧げて立ち去らざれば、沙漠の靈汝等を埋む可し——」

突然ラシイヌが笑ひ出した。

「これで正體が略わかつた！ もう心配をする必要はない。黙つて放抛つておくんだね。そのうちに僕が悪戯者の沙漠の靈を捉らまへてやる。」

しかし博士のマハラヤナは印度人の常として迷信深く不安さうに暫くの間考へてゐたが、「あらゆる物には靈魂がある。沙漠にも靈魂はある筈だ——そこで思ふに此靈は數千年の其昔に此地へ

國を立ててゐた樓蘭といふ土耳其族の家國の靈かも知れませぬ。もしさうなら祀らねばならん。」
「何を一體祀るんです。」ラシイ又は益々笑ひ乍ら、「決して御心配には及びませぬ。まあ御覽なさ
いその靈奴を屹度捉へて見せますから。」
自信の籠つたこの言葉はそれまで不安に襲はれてゐた土人達の心を一掃した。

回鶻語で記した木片が天幕へ投げ込まれたそれ以前から、誰が入れるのか解らないが、私の服
のポケットへは女文字で記した佛蘭西語の紙が一再ならず這入つてゐた。最初の紙には斯う書い
てあつた。

同じ東洋人なる支那の貴公子よ、妾を固く信じ給へ、西班牙の愚人の守り居る彼の水晶珠を
奪ひ取り妾の住居へ來たり給へ。

第二の手紙には斯う書いてあつた。

早く決心なさりませ。奪ひ取つた珠を手握つて沙漠を東北へお逃げなさい。里程にして約
二里半を足に任せてお逃げなさい。さうしたら村落に行きつくでせう。沙漠に立つてゐる羅布
人の村！ 人口は約二百人、飲まれる泉が湧いてゐます。青々と常磐木が茂つてゐます。沼に
は魚が住んでゐて葦の間には水禽がゐます。住民はみんなよい人です。音楽と盗みとが上手で
す。澤山の傳説を持つてゐます。彼等の中の頭領は七十に近い老人です。綽名を沙漠の老人と

云つて幾個かの傳説と幾個かの豫言と幾個かの迷信とに養はれてゐる魔法使のやうな翁です。
住民の家は灰色で土で造つてありますけれど老人の家だけは木造りでしかも眞紅に塗られてゐ
ます。眞紅な家へいらつしやい。其處に私があるのです。

可愛らしい支那の貴公子よ。妾の言葉を信じなさい。東洋人同志ではありませんか。

第三の手紙は昨夜來た。次のやうな文句が記してあつた。

私はあなたに命じます！ 今度こそ實行なさいましと。しかしあなたはこのわたしをきつと
疑つておるでせう。あなたの疑ひを晴すためわたしの素性を申し上げませう。私は土耳其の
將軍でピナンといふ者の二番目の娘のエルビーといふ女です。私は宮廷で育ちました。皇后の
侍女頭をしてゐました。或夜新しい命婦のために皇帝は夜會をひらかれました。諸國から獻せ
られた五人の命婦はいづれも憂鬱な顔をして席に控へて居りました。五人のうちで一番若い
十七位の波斯乙女はわけても悲しげな様子をして眼を泣き脹らして居りましたので妾の注意
をひきました。宴會が終へて命婦達が各自の椒房へ歸つた時、私は皇后の許しを受けて命婦達
を慰間に行きました。例の十七の可哀さうな命婦の華麗な椒房へ行つて見ると、可憐の乙女は
寢臺の上でシクシク泣いて居りました。私は侍女を遠ざけてから乙女に慰めの言葉をかけその
身の上を尋ねました。乙女の言葉によりますと、乙女は波斯でも由緒正しい絹商人の愛娘で、
其時から恰度一月前、父母に連れられてコンスタンチノールへ觀光に來たのださうでござい

ます。ところが白晝誘拐かされ朝廷の大官に賣られたのを其大官が更にそれを皇帝に獻じたといふことです。娘は私に云ふのでした。どうぞ此處から逃げられるやうにお取り計らひ下さいまし。こゝに手箱がございます。幾代前からか知りませんが私の家に傳はつた鐵の手箱でございます。いまして中には解らない昔の文字で何かを記した羊皮紙があると父母が申して居りました。そしてこの箱さへ持つてゐればどんな危難でも通がれられると云つて幼少時から肌身放さず持たせられてゐたのでございますが、之をあなたに差し上げますからどうぞお助け下さいまし」と私は可哀さうになりました。で私は娘に云ひました。「私が助けてあげますからちつとも心配はいりません」と。そして私はその翌日乙女を私の馬車に乗せて堂々と王宮からつれ出しました。幸ひ誰にも咎められず英國大使館へ馬車を着け大使に乙女を任せて置いて妾は王宮へ取つて返して乙女から貰つた鐵の手箱を何氣なく開けて見ますと、古代回鶻語で記された羅布の沙漠の祕密の謎があらはれて来たではありませんか。そこで私は其箱を握つてすぐに宮中を抜け出しました。皇帝の命婦を逃がしてやつた罪の發覺を恐れたよりも、羊皮紙に書かれた祕密の謎の其價値のあまりに大きいのに驚いたからでございます。それから回鶻語の暗示に任せ沙漠へ来たといふものです。そして私はこの沙漠の雌の水晶珠を手に入れました。ですからもしももう一つの雄の水晶珠を手に入れましたら二つの珠を携へて、羊皮紙に記してあるやうに私達の村から十里へだてたロブノール湖へ船を浮かべて地下に建てられた都會へ迄流れて行くこと

が出来たのです。そしてその都會へ着いた時二つの珠は奇蹟をあらはし巨億の寶の隠れ場所を私達に示すことになつて居ります。

同じ東洋人なる支那の貴公子よ！ 雄の珠を奪つていらつしやい。妾土耳其の民族の最初の祖先の回鶻人が國家の亡びるその際にひそかに隠したそれらの富を一緒にさがさうではありませんか。雌の玉の持主である沙漠の「老人」が、私達のために湖水まで案内をするさうです。あなたは難解な回鶻語を——羊皮紙に書いてあつた回鶻語を、どうして妾が讀み得たか屹度不思議に思はれるでせう、がそれには理由がございます。今も手紙に書きました通り回鶻人は土耳其民族の最初の祖先なのでございます。土耳其宮廷に居るほどの者は必ず回鶻語の初歩からるは大概讀めるのでございます。羊皮紙に書かれたあの文字は極めて簡單でございました。

三回目の密書を讀んだ時私は漸く決心した。珠を盗まうと決心した。汽車中の出來事があつて以來ラシイメ達はこの私を極度に迄も信用して珠の入れである鐵の箱を遂には私に預けさへもした。つまり彼等はこの私を同志の一人に加へたのであつた。珠を奪ふことは容易であつた。一夜、満月の明るい晩遂に私は目的を遂げ、土耳其美人の住んでゐる緑地へまで落ち延びた。常磐木、泉、土人の小屋、池には魚が泳いでゐるし木々には小鳥が啼いてゐる。緑地は住みよさうに思はれた。常磐木の間に祠がある。石の狛犬がその社頭に二匹向かひ合つて立つてゐる。「沙漠の老

人」と土耳其美人とは私を祠へつれて行つて私に拜めと云つた。無宗教の私は云はれるまゝに祠に向つて三拜した。

と老人が私に云つた。「若者よ、之は吾等の神ぢや。吾等羅布人の神なのぢや。そして羅布人は回鶻人ぢや。數千年の昔から數千年の今日迄他人種の血液を混へずに純粹に残つた回鶻人は吾等羅布人ばかりなのぢや。吾等純粹の羅布人は此處の綠地に集まつて吾等の唯一の守本尊アラなる神を祠に祭りアラ大神の使者の燐光を纏つた狛犬を神の權化と懼れ恭ひ、數千年來住んで来た。然るに今から數年前西班牙人の探検隊が羅布の沙漠へ襲つて來て神の祠を破壊して經文の一部と羊皮紙と箱に納めた雄の珠とを何處ともなく奪ひ去つた。吾等の怒りは頂點に達し神に復讐の誓ひをして、西班牙人の探検隊の頭目の行衛を探索した。そして計らずもその頭目が西班牙の首府のマドリッドの市長の要職に居ると聞き吾等は雀躍して喜んだ。そこで一隊の暗殺團をマドリッドへ向けて送つてやつた。そして巧妙なる手段を以て最初に經文を取り返へした。そして其次には他の一團が——それも沙漠から送つたのだが——その二回目の暗殺團が市長の胸へ短刀の切尖を深く突きさした。市長はしかし死なゝんだ。死なゝいばかりか決心して、ラシイヌなどといふ私立探偵へ水晶の珠と羊皮紙を託し沙漠の祕密を探らせやうと探検隊を組織させた。——ラシイヌ達の一行はこの二回目の暗殺を「第二獸人事件」と云つてゐる——探検隊を組織したといふ噂を知つたので、途中に迎へて水晶珠を奪ひ取らうと思ひつきエルビーを汽車まで向かはせたのぢや。

お前の邪魔でこの企ては到頭失敗したけれど、邪魔をしたお前が味方となり、白人達の奪ひ取つた水晶珠をまた奪つて綠地へもたらせて呉れたからには、恩こそあれ恨は無い……ところでお前は支那人だのにどういふ理由で白人達の探検隊に加はつたのか？」

老人は不思議さうに私を見た。それで私は私自身の是迄の經歷を物語つた。老人は黙つて聞いてみたが、

「お前は回鶻語が讀めるのか？ 袁世凱の呉れたといふ手箱の中の羊皮紙をどうしてお前は讀んだのぢや？」

「鐵の手箱には原文と一緒に譯文が這入つて居りました。袁世凱の勢力で回鶻語の學者を呼びよせてひそかに譯させたのかもしれない。」

老人は成程と頷いて、それつきり何んにも云はなかつた。

翌日私達は家を出た。十里の道を二日かゝつてロブノール湖まで歩いて行つた。既に土人が用意して置いた獸皮の小船が湖の岸に音もなく靜かに浮いてゐた。三人はそれへ飛び乗つた。巧みに老人が櫂を漕ぐ。

老人は漕ぎ乍ら話し出した。老人の言葉をエルビーが佛蘭西語に譯して話してくれる。私は傾聽するばかりだ。

「傳説によれば」と老人は云つた。「數千年の昔に於て今度の事件は豫言されてゐた。水晶珠の雄の珠は白人に依つて奪ひ去られ黄色人に依つて取り返へさる可しと。そしてもう一つ傳説によれば一旦白人に渡つた珠は後に残つてゐる雌の珠と共にロブノール湖の水で洗浄されると。だから私は珠を二つとも箱に入れて此處へ持つて來た。もう一つ最後の傳説によると、失はれた珠を取り返へした人は、アラ大神の祝福を受けて地下に尙生きて働いてゐる回鶻人を見ることが出來彼等の都會へ行くことが出來、そして都會へ行きついた時雌雄の珠の奇蹟によつて古代回鶻人の埋没した巨財の所在を知ることが出來ると。で今吾等は傳説通りロブノール湖に浮いてゐる。奇蹟があらはれるに違ひない。」

老人は嚴かに云ひ放すとちつと湖水を眺めやつた。

冬の眞晝の陽に輝いて、周圍一里ほどの湖は波穩かに澄んでゐる。空を行く雲も鳥影も鏡のやうに映つて見え、日光を吸つて水の中は黄金のやうに輝いてゐる。

老人は二つの箱を出して、湖水の水を注ぎかけた。そして大神を讃へ出した。

「アラ、アラ、イル……」と熱心に。

動くともない湖水の水が其時渦を巻き出した。渦の中心に船がある。船が急速に廻り出した。と、砂山の一方の岸が見る／＼崩れて其跡へ洞窟のやうな穴があいた。水がその洞へ流れ込む。いつしか船も流れ込んだ。忽然と四邊が暗くなり一筋の陽の光も見えなくなつた。エルビー

が私に縋りつく。老人は闇の中で祈つてゐる。

「アラ、アラ、アラ、アラ、アラ、アラ、イル……」

船はずん／＼流れて行く、地下の水道を矢のやうに……(備忘録下略)

九

「張の姿が見えないぞ！」

朝早くレザールが叫び出した。マハラヤナ博士もラシイヌもその聲に驚いて飛び起きた。沙漠の曙光が天幕の中へ射してゐる。彼等は眞先に珠を納れた鐵の宝箱をさがしたが、其影さへも見えなかつた。一行三十人の人々は手を分けて張を探したが何處にも姿は見えなかつた。みんな絶望して溜息をついてそして沈黙に落ち入つた。

「信用したのが悪かつたね。今さら云つても返らないが。」ラシイヌの聲は憂鬱だ。

「彼奴は一體何者だらう？ 佛蘭西語が出來て英語が出來て料理が上手で度胸がある。西域の地圖を持つてゐた——たゞの鼠ぢやなかつたんだ。」レザールの聲は泣きさうだ。ひよりきん者のダンチヨンさへ黙つて地面を見つめてゐる。

しかし何時までさうやつてゐても張の出て來るきづかひは無いので、復も一同立ち上がつて彼の行衛をさがしだした。今度は幾組かに組を分け四方へ一度に出て行つた。

ラシイヌと博士との一行は同勢八人が一團となり東北をさして探がしに出た。僅か一里ほど行つた時意外にも一つの村へ出た。常磐木が青々と茂つてゐる、泉が地面から湧き出てゐる。村には一つの祠があつて、狗犬が二匹並んでゐる。
「は、あ市長が水晶の珠と羊皮紙とを發見した祠といふのは、此處にある此の村の祠だな。しかしこんな手近な所に緑地があらうとは思はなかつた。恐らく張の逃げ込んだのもこの緑地に違ひない。」ラシイヌは心で斯う思つたので土人を無理に引つ捕らへ博士の通辯で質問した。
「はい逃げ込んで参りました。」冷笑しながら土人は云つた。「そしてたつた今湖水を指して發足したばかりです。」

「湖水といふのは何處にある？」
「南方十里の彼方です。」

ラシイヌも博士も是を聞くと顔を見合はせて微笑した。手掛りを握つたからである。土人を二人案内にしてすぐ南方へ足を向けた。途中で一夜を明かし翌日の正午ごろ其處へ着いた。湖水は波も平らかに凍りもせず澄んでゐる。岸に一艘の獣皮の船が水に軽々と浮かんてゐる。ラシイヌと博士は船へ行つて中の様子を調べて見た。鐵の宝箱が空のまゝで船の中に二つ置いてある。そして其横に手帳がある。表紙に書いてある六個の文字——「備忘録、張教仁」と鮮かにマハラヤナ博士は聲を立て、備忘録の文章を讀んで行つた。張といふ人物の如何なる者かを

人は初めて了解した。湖水の岸の洞穴が開いて流れ込む水に連れられて三人を乗せた獣皮の船が同じく洞穴へ流れ込んだと記してあるあたりの文章は、博士とラシイヌとを驚かせた。二人は手帳から眼を放して湖岸を見廻はしたほどである。しかし勿論どの岸にもそんな洞穴は開いてゐない。備忘録の最後の頁にはこんな意味のことが書いてあつた。

沙漠の地下にこんなに大きい、こんなに賑かな古代都市が、そつくりそのまゝ建つてゐる。歴史上既に亡びてゐる回鶻人が生きてゐて元氣に働いてゐるやうとは、何といふ文明の驚異だらう。驚異ではあるが夢ではない。私達三人はその都會で市民達に依つて、今、現在、未曾有の歓迎を受けてゐる。あゝその都會の美しさ——それは現代の美ではない。それは天國の美しさだ——あゝその都會の不思議さは文字や言葉ではあらはせない。そして遂に我々は水晶の珠にからまつてゐる巨財に就いての不思議な謎をいとも容易に解くことが出来た。市民達が教へてくれたのだ。吾等はその富を獲るために近日地下の都會を出て南の方へ行かうと思ふ。新しい船の用意も出来、新しい手帳の準備も出来た。もうこの古い獣皮の船、もうこの穢れた備忘録、私には不用のものとなつた。地下水道を逆流するロブノール湖の水に託して沙漠にゐる人々へ送らうと思ふ。博言博士にラシイヌ閣下、ダンチヨン君にレザール氏、左様なら、左様なら！
不思議と暖かい日であつた。そのくせ空は曇つてゐる。そしてそよとの風も無い。探検隊の一

行は沙漠にゐる必要がなくなつたので、出發の準備にとりかゝつた。
博士とラシイヌとは肩を並べ沙漠を的無く逍遙ひながら、感慨深さうに話し合つた。
「あなたは印度からお呼びしてわざ／＼參つた甲斐も無く探検は失敗に終りました。あなたに對してもお氣の毒で濟まないことに思つてゐます。」

「いや／＼」と博士は打消した。「私は斟酌は無用ぢやよ。却つてあんなにお氣の毒ぢや。さぞまあ落膽したらうが、これも一つの運命ぢや。」

「それにしても博士、地下などに、ほんとに都會があるものでせうか？」

「沙漠のことぢや、そんなことも、全然無いとは云はれまい。」博士はちよつと考へてから、「つまり沙漠は文明の墓ぢや。死んだ者ばかり住んでゐるところで、人界でもあることだが假死の状態の人間をうっかり死んだと誤認して墓に持つてくることがある。それとそつくり同じで沙漠の暴風が一晚吹いて、砂上に出來てゐる大都會を一夜に葬ることがあるが、葬られながら尙地下で生きてゐないとも限らない。」

「さうかと思ふと一夜のうちに、暴風が砂を吹き上げて、埋没した都會を一瞬間に地上へ出すといふことを何かの本で見ましたが、さういふこともあるのでせうね？」

「さういふこともあるさうだ。」博士は幾度も頷いた。

この言葉が讖をなしたのか、果然、其晩、季節はづれの暴風が一夜吹きつものつた。そして眼の

前の砂丘の上へ石の標柱を現出した。それに刻まれた回鶻語を博士が朗々と讀んだ時、ラシイヌもレザールもダンチョンも息をひそめて傾聴した。

我等の國家亡びんとす。キリスト教徒は我敵なり。

巨財を砂中に埋む可らず。南方椰子樹の島國に送る。形容は逆蝶。子孫北方に多し。

三羊皮紙に内容を書し亞細亞の天地に是を送り、一柱二品に解釋を記す。

「形容は逆蝶、子孫北方に多しか……」しばらく経つてから斯う云つてラシイヌはぢつと考へた。と不意にクルリと身を翻へして天幕の方へ馳せ歸つた。萬國地圖を取り出して彼は仔細に調べだした。

「諸君、解つた。濠洲だ。」ラシイヌは元氣よく云ひ放つた。「見給へ濠洲のこの形を、逆にした蝶にそつくりだ。北方の海中に島が多い。だから即子孫多しだ。思ふに古代の回鶻人は國家の亡びる其際に財産をあげて南洋へ送り濠洲の何處かへ隠したと見える。そしてその事を水晶の珠と石の標柱とに記したのだ。それから三枚の羊皮紙へ暗示的文章を書記して亞細亞方面へ送つたと見える。それで後世智者があつて羊皮紙の文字に疑ひを起し沙漠へ探検にやつて來てあの標柱を掘り出すか、二つの水晶珠を得るかすれば、巨億の財産を隠置した場所を發見することが出來るといふ、さういふ寸法に爲て置いたらしい。恐らく張といふあの支那人も、羊皮紙の一枚を手に入れた幸運な智者の一人なんだらう。そして運よくあの男は水晶の珠を二つ乍ら此處で手

に入れたに違ひない。しかし僕等も天の助けで、あの標柱をさがし當てた。僕等と張とは五分五分だ。沙漠には用が無くなつた。無臺は南洋に移つたのだ——それでは僕等も沙漠を横切り支那の本土へ一旦出て更に南洋へ行かうでは無いか。」
いかにも愉快さうに斯う云つてラシイヌはみんなを見廻した。みんなの顔にも歡喜の情があふれるほどに漲つてゐる。

沙漠は其間も、キラ／＼と幻のやうに輝いてゐる。
祕密！ 祕密！ あらゆる祕密を蔽ひ隠してゐるやうに沙漠は朝陽に輝いてゐた。

10

北京の春は逝きつゝあつた。世はもう青葉の世界である。胡沙吹く嵐にもろ／＼の花が果敢なく地上に散り敷いた後は、この世から花は失なはれた。たゞ紫禁城の内苑に、今を盛りの芍薬の花が黄に紅に咲いてゐるばかり。大總統邸の謁見室に、僅に置かれた鉢植の薔薇さへ、その色も艶も萎れてゐた。

中央停車場に程近い燕樂街の十番地に、木立の青葉に蔽はれて巍然と聳えてゐる燕樂ホテルの、三階の一室に久しい前から逗留してゐる客があつた。

客は男女の二人であつたが、男の方は、その顔立から、南方支那の産れと覺しい三十歳足すの

貴公子で、起居振舞ひに威嚴があつた。然るに一方女の方は、東洋人には相違ないが、支那の産れとは思はれない、寧ろ近東土耳其邊の貴婦人のやうな容貌で、態度は極めて優美ではあるが、北京の生活に慣れないと見えて何處かにギゴチない所がある。口善ないホテルの使童達は奇妙な取り合はせの二人を評して、廣東産の鶏と土耳其産の孔雀とを交接せたやうだと云ふのであつた。

二人は大變仲が宜くて、室に居る時も一緒にゐるし戶外へ出る時も一緒に出た。しかし大方は室に籠つて相談事でもしてゐるらしく、室の錠はいつも卸されてゐた。

此頃北京は物騒であつた。政府の高官顯職が頻々として暗殺された。そして犯人はたゞの一度も捕縛されたことがないのであつた。

その又殺し方が巧妙であつた。巧妙といふよりも奇怪であつた。その一例を上げて見れば、或る白晝のことであつたが、警務局の敏腕の班長が、二人の部下を従へて、繁華な灘子街を歩いてゐた。街路の兩側の小屋からは、幕開きの銅鑼の賑かな音の笛や太鼓や鉦に混つて騒々しい迄に聞えて来る。眞紅の衣裳に胸飾、槍を提げた怪美童を一杯に描いた看板が小屋の正面に懸かつてゐる。外題はどうやら「收紅孩」らしい。飯店に入りする男子の群、酒店から聞える胡弓の音、周の鼎、宋の硯」と叫び乍ら、偽物を賣る野天の賣子、雑沓の巷を悠々と班長と部下とは歩いて行つた。

すると突然班長が苦しきうな聲で叫び出した。
「何奴か俺を引つ張つて行く！ 何奴か俺を引つ張つて行く！ 眼には何んにも見えないけれど、何奴か俺を引張つて行く！ ……遠くで俺を呼んでゐる！ 何奴が呼ぶのが解からないけれど！」

叫び乍ら班長は、眞白晝の、灘子街の盛り場を一散に、電光のやうに走るのであつた。

不思議なことには、さうやつて、班長は走つて行き乍ら、全身を恰度弓のやうに思ふ様後方へ彎曲させて、彼を引き摺る眼に見えぬ力に、抵抗するやうではあるけれど、先の力が強いと見え、見る見る中に彼の姿は、人波の中に消えて行つた。

しかも翌日彼の姿は屍骸となつて皮肉にも警務廳の玄關に捨て、あつた。屍骸には一つの傷も無い。壓殺したやうな氣振もない。と云つて毒殺の痕跡も無く、自殺したらしい證據もない。ただ夫れは一個の屍體であつた。傷がないばかりかその屍骸は掠奪されてもゐなかつた。官服は勿論懐中の金も一文も盗まれてはゐなかつた。そして屍骸の死顔には「驚」の表情はあつたけれども「無念」の表情は少しもない。

斯う云ふ不思議な殺され方で大道へ屍骸を晒した者は班長ばかりではないのであつた。先刻も云つた通り政府筋の高位顯官が殺されたのみならず南方は廣東でも民黨の有力者が殺された。さうかと思ふと北方では、張作霖の將士が殺された。

誰も彼も全く同一の、不思議な殺され方で死ぬのであつた。即ち眼に見えない何者かが、眼に見えない人の呼ぶ方へ、眼に見えない力で引つ張つて行く。そして行衛が失はれる。そして翌日は九分九厘まで大道へ屍骸を晒らすのであつた。

斯ういふ奇怪の殺人が、頻々と行はれるその中に、北京童の口からして次のやうな詩がうたはれるやうになつた。

古木天を侵して日已に沈む

天下の英雄寧ろ幾人ぞ

此間何人か是主人

巨魁來巨魁來巨魁來

北京を振り出しに、この詩は、田舎へ迄も擴がつた。中華民國の津々浦々で、唄ふともなく童の口から、口癖のやうに唄はれるのであつた。

古事に詳しい老人達は、譯の解からないこの詩の意味を、昔に照らして考へては見たがどういふ意味だか解からなかつた。

それは明月の夜であつた。金雀子街の道に添うて蘆々と立つてゐる梧桐の木には、夜目にも美

しい紫の花が、梵鐘形をして咲いてゐる。家々の庭園には焰のやうな柘榴の花が珠をつどり、榎材たる梅の老木の蔭の、月の光の差し入らない隅から、ホツ、ホツと燃え出る燐の光は、産れ出た螢か飛ぶのであつた。
粹な、静かな、金雀子街の、その穩な月光の道を、體を寄せ合つた男女の者が、今、ひそやかに通つて行く。

何か囁いてはゐるらしいが、この初夏の名月の夜の、あたりの静寂を破るまいとしてか、その話聲はしめやかであつた。時刻は十二時に近かつた。そのためでもあらうか、この平和な屋敷町の往來を行き交ふ人は男女以外にはゐなかつた。二人の歩く靴の音だけが、規則正しく響いてゐる。

この時、往來の遙か向ふから、酒に酔つてゐるらしい男の聲で、詩を唄ふのが聞えて來た。しかも其聲は近づくに従つて詩の文句が稍はつきりと聞き取れた。

古木天を侵して日已に沈む

.....
巨魁來巨魁來巨魁來。

詩は北京で流行してゐる例の不可解のそれであつた。醉漢はその詩を唄ひ乍ら、だん／＼二人へ近づいて來た。見れば、醉漢は、苦力と見えて、纏つた支那服のあちこちに泥が穢ならしく着

いてゐる。五十を過ぎた老人で、酒に酔つた顔は眞赤である。

「いよう、御兩人お揃ひで。」

酔つた苦力は、男女を見ると、斯う頓狂に叫び乍ら、道の眞中に突立つたものゝ、別に惡態を吐くでも無く、自分の方で二人を避けて、そのまゝヒヨロ／＼と行き過ぎたが、擦れ違ふ時に、自分の肩を男の肩へぶつ付けた。

途端に苦力は囁いた。

「氣をつけるがいゝぞ張教仁！」

囁かれた男はそれを聞くと、ピクリと體を痙攣させ、そのまゝ往來へ足を止めた。

「氣を付けるがいゝぞ、張教仁！ 十歩。二十歩。いや三十歩かな……」

苦力は復も囁いたが、そのまゝヒヨロ／＼と歩いて行く。張教仁は突立つたまゝ苦力の姿を見詰めてゐる。彼の頭は混亂し、彼の眼は疑惑に輝いてゐる。

「何を貴方に仰有つたの？ あの氣味の悪い支那人は？」伴の女は斯う云つて、不思議さうに男を見守つた。

張教仁は黙つたまゝ、尙も疑惑の眼を据ゑて苦力の姿を見送つたが、やがてクルリと振り返へり女の顔をぢつと見て、

「氣を付けるがいゝぞ、張教仁！ 斯うあの苦力は云つたのです。」張教仁は眼を擧め、氣を付け

るがいゝぞ、張教仁！ 十歩。二十歩。いや三十歩かな。斯うあの苦力は云つたのです。」
「それは何ういふ意味でせうね？ さうしてどうしてあの苦力は、あなたの本名を知つてゐるの
でせうね？」

「どうして本名を知つてゐるか、全く合點が行きません。私の本名を知つてゐる限りは、恐らく
貴女の本名だつて知つてゐるに違ひありませんよ。」

「紅玉、紅玉、これが本名ね。私は名ぐらゐ知られたつて、何んとも思やしませんよ。」

「本名を知られたといふことは、あまり苦痛ではありませんけれど、どうして本名を知られたか、
本名を知つてゐるあの苦力は一體どういふ身分の者か、それが私には不思議です。不思議といへ
ば、苦力の云つた、十歩。二十歩。いや三十歩かな。この言葉の意味こそ不思議です。」

「ほんとにどういふ意味でせうね。」紅玉は暫く打案じたが、「歩いて見ようではありませんか。十
歩。二十歩。三十歩。その通り歩いて見ませうよ。」

そこで二人は肩を並べ、螢火の飛んでゐる静かな道を、十歩、二十歩、三十歩、と、先へズン
ズン歩いて行つた。そして到頭敷へ敷へて、三十歩の所まで来た時に、果して事件が起つたので
あつた。事件といふのは他でも無い。恰度そこ迄来た時に、紅玉が突然苦しうな聲で、
「誰か私を引張つて行く！ 眼には何んにも見えないけれど、誰か私を引張つて行く！ 遠
くで私を呼んでゐる！ 誰が呼ぶのか解らないけれど！」

斯う叫び乍ら矢のやうに、往來を一散に走り出したのである。

張教仁の驚きは形容することが出来なかつた。暫くは往來に立つたまゝ、紅玉の姿を見送つて
ゐたが、やがて一聲叫ぶと一緒に、彼女の後を追つかけた。その走つて行く男女の者を、見失ふ
まいとその後から、もう一人追つかけて行く男がある。

それは先刻の苦力であつた。海の中のやうに蒼白い、月光の巷を三人の者は、マラソン競争で
もするやうに、走りく走りく、到頭姿が見えなくなつた。

一一一

紅玉を失つた張教仁の、その後の生活は悲惨であつた。燕樂ホテルの自分の室で、ぢつと悲嘆
に暮れるのでなければ、北京の市街を夜晝となく、紅玉を探がして彷徨うのであつた。紅玉の行
衛をさがす爲には、彼は勿論警務廳へもすぐに保護願を出したのではあつたが、警務廳では相手
にしない。相手にしないばかりで無く、こんな事をさへ云ふのであつた。

「事件の性質が性質ですから、屍骸を見つけるのなら兎も角も、生きてゐる女を見つげようとし
ても、それは不可能のことですよ。この警務廳の廳内にもさういふ事件がありまして、班長が命
を失ひました。」

こんなやうな譯で、警務廳では、事件を冷淡に扱かつて、行衛をさがさうともしなかつた。

張教仁の身に執つては、紅玉は仕事の相棒でもあり、二人とない大事な恋人でもあつた。その紅玉を失つたといふことは、精神的にも物質的にも、大きな打撃と云はなければならぬ。そして勿論彼に執つては、物質的の打撃よりも、精神的の打撃の方が遙かに遙かに大きかつた。もしも紅玉が永久に、彼の手に戻らないとしたならば、彼の性格はそのことのために、一變するに相違ない。

「忽然として現はれて来て、私の心を捉へた女は、また忽然と消えて了つた。しかし彼女は消えたにしても、彼女が残した胸の傷は容易のことでは消えはしない。それにしても本當に紅玉といふ女は、何んといふ不思議な女であらう。さういふ女に逢つたといふことは、なんといふ私の不運であらう。」

斯う思ふにつけても、張教仁は、どうしてももう一度紅玉を手に入れたいと焦るのであつた。彼はそれから尙頻繁く、北京の内外をさがし廻つた。

かうして何時か月も経ち夾竹桃や千日紅が眞赤に咲くやうな季節となり、酒樓で唄ふ歌妓の聲が却つて眠氣を誘ふやうな眞夏の氣候となつて了つた。

張教仁は或夜のこと、何物にか引かれるやうな心持で、曾て愛人を見失なつた金雀子街の方角へ、足を早めて歩いて行つた。僅か一月の相違ではあるが、薄紫の桐の花も、焰のやうな柘榴の花も、大方散つて庭園には、芙蓉の花が月に向つて、薄白くほのかに咲いてゐる。

「花こそ變つたれ樹木も月も、あの時とちつとも變つてゐない。それなのに私の心持は、何んとも變つたことだらう。」

張教仁は支那流に、このやうに感慨に沈み乍ら、トボ／＼と道を歩いて行つた。かうして暫く歩いてから、何氣無く彼は顔を上げて、行手を透かして眺めると、五間ほどの先を男女の者が、親しさに肩を並べ乍ら、ずん／＼先へ歩いて行く。

後姿ではあるが、夜目ではあるが、先へ歩いて行く男女の中、女の方はどう見直しても、紅玉の姿に相違ない。

張教仁はうしろから、思はず聲高に呼びかけた。

「紅玉、紅玉、お、紅玉！」

すると女は振り返つた。そして齒を見せて笑つたが、そのまゝずん／＼歩いて行く。振り返つて笑つた女の顔は、矢つ張り紅玉に相違ない。張教仁はそれと知ると、嬉しさに胸をドキ／＼させ、女に追ひ付かうと走り出した。しかし何のやうに走つても、不思議なことには双方の距離はいつも五間餘りを隔てゝゐる。しかも先方の男女の者は、どのやうに張教仁が走つても、それに對抗して走らうともせず、いつも悠々と歩くのであつた。

張教仁の肉體は次第々々に疲勞れて來た。今は呼吸さへ困難である。それなのに尙も張教仁は全力を擧げて走つてゐる。さうして連呼をつゞけてゐる。

「紅玉、紅玉、紅玉！」と……

しかし、女はもう二度とは、振り返へらうとはしなかつた。支那服を纏つた肥大漢の、しかも老人に寄り添つたまゝ、その老人の手に引かれ、悠々と歩いて行くのであつた。

すると、其時、行手から、巨大な一臺の自動車、老人の前まで走つて来た。それと見た老人は手を舉げて止まれと自動車に合圖をした。そして自動車が止まるを待つて、女を助けて乗らせ

て置いて、やがて自分も乗り移つた。

その時漸く張教仁は、自動車の側まで馳せ寄つたが、そのままヒラリと飛び乗つた。

「紅玉！」

と息づまる大聲で、張教仁は呼び乍ら、自動車の中を見廻はした。

車内には人影は一つも無い！

「これや一體どうしたんだ！」

彼は壓された人のやうに、押し詰められた聲で叫ぶと共に、矢庭に扉へ飛び付いたが、外から鍵をかけたと見えて、一寸も動かうとはしなかつた。

その時、今まで點もつてゐた、車内の電燈がフツと消えて、忽ち車内は暗黒になつた。暗黒の自動車は月光の下を、どこ迄もどこ迄も走つて行く。

暗黒の自動車は月光の下を、どこ迄もどこ迄も走つて行く。

張教仁は暗い車内の、クツションへ腰を掛けたまゝ、事の意外に驚き乍らも、覺悟を極はめて周章もせず、眼を閉ぢて運命を待つてゐた。何處をどのやうに走るのか、自動車は駭々と走つて行く。いつか二つの窓をとざされ、外の様子はどんなにしても窺ふことは出来なかつた。

「成るやうにしか成りはしない。命を呉れてやる覺悟でゐたら何も驚くことは無い。さあ何處へでも連れて行け。」

彼はこのやうに思つてゐたが、このやうに思つてゐる彼をして、尙且つ魂を戦かせるやうな、奇怪な事件が起つて来た。しかも他ならぬ自動車の内で。

と云ふのは彼が、さう覺悟して、クツションに腰かけてゐるうちに、どうやら暗黒のこの車内に、誰か居るやうな氣配がした。即ち彼と向かひ合つた、向うの側のクツションに、何者か腰かけてゐるらしい。張教仁は慄然とした。そして思はず聲をあげた。

「一體誰だ、そこに居るのは！」

すると果して、向う側から、含笑ひの聲がして、

「張教仁君、怖いかね。」と、嘲笑ひ乍ら訊く者がある。

「怖くもなければ驚きもしない。一體君は何者だね？」
「怖くないとは豪勢だね。が、併しすぐに怖くなるよ。何者かと僕に訊くかね。さあ僕は一體何者だらう。僕が何者かはどうでもいゝ。僕は僕より偉大な者の使命を帯びて来たのだから、使命さへ果せばいゝのだよ。」

姿の見えない向う側の男は、斯う云つて復も笑ふのであつた。張教仁は恐怖よりも怒の方が込み上げて来た。
「使命を帯びて来たんだつて！」張教仁は呶鳴り出した。「そんなら御大層のその使命をさつさと果すがいゝぢやないか！」

「それなら、そろ／＼果たさうかね。君のためには急ぐよりも、餘悠した方がいゝのだがね。」
相手の男は復笑つた。

「その斟酌には及ぶまいて。君の方で餘悠するやうなら、僕の方で事件を急がせる迄だ！」
「事件を急がせるつて何うするんだね？」

「君に飛びかゝるといふことさ！ 君を撲るといふ事さ！」
「成程、君は勇敢だね。」

眼に見えぬ男は、斯う云ふと、復例の厭な笑ひ方を、臆面も無くやり出したが、鳥渡改まつた言葉つきで、

「張教仁君、手を延ばして、君の眞正面へ出すがいゝ、眞正面の空間に、何かブラ下がつてゐる筈だ。そいつが僕の使命なのだ。」

張教仁は無言のまゝ、兩手をズウと出して見た。果して正面の空間に、一筋の糸で支へられた二振の拔身の短刀が、上の方から下つてゐた。張教仁はヒヤリとしたが、度胸に狂ひは生じなかつた。反抗心がムラ／＼と彼の胸中に起つて来た。

「こいつが使命だつて云ふんだな。つまり人殺しの使命だな。そんな事だらうと思つてゐた。」
「殺人の使命と云ふよりも、決闘の使命と云つた方が、紳士らしくてよさうだね。」

眼に見えぬ男の言葉である。同じ言葉がまだ云つた。
「張教仁君、二振の中、君の好いた方を取り給へ。残つたのを僕の武器としよう。そして二人で自動車の中で、切り合はうぢやあるまいか。」

「理由の知れない決闘を、僕はしようとは思はないよ。」張教仁は云ひ放した。
「が併しそいつは不可能だ！」相手の男は威壓した。

「僕は使命に従つて、君と決闘せにやならぬ。」
「君は使命に従つて、それぢや僕を殺し給へ。さうして君の親玉に、決闘して殺したと云ひ給へ。僕は斯うして坐つてゐるから、その短刀で斬るがいゝ。理由の知れない決闘は、僕は斷じてやらないからね。」

張教仁の言葉には斷乎たる決心が見えてゐた。その決心に押されたのか、相手の男も沈黙した。車内は寂然と物凄。物凄いな車内に二人を乗せて巨大な自動車は、深夜の道をどこ迄もどこ迄も走つて行く。

一四

その時、眼に見えぬ男の聲が、慇懃な調子で云ひ出した。

「張教仁君、左様なら、君の決心は見えました。それは立派な決心です。大概の人間は此處まで來ると、氣を失なつて了ひます。さうでなければ短刀を持つて無闇に斬つてかゝります。さうした揚句恐怖のために、矢張り氣絶して了ふのです。そしてそのまゝ死んで了ふのです。屍骸はやむを得ず自動車から往來へ棄て、了ひます。あの警務廳の班長なども、屍骸になつた一人です。それなのに貴郎は堂々と私の要求を拒絶した上に、其處に平然と坐つてゐます。あなたは一個の英雄です。あなたの膽力はこの私をすつかり感心させました。そして私の大事の使命もそのため自然果たされました。あなたは洵に堂々と第一の關門を過ぎたのです。第二第三の關門に就いては、私は與り知りません。張教仁君、左様なら！ いづれ何處かで逢ふことでせう。」

駭慙な聲が消えると一緒に、闇中にはのかに浮いてゐた男の姿も全く來え、車内も森然と靜まつた。

空には蒼白い月光が眞晝のやうに照つてゐる。月光を受けて銀のやうに、自動車の幌は光つてゐる。往來には一人も人がゐない。無人の街路を驀地に、自動車は走つて行く。

「世界の涯へでも行くがよい！ 俺はどうなつたつて構はない。」

張教仁は闇の中で、かう不機嫌に呟いた。すると、其時、走りに走つた怪物のやうな自動車が流石に疲れたといふやうに、徐々に速度を弛め出した。

すると其時、行手の方で、嚴めしい門でも開くやうな、ギギ——といふ音が聞えて來た。そして、どうやら自動車は、その門の中へ這入つたらしく、一層速度が弛るやかになつた。やがて間もなく停まつたのである。

突然自動車の扉が開いた。車外も矢つ張り眞暗である。

張教仁は躊躇もせずヒラリと自動車から飛び出した。

斯うして物凄「死の自動車」から、張教仁は遁れたけれど、その後も彼の身の上には、死の自動車よりも恐ろしい、奇怪な事件が頻出した。しかも、同じ其夜の中に。そして其事件に對しては、張教仁は次のやうに、自分の備忘録へ書き記した。

(張教仁の備忘録)……私は自動車から下りたけれど、あたりが餘り暗いので、どうすること出来なかつた。此處は建物の中らしい。その證據には何方を見ても、月影も星影も見えようともしない。そして建物は大きいらしい。どつちへ向いていくら歩いて、板にも壁にも觸らう

ともしない。どんなに寂しく、建物の中で、私は立つてゐたことだらう。私の乗せて来た自動車は、何處へ行つたか影も無い。よし又そこにゐたにしても、この暗さでは解かるまい。漉しても知れない眞の闇が、恐怖を知らない私の心を、やうやく亂すやうに思はれて来た。私はどんなに陽の光と、人間の聲とに憧れたことか！ 私は戦慄を感じ乍ら根強く闇に立つてゐた。すると、意外にも、幽ではあるが、薔薇色の火光が何處からとも無く、流れて来るのに氣がついた。私はあたりを見廻した。何んといふ不可解のことだらう！ ほんの今迄は闇であつた私の足許の地の上に、一間足らずの圓い穴が、薔薇色の光を吐き乍ら、口をひらいてゐるでは無いか。好奇心に驅られて私の胸は烈しくドキ／＼動悸を打つ。私は窃つと近寄つて行つて、穴の上へ首を突き出した。螺旋階段が垂直に、穴の口から下りてゐる。その階段の盡きる邊に、一つの室があるらしく、華かな燈火が煌々と眞晝のやうに灯つてゐる。そして其處には愉快さうな澤山人がある。と見えて、唄聲なども聞えて来る……

私はすつかり驚いて、眼を離すことが出来なかつた。何んといふ不思議な對照だらう！ 何んといふ信じられない光景だらう！ 私の今居る此位置は、暗黒で、人氣が無くて、物凄。それだのに地下のあの室には、燈火と歌聲と歡樂とが、一杯に充ちてゐるらしい。私はしばらく考へた後、その室へ行かうと決心した。暗黒の恐怖に蝕れ乍ら、ぼんやり地上に立つてゐるより、例へそれ以上の恐ろしいことが、あの地下の室にあるにしても、自分から行

つてその恐ろしさを、經驗した方が有意味であると、心に思つたからである。そこで私は身を起し、螺旋階段へ足をかけた。そして垂直の階段をズン／＼下へ降りて行つた。十分程時間を費した時、到頭私は地下の室へ、自分が来た事を發見した。室の三方は壁であつた。天井の中央からはシャンデリアが無数の電球を下へ向けて、室を明るく照らしてゐる。飾らしいものは無いけれど、室の中央に一脚の丸卓子が置いてあつて、その上に一葉の紙があり、紙には設計圖が書かれてある。それにもう一つ、巨大の像——支那服を纏つた老人の、巨大の像が室の口に、居然と置かれてあるのであつた。

一五

私はその像を見てゐるうちに、誰の銅像だか解かつて来た。即ち夫れは既に死んだ袁世凱の像である。どういふ譯で袁爺の像が、此處に置かれてあるのだらうかと、私はしばらく考へて見たが、その解からう道理が無い。袁爺の像は此處ばかりで無く、十字形をなした長廊下のその眞中にも置いてあつた。廊下の眞中に置いてある袁爺の像を發見する前に、私は奇怪な地下の館の、あらゆる場所を見歩いたのであつた。蜘蛛手に延びてゐる無数の廊下！ 廊下の左右には室の扉がズラリと一列に並んでゐた。私は室の扉を叩いて見た。誰も中から返辭をしない。返辭こそしないが室の中には澤山人達があると見えて、賑やかな聲が聞えてゐた。しかも賑かなその聲は、

何かに酔つてゝもゐるやうに、濁つた、だらしのない喉音である。それから私は尙懲ずに、二三の室の扉を叩いて見たが矢つ張り返辭をするものが無い。濁つた、だらしの無い、喉音だけがガヤ／＼聞えて来るばかりである。一つの室からはハツキリと詩を唄ふのが聞えて来た。

古木天を侵して日已に沈む

天下の英雄寧ろ幾人ぞ

此間何人か是主人

巨魁來巨魁來巨魁來

「あの詩をうたつてゐるんだな。」

私は別に氣にもかけず、先へズン／＼歩いて行つた。そして廊下の十字路のその中央に置いてある袁爺の銅像の前まで来て、像を見上げて佇んだ。

すると、忽然と、像の影から、一人の支那人があらはれた。見れば、意外にも、その男は、金雀子街で姿を見せた、穢い年寄りの苦力であつた。今日も矢つ張り酔つてゐる。ヒヨロ／＼と浮雲さうに歩いてゐる。

「おや！」

と、私は仰山に、驚きの聲を洩したのである。しかし老人は見向きもせず、右の方へユラ／＼

と行きかけたが、其時、復も、囁いた。

「ズン／＼行くがいゝぞ！ 張教仁！ 左へ左へ左へとな！ 突き當りの帳をかゝげるがいゝ

……」

云つて了ふと、老苦力は銅像の影へ身を寄せた。と最う何處へ行つたものか、どう見ても姿は見えなかつた。

冒険を覺悟のこの私は、苦力の言葉に従つて、左へ左へ左へと、足を早めて歩いて行つた。二十分あまりも歩いた時、長い廊下が行き詰まり、其處に一つの室があつた。しかも扉は半ば開き、内側に垂れた錦繡の帳の色さへ見分けられた。私は少しの躊躇もせず、グツと帳をかゝげると共に、室へスルリと這入つたのである。

あゝ、夢のやうな室の態よ！

ほんとに夢のやうな小さい室！ その室を仄かに響らせるものは、甘い阿片の匂ひである。室を朦朧と照らしてゐるのは、薄紫の燈火である。それは天井から来るらしい。天井から来る薄紫の燈火の光に照らし出されて、幽に見える一つの寢臺。白衣の乙女がその上で、のどかに阿片を飲んでゐる。

乙女の顔を見た時の、私の驚きと喜びとは、筆にも言葉にも盡くされない。乙女は尋ねる紅玉であつた。……私は寢臺に走り寄つた。そして紅玉を抱きしめた。

「お前は紅玉！ あゝ紅玉！」
私の洩らした言葉と言へば、たつた二言のこれだけであつた。これだけを洩すと私の眼から瀧のやうに涙が流れ出た。
すると、彼女は——紅玉は、眠むげにその眼をひらいたが、私の顔をぢつと見て、そして異様に微笑した。それからまたも眼を閉ぢたが、やがて靜かに語り出した。夢見るやうなその言葉つき……。

「……私あなたを知つてゐます。張教仁さんね。さうでせう……かすかに覚えて居りますわ。沙漠であなたと逢つたことも！ そして、さうく、金雀子街で不意にあなたと別れたことも——遠い遠い昔のことよ！ 五年も十年も二十年も——そして私はその頃は、あなたを愛して居りましたわ！ そして、あなたも、私をね……でも最う駄目よ！ さうでせう！ 私は他人の物ですもの。ですから二人は諦らめて赤の他人になりませうね……泣いては厭よ、ねえ貴郎や……それよりも阿片でも飲みませうよ。阿片を飲んで、飲んで、涙を忘れませうね。」
「紅玉！ 紅玉！ あゝ紅玉！ お前は阿片に酔つてゐるよ！ お前の本心は麻痺してゐる！ それとも本當に無垢のお前を、穢した人間があるといふなら、そいつを私に明かしておくれ！ さうだ、そいつを明しておくれ！」
私は殆ど半狂亂のうろく聲で云ひ迫つた。

しかし紅玉はさう云はれても、尙讒言をつゞけるのであつた。

一六

「きつと貴郎は知つてゐらつしやるわね。近頃北京から田舎まで、妙な詩が流行つてゐるでせう。あの詩の意味を知つてゐて？」「古木天を侵して日已に沈む」から眞先にあるでせう。あの意味は斯うよ、斯うなのよ——天のやうに偉らかつた支那の國に、古い大木が蔓延つて、支那の國を蔽うたので、日光を透すことが出来なかつた。そのうちに其日が沈んで了つた。つまり日といふのは文明のことよ……」「天下の英雄寧ろ幾人ぞ」から其次にあるでせう。この意味は讀んで字の通りよ。つまりさうなつた支那の國には、英雄などといふものは、一人も無いと云つてゐるんだわ。「此閣何人か是主人」これが三番目の文句ですわね。閣といふのは他でも無い、地下に出来てゐる館のことよ。私達のゐる此處のことよ。さうして此處は阿片窟よ。阿片窟ではあるけれど、同時に此處は秘密結社の一番大事な本部なのよ。かういふと貴郎は訊くでせう、一體何んの秘密結社かつてね。私教へてあげますわ。世界征服を心掛てゐる恐ろしい秘密の結社ですの……そして結社の首領といふのは——さうよ、結社の首領といふのは、大變偉い人ですの、私を此處へ呼び寄せたのも秘密結社のその首領よ——そして私はその人に、愛情を捧げて居りますの！」
「一體其奴は何者だ！ 一體其奴はどこに居る！」私は思はず呶鳴りつけた。それほど紅玉の讒

言は私の心を傷けたのであつた。

すると彼女は同じ調子で、私にそれを物語つた。

「あなたは其人を知つてゐる筈よ。少くもあなたはその人の銅像を知つてゐる筈よ。」

「銅像だつて!? どんな銅像?」

「廊下に立つてゐたでせう。」

「あれは袁世凱の銅像だ!」

「昔はさういふ名でしたわね。」

「袁世凱は、とうの昔、この世から死んで了つた筈だ!」

「世人はさう云つてゐますけれど、ほんとは生きてゐるのですよ。」

「夢だ! くだらな、夢だ!」

「いゝえそんな事はありません! いゝえそんな事はありませんわ!」

私は怒つて烈しい聲で、紅玉を叱咤しようとしたが、併しそれは不可能であつた。何ぜかとい

ふにその一刹那、遙に遠く警笛の音が地下室の静寂を破つたからで。續いて二笛! また三笛!

忽ちどよめく聲がする。怒聲、哀願、女の泣聲……それから拳銃の鋭い音! 劍の鞘のガチャッ

音! 警官が襲込んだらしい。私は一言も物を言はず、紅玉を肩に引つ擔いだ。それから室を走り出た。長い廊下を一散に、

右へ左へ走り廻はる。カッと燃え上がる火の光が、行手の廊下を隘いでゐる。地下室は焰々と燃えてゐるらしい。煙に咽せてつひ私は思はず廊下へ倒れようとした。その時私を呼ぶ者がある。

「左手の壁のボタンを押せ! そこから上へ登つて行け! 躊躇せず走れ張教仁!」

私はハッと刎ね起きて、聲のする方へ眼をやつた。煙に包まれ火を踏んで、一人の支那人が立つてゐる。両手に二挺の拳銃を持ち、正面を睨んだその姿! それは意外にも金雀子街と、銅像

の前とで邂逅した、穢い老人の苦力であつた。しかし姿は苦力ではあるが、付髯と付眉とをかな

ぐり棄てた、生地容貌をよく見れば、思ひきや、それは、羅布の沙漠で、私が裏切つて捨てて

逃げた、西班牙の花形、ラシイヌ大探偵! 私に何んの言葉があらう! たゞもう恥入るばかり

である。矢庭に私は頓首した。それから左手の壁を見た。果してボタンが一つある。そいつを押

すと、壁の一部が、そのまま一つの扉となり、ギーと内側へ開いた隙から、紅玉を抱へて飛び込

むと、扉はハタと閉ざされた。

暗中にかゝつた階段を、私は紅玉を抱へたまゝ、上へと、命の限りに登つて行つた。

かうして階段を行き盡し、やうやく地上へ出て見れば、そこは案外にも金雀子街の、他人の家

の庭の空井戸であつた。そしてもう夜は明けてゐた。……(備忘録終り——)

その翌日のことである。中華民國警務廳の、保安課の室に十四五人の、可成り重大な人々が、

ラシイヌ探偵を取り圍んで、ちつと話に聞き惚れてゐた。
 「……まあさう云つた鹽梅で、いろ／＼研究をした結果、形の見えない何者か、形の見えない糸を以て引つ張つて行くといふ、その事實は、催眠術に過ぎないと、このやうに目星をつけてからは、その方針で進みました。ところが果して或晩のこと、金雀子街を歩いてゐると、貴公子風の支那青年と、土耳其美人とが月に浮かれて、向うから歩いて來ましたが、二人の中のどつちか、暗示状態に陥つてゐると、早くも私は見て取つたので、何氣なく警告を與へました。それといふのも、その貴公子を私が知つてゐましたからで。すると果して土耳其美人が、ものゝ三十歩程も歩いた頃、例の調子で、例のやうに、走り出したといふものです。驚いて貴公子は追つて行く。勿論私も追つて行く。貴公子は途中で倒れましたが私は最後まで追ひかけました。するとどうでせうその美人は、北京中散々駈け廻はつた後、矢つ張り同じ金雀子街へ歸つて來たぢやありませんか。さうして、その街の街端れの、陶器工場の廢屋の中へ走り込んだといふ譯です。私も其處まで行きました。忽ち地上へ穴が開く、地下室へ通ふ階段がある、それを二人は下りました。すると恐ろしく廣い立派な阿片窟へ來たといふものです。私はいろ／＼調べました。その阿片窟の設計圖さへ私は手に入れたといふものです。そして阿片窟の經營者が誰であるかを突き止めました。袁更生といふ男です。そして自分では袁世凱の後身だと云つてゐるのです。そして世界の各國へ阿片窟の支部を設立し、世界中の人間を墮落させて、そして自分が全世界を征服する

のだなどと高言して、愚民を騙してゐたさうです。それほど大がかりの阿片窟が、どうして今日まで知れなかつたかといふに阿片窟へ出入する人間を、よく吟味して加入させたからで、今云つた首領の袁更生が例の催眠術で誘拐して來ても、途中でその人間の強弱を試し、臆病な奴はそのまま、途中で、自己催眠で自殺させ、街路で容捨なく捨て、了ひ、大膽な者だけを連れて來たので、祕密が保たれてゐたのです。」
 ラシイヌ探偵は云つて了ふと、葉巻を出して火を點けて、さも旨さうにふかし出した。
 「残念な事には、」とラシイヌは鳥渡片眼をひそめたが、「かんじんの首領の袁更生だけを、まんまと取り逃がして了つたので、こいつは私の失敗でした。」
 かう云つてニヤリと苦笑した。

一七

上海、英租界の大道路、南京路の中央のイングラッド旅館の一室で、ラシイヌ探偵と彼の友の「描かざる畫家」のダンチョンとは葉巻を吹かし乍ら話してゐる。

「……ほう、そんなに美人かね。ところで君はその美人をモデルにしたいとでも云ふのかね。モデルにするのもいゝけれど、これ迄の君の態度を見れば、どんなに良いモデルがあつたところで、「描かざる畫家」ダンチョンたる君は、それを描かないんだからつまらないよ。それとも今度

からは描くのかね？」
「それは勿論描きますとも。あんな素晴らしい美人がですね、モデル臺の上へ立つてくれたら、自然とブラシだつて動きますよ。」
「美人々と云ふけれど、君の言葉を聞いてゐれば、美人は面纱に隠れてゐて、顔を見せないつて云ふぢやないか。」
「顔は一度も見ませんけれど、美人であるといふことは其體付で解ります。飛び離れて優秀たあの體には、飛び離れて美しい容貌が着いてゐなければ嘘と云ふものです。美人に相違ありませんな。」

「成程、君は畫家だから、さういふことには詳しいだらう。ところで素晴らしい其美人が君に手紙を手渡したといふが、少し變だとは思はないかね？」

「無論變だと思ひます。つまり變だと思へばこそ、貴郎にお話したのですが……。」

「君の様子を可笑いと思つて僕が質問したればこそ、君は其事を打明けたので、さうでなければ、君は黙つて、美人の手紙に誘惑されて今夜一人で公園の音楽堂へ行つたに相違ないよ。全く今日の君の様子は、變挺と云はざるを得なかつたよ。變的の君がお洒落しをする。頭髮を香油で撫でつけるやら、ハンカチへ香水をしめすやら、そして無闇にソワソワして腕時計ばかり氣にしてゐる。正氣の沙汰ぢやなかつたね……平素の日ならそれでもいゝさ。君も充分知つてゐる通り、埋

れた寶庫を尋ねようと、西域の沙漠を横斷して支那の首府まで来て見れば、一行での一番大事な人のマハラヤナ博士が風土病にかゝつて北京から一步も出ることが出来ず、その看病をしてゐる中に、北京警務廳に頼まれて、袁更生の事件に關係して、徒に日數を費して了つた。それでも漸く博士の病氣が曲りなりにも癒つたので、陸路を上海まで来たところで博士がまたも悪くなつた。それも漸く恢復したので、明日はいよいよ南洋を指して出帆といふ瀬戸際ぢやないか。そいつを君にソワ付かれちゃ、誰だつて質問かずにやゐられないよ。訊いたからこそ話したのさ。君が進んで自分から、僕に話したんぢやない筈だよ。」

斯う云ふラシイヌの口許には流石に微笑は漂つてはゐるが、鋭い其眼には非難の光がキラ／＼輝いてゐるのであつた。

ダンチヨンは次第に首を垂れ、小兒のやうに頬を赭らめ、いつ迄も無言で聞いてゐたが、この時フツと眼を上げた。その眼には如何にも困つたやうな、嘆願の表情が浮かんでゐて、それが滑稽で無邪氣なので、ラシイヌは思はず笑ひかけた。それを危く取り留め彼は嚴然と云ひ渡した。「それでは君はその別嬪が、手紙で君に指定した通り、今夜公園の音楽堂へ音楽を聞きに行き給へ。しかし一人では行かせないよ。勿論見え隠れではあるけれど、僕も一緒に行くことにしよう。さうして君がその美人を、モデルに頼むことに成功するか、それとも美人が君を捕らへて、逆さに釣るして泥を吐かせるか、戀の争闘を見ることにしよう。こいつは飛んだ見世物だよ。」

ラシイヌは云つて立ち上がった。
「たしか音楽の始まるのは午後八時からだといふことだね。それ迄は君も辛棒して、博士の室へでも行つてゐて、八時になつたら出て行くさ。それ迄に僕も僕の用を片付けて置くことにしようかね。尤も僕の用といふのは、街をブラツクことだけだ。」
ラシイヌは室を出て行つた。それから彼はホテルを出て、縣城指して歩いて行つた。

一八

或は「東洋の紐育」もしくは「東洋の桑港」——斯う呼ばれてゐる上海も、昔ながらの支那街としての縣城城内へ足を入れれば、腐敗と臭氣と汚穢とが、道路にも屋内にも充ち満ちてゐて、鋭い神経を持つた人は近寄ることさへ忌み嫌つた。
さういふ不潔の城内を差してラシイヌは歩いて行くのであつた。しかしラシイヌは目的地へ直ぐに行かうとはしなかつた。彼は自分の居る英租界を、黄浦河に沿つて悠々と、佛租界の方へ歩いて行つた。彼の道順には租界中での一番賑かな街筋が——即黄浦河の岸上の街と、蘇州溪の街とが軒を並べ、街路整齊と立つてゐる。街には人が出盛つてゐた。馬車、自動車は鈴を鳴らし、廣い車道を馳つて行く。三層五層の大廈の窓は、悉く扉を開け放され忙しさに働く店員達の小綺麗な姿が見えてゐる。上海棉花公司とか、廣德泰軋花廠とか、難解の文字の金看板が、

家々の軒にかゝつてゐて、夕陽にピカピカ光つてゐる。九江路を右に曲がり、福建路を行き盡し、それから初めて佛租界へ、ラシイヌは悠くり足を入れた。
英租界の繁華に比較しては、佛租界の方はやゝ寂しく、その代り上品で粹であつた。紳士と連立つた淑女達や、大きな金剛石の指輪を飾つた俳優じみた青年や、翡翠の帽子を戴いて、靴先に珠玉を鏤めた貴婦人などの散歩するのに似つかはしい街の姿である。
ラシイヌは靜かに歩きながらも、左右に鋭く眼を配つて、全身の注意を耳に蒐め、或る唄聲を聞かうとした。しかし唄聲は聞えない。足音や話し聲や笑聲や、器物の動く音などは、行く先々で聞えてはゐるが、聞かうと願ふ唄はどこからも聞えては來なかつた。ラシイヌは佛租界を歩き盡くし、暫くそこで躊躇したが、やがてグルリと大迂回をして米租界の中へ進んで行つた。
佛租界ほどの品も無く、英租界だけの規律も無く、たゞ米租界は紛然として、繁昌を通り越して騒がしかつた。街々を歩いてゐる人々には、印度人もあれば、土耳其人もある。煙草ばかり吹かしてゐる洪牙利人や、顔色の黒いヌビヤ人や、身長の高くない日本人や、喧嘩早い墨西哥の商人などが、黄金の威力に壓迫され、血眼になつて歩いてゐる。各國の領事館や銀行の立派な建築が街々に並び、倉庫、棧橋、郵便局などが、到る所に並んでゐる。上海の本當の持主の支那の商人は米租界でも最も狡猾なるあきうどとして何處へ行つてもうよついでゐる。
ラシイヌはゆる／＼歩き乍ら、左右の光景を眼で眺め、湧き起る音響を耳で聞き、先へ先へ進

んで行つた。
しかし矢つ張り聞きたいと願ふ、その唄聲は聞えなかつた。斯うして彼は米租界をも、失望を以て通り過ぎた。そして今度は足を早めて、いよく目的の縣城の方へ、彼はズン／＼進んで行つた。

街は次第に寂しくなる。そして道筋の不潔さは、ラシイヌの眼を曇めさせる。

城内と城外とを距てゝある城壁の前まで来た時に、常時ながら彼は感嘆して暫く立つて眺めてゐた。城壁の周圍三十支那里、磚瓦を以て疊み重ね、壁の上には半町毎に嚴しい扶壁が作られてゐる。長髮賊の亂の時初めて備へられた大砲が、扶壁に残つてはゐるけれど、殆ど使用に堪えない迄に青黒く砲身が錆びてゐる。城壁に沿うて丈なす草が、人に苽られず生ひ茂り、乏しい紅白の草花が咲いてゐるのも野趣がある。昔、戰國の世の時代に、養ふ食客三千人と、世上の人に謳はれた、春申君と申す人の、長く保つた城である。城には七つの郭門がある。郭門は城内の舊市街にいづれも通じてゐるのであつて、道臺衙門の在る所は即ち東大門内である。知縣衙門の在るところは小東門内の中央である。

日没を合圖に内外の市街は——縣城内の舊市街と縣城外の新市街とは、交通を遮斷する從であつてその日没も近づいてゐるので、ラシイヌは郭門の一つから城内へ急いで這入つて行つた。城内の街の狹隘さは、二人並んで歩くことさへ出来ぬ。凸凹の激しいその道には豚血牛脂流れ出し

殆ど小溝を作してゐる。下水の桶から發散する臭氣や、葱や、山椒や、芥子などの支那人好みの野菜の香が街に充ち充ちた煙と共に人の臭覺を麻痺させる。小箱のやうな陋屋からは赤兒の泣聲や女の喚き聲や竹の棒切で撲ぐる音などが、巷に群れてゐる野良犬の聲と、殺氣立つた合唱を作つてゐる。

街には人が出盛つてゐて、あつちでも此方でも支那人らしい誇張した聲音と身振りとで「負けろ」まけないの掛合事——つまり、商賣をやつてゐる。誰も彼もみんな忙がしうだ。さういふ忙がしい人達を縫つて、さも隙さうな若者共が、小唄を唄ひながらぶらついてゐる。仔細に見ると其れらの者はいづれも逞しい體をした働き盛りの若者である。しかも彼等は働かうともせず、唄を唄つて歩いてゐる。彼等のうたふ其唄こそは、ラシイヌの聞きたがつてゐる唄である。

古木天を侵して日已に沈む

天下の英雄寧ろ幾人ぞ

此間何人か是主人

巨魁來巨魁來巨魁來

この唄をうたふに若者共は「巨魁來巨魁來巨魁來」と、最終の一聯に力を籠め、如何にも今にもその巨魁が何處からか堂々と乗り込んで来て、姿を現はすのを待つてゐるかのやうに、勢込んで唄ふのであつた。

ラシイヌはゆるやかに歩みながら、捨目捨耳を働かせて、彼等の様子を窺つた。さうして心で罵つた。

「フン、いくらでも唄ふがい、巨魁來巨魁來巨魁來か！ どんな巨魁だか此俺にはちやあんと解つておゐで遊ばすのだ。どんな野郎が来たところで此鼻ちやんは驚かない。どんな野郎でもとつ捕へて見せる。俺達の目的を妨げる奴は張三李四のお構ひ無く地獄の釜の中へたゞき込んで見せる！」

ラシイヌは夫れから尙しばらく、城内をブラ／＼彷徨つてから、黄浦河の岸へ出て行つた。縣城とそして三つの租界を、東の岸に立たせたまゝ北へ流れる黄浦河は、水こそ黄色に濁つては居るが、その河幅は二百間、無數の商船や軍艦や支那船を満々たる水に浮かべ、揚子江に向かつて流れてゐる。目星い大きな工場は、いづれも河の東岸にあつて、巨大の煙突、急傾斜の屋根が、空を蔽うて林立し、重い起重機を動かす音や猛獸のやうな汽笛の音や、のんびりした支那流の掛聲などが、煤煙の空に響いてゐる。オリエンタル船梁の工場からは鐵槌の音が聞えてくるし對岸に孤立して立つてゐる董家造船所のドックからは汽罐の音が聞えて来る。

ラシイヌは河岸を米租界の方へ耳を傾げ乍ら歩いて行つた。そのうちに焼け爛れた砲彈のやうな太陽がグル／＼廻りながら、平野の地平へ没して了つて、間も無く四邊は暗くなつた。遙か縣城の方角に當たつて、關門を銷さず軋り音が、一日の終りを告げるかのやうにさも重々しく響

いたが、その音と一緒に諸所の工場から蟻の群でも出るやうに職工達が現らはれた。疲勞れた聲音で挨拶をしてちり／＼に四方へ散つて行く。その後は森然と静まり返り夜業をすると思へて或工場の、二つの窓から火の光が戶外にクワツと洩れて来るのさへ却つて寂しく思はれた。

四邊は森然と静かである。その時、ラシイヌが歩いてゐる河岸の下の水面から、元氣のよい唄聲が聞えて來た。それは、矢つ張りあの唄である。古木天を侵して日已に沈む

巨魁來巨魁來巨魁來

ラシイヌは鳥渡眉をひそめ、足下の水面をすかして見た。巨大の支那船が浮いてゐて、燈火も點けて無い船の中で、二三十人の人影がボンヤリうごめいてゐるのが眼に付いた。ラシイヌの心臓は動悸を打ち、その眼は急に見開かれた。彼は傍の揚柳の蔭へこつそり姿をひそませて、ちつと様子を窺つた。船中の唄聲はやがて絶えて、またも四邊は寂靜となつた。すると今度は反對の岸——二百間あまりもかけ隔てた對岸の方から幽に幽に同じ唄聲が水を渡つてラシイヌの耳へ迄聞えて來た。やがてその唄も途絶えたが、唄の途絶えた方角から、青色の光がたゞ一點、闇の

中へポツツリ浮かび出た。宛も人魂が迷ふやうに其青色の燈の灯は、右に左に靜かに動くもまた闇の中へ消えて行つた。すると、今度は、彼の足下の、支那船の中から同じやうな青色の燈火が浮かび出たが、空中で五六回揺れた後でそのまゝフツと消え去つた。
「フ、ン、何かの合圖だな。」
揚柳の蔭でラシイヌは思はずこのやうに呟やいて尙もそのまゝイんで、支那船の様子を窺つた。

すると支那船は動くともなく、幽に船體を動かした。闇の河面を靜かに動いて、一町あまり隔たつてゐる小さい棧橋の方角へ、人眼を忍ぶやうに近づいて行く。

さうして棧橋へ着いた時、船の中にゐた支那人共は、一人々々棧橋へよぢ登つた。二十人あまりの人影が、墨のやうに橋の上へ塊まつた時、一個の大きな黒い箱が船の中から持ち上げられた。棧橋の上の人影が、揃つて前へ手を突き出し、その黒い箱を受け取つた。するとまたもや船の中から、ゾロ／＼人影が現はれて棧橋の上へよぢ登つたが、一個の箱を肩に支へ、その箱をみんな取り巻いて、神前へ捧げる御輿のやうに、敬虔な態度で歩いて行く。

「さあ何うもこいつは解らない。」

ラシイヌは胸へ腕を組んで、澁面を作つて呟いた。それから揚柳の蔭を出て、御輿の後を追ひ掛けたが、思ひ出して腕時計を眺めると、彼は追ふのを中止した。

もう十分に八時である！

彼は御輿と腕時計とを代はる代はるに見比べて暫くちつと考へてゐたが、決心がついたといふやうに、グルリと體の方向を變へ、大速度で走り出した。

公園へ向かつて走るのである。

黄浦河とそして吳松江とが、相會流する一角に、居留地の公園は立つてゐた。北と東が水に臨み、西が英租界に向いてゐる。水に向つた園内の芝の丘に、音樂堂は立つてゐた。眩くばかりの電燈が、樂堂の周圍に照り渡り、そこへ集まつた聴衆のほくろさへ鮮かに見えるほどである。

一九

もう己に音樂は始まつてゐた。それは伊太利の音樂隊で、モールを鏤めた服装から指揮者の風姿から、可なり怪しげな一團であつたが、「伊太利人」といふ吹聴のためか、聴衆は黒山のやうに集まつてゐた。聴衆は全部歐羅巴人で支那人は一人もゐなかつた。それは公園の入口に「華人不可入」と書いた建札が、嚴めしく立つてゐるからだ。

ラシイヌは聴衆の間に交つて、彼の鋭い觀察眼であたりを靜かに見廻した。「描かざる畫家」ダンチヨンを發見出さうためである。ダンチヨンの姿はラシイヌの左手、十間ほどの彼方にゐた。新しい帽子に白のネクタイ、思ひ切つてめかしたその姿は、ラシイヌには滑稽に思はれた。性來

どこかに可笑味を持った田舎者じみたダンチョンが、神経質な眼付をして、音楽などぼろはの空で、例の美人を發見しようとして、四邊をキョロ／＼見廻す様子は、それは全く珍であつた。

ラシイヌは可笑さを堪えながら、ダンチョンの様子を見守つた。

其時、きよとついでにみたダンチョンの眼がある一所に据つたので、ラシイヌは「オヤ。」と呟きながら、其方角へ眼を遣つた。果して其處には婦人がゐた。即ち樂堂の柱に寄つて、黒い面紗で顔を隠した水色の服の歐洲美人が、スラリとゐるのであつた。

「おや。」とラシイヌは婦人を見ると、復も思はず呟いた。といふのは面紗のその女が確に見覚えがあるからであつた。「ハテナ、一體あの女と何處で知人になつたらう？」

ラシイヌは一瞬間の中で記憶の糸を手繰つたけれど思ひ出すことが出来なかつた。

その間も樂堂の舞臺では、拙い音楽が續けられてゐた。そして聴衆は根氣よく靜かに耳を傾けてゐる。

しめやかな、靜かな、いと平和な、異國情緒の光景である。

ラシイヌは尙も眼を欬て、面紗の女とダンチョンの様子を代はる代はるに眺めやつた。そして怪しい素振りでもあつたら、追つ駈けて行かうと用意した。

すると其時、どこからともなく、獸の啼聲が聞えて來た。「キ、キ、キ、キ」と鋭い聲！ 音楽に夢中の群集達は、鋭い獸の啼聲に注意しようとした。靜に音楽を聞いてゐる。一人の面

紗の女だけがその鳴聲を聞くか否や、烈しく體を顛はせた。そして獸の鳴聲に促がされてもしたやうに、急にスル／＼と、群集を分けてダンチョンの方へ近寄つた。

面紗の女とダンチョンとは其まゝ體を寄せ合つて聴衆の圈から出ようとした。それと見て取つたラシイヌは、これも素早く聴衆を分けて燈火の明るい廣場へ出た。さうして眞直に前方を見ると、面紗の女とダンチョンとが木立の繁つた暗所の方へ、側目もふらず歩いて行く。程よい間隔を中に保つて、ラシイヌはその後を追つて行つた。

鋭い獸の鳴聲は——それは狸々の鳴聲であるが——樹立の彼方、鐵柵の向ふの公園の外の人道から、復も其時間に聞えて來た。面紗の女とダンチョンとはその鳴聲に導かれるやうに公園の裏門を迂り出た。そして人道を南の方へ足を早めて走つて行く。三度も四度も行手の方から狸々の鳴聲が聞えて來る。ラシイヌは是も駈足で二人の後を追つかけた。

斯うして幾分走つたらう？ 暗い大きな建物の蔭から、獲物を狙ふ豹のやうにひらりと走り出た支那人がある。血氣盛んの若者らしく筋骨なども逞しく、走つて行く脚も輕々と、二人の男女を追つて行く。

ラシイヌは鳥渡驚いて、その支那人を見詰めたが、

「ほう、彼奴が、あの男か！」

思はずも斯う呟いた。かう呟いた夫れと同時に、面紗の婦人の何者であるかを、閃めくやうに

理解した。

面紗の女とダンチョンとは、次第に速力を速め出した。宛然舞ふやうに走つて行く。二人の走るのを誘ふかのやうに、幾度も幾度も猩々の聲が行手の方から聞えて来た。その鳴聲は、不思議なことには、手近の所から聞えることもあり、遙かなあなたから来ることもある。

疲労の知らないラシイヌの體も、流石にいくらか疲労れて来た。しかし、勿論、この追跡を止めようなどとは思はなかつた。彼等の走るに従つて彼も風のやうに走つて行つた。

斯うしてどれだけ走つたらう？ 黄浦河の河上に浮かんでゐる、無数の商船や帆船の、マストや煙突が遙かあなたにボンヤリ聳えて見える所——その邊は闇のやうに暗かつたが——其處まで一團が来た時に思ひもよらない活劇が、電光のやうに湧き起つた。

二〇

恰度其處まで来た時に、支那青年は走り寄り、さも憧憬に耐えないやうに、又心配に耐えないやうに、何か一聲叫びながら面紗の女を引つ抱へ、その口に烈しくキッスをした。すると女は驚きのあまり恰も氣絶したやうに——見やうによつては悪夢から醒めて傍の保護者に縋りついたかのやうに、支那青年に抱へられたまゝ微動をさへもしなくなつた。驚いたのはダンチョンで、彼は甘い自分達の戀を妨げられでもしたかのやうに、平常の彼に似もやらず矢庭に拳を揮り上げて

支那青年に跳び掛かつた。斯うしていまにも二人の間に格闘が演ぜられようとした時に、鋭く咆哮する猩々の聲がすぐ耳許で聞えて来た。

と、闇の中からムラ／＼と二三十人の人影が現はれて、三人を中に取り込めた。そして其時走り寄つたラシイヌをさへも包圍した。

斯うした其處に譯の解らない争奪戦が行はれた。

二三十人の人影は一言も物を云はなかつた。彼等は一切無言のまま、彼等の仕事を續けて行つた。支那青年の腕の中から彼等は女を奪ひ取つた。怒つて飛びかゝる青年を、五六人がかりで押へつけた。其時大きな眞黒の箱が彼等に依つて運び出され、面紗の女は彼等の手で其箱の中へ入れられた。それと見たダンチョンは其箱へ飛鳥のやうに飛びかゝつた。すると彼等は十人あまりでダンチョンを箱から引き離した。その拍子に箱の蓋が取れた。と、見よ！ 箱の内には、仔牛ほどもある狽々が、堅く鐵鎖で縛られながら、氣絶したまゝ倒れてゐる面紗の婦人の枕元に居然と坐つてゐるではないか！

蓋は直ぐに蔽はれた。その箱を彼等は引つ擔ぎ、黄浦河の方へ走つて行く。往來に無残に打ち倒された支那の青年はそれを見ると、よろめき／＼立ち上がったが、

「紅玉、紅玉、おゝ紅玉！」

斯う叫びざま又倒れて、そのまゝぐつたり動かなくなつた。どうやら氣絶したらしい。氣絶し

た彼のすぐ傍には、これも氣を失つたダンチョンが、無態の姿をして倒れてゐる。
 扱、ラシイヌはどうしたらう？ 彼も矢つ張り氣絶して往來の上に倒れてゐたが、併し彼の氣絶だけは本當の氣絶では無いのであつた。彼は不思議の一團が黒い箱を擔ぎ出すと見るや否や、彼等の様子を探ぐるため故意と彼等に亂打されて地上へ倒れて了つたのであつた。で彼は、彼等が立ち去つたと見るや忽然と往來へ立ち上がった。そして一瞬の躊躇もせずダンチョンの側へ駆け寄つたが、危険が無いと見て取ると、支那青年の側へ走つて行つて、その耳元へ口を當て、「オイ、しつかりせい張教仁！」と大きな聲で呼ばはつた。さうして青年の手に取つて其脈搏をしらべて見た。脈は幽に搏つてゐる。
 「まづ、是も危険は無い。」
 ラシイヌは呟いて立ち上がり、ほんの一瞬間考へたが、次の瞬間には足を早めて、黄浦河の方へ走つて行つた。

黄浦河の岸まで來た時にラシイヌは木陰に身を隠し、驚異の瞳を輝かせて河中の奇蹟を凝視した。

水面には支那船が浮かんでゐる。その甲板には柩のやうな例の黒箱が置いてある。それを圍んで群像のやうに彼等の一團がゐる。船尾には血のやうな火光を放す燈火が一つ据ゑてある。岸の方にも血のやうに赤い燈光がさも物凄く點つてゐる。その物凄く燈光と此方の赤い燈光とは合圖し合つてゐるらしい。

四邊は寂然ひそまり返へり、諸所の波止場や船渠の中に繋纏りしてゐる商船などの、マストや舷頭に點されてゐる眠むさうな青い光茫も、今は光さへ弱つて見えた。どこやらの時計臺で今幽に午後九時の時刻を報じてゐる。

支那船の中の一團は依然として靜かで無言である。矢つ張り下流を眺めてゐる。木陰に隠れてゐるラシイヌも位置から動かうともしなかつた。彼等の様子を眺めてゐる。

斯うして幾時間経たらうか、時計臺の時計は其度毎に陰氣な音を響かした。かうして時計が午前三時を物憂く三つ打ち終へた時、下流の方から闇を分けて一隻の船があらはれた。小型ではあるがその代はり速力の速やさうな商船である。その商船の速力はやがて徐々に緩くなつた。緩い船脚を續けながら支那船を凌いで行き過ぎたが、ほんの五六間行き過ぎた時一つの不思議が行はれた。と云ふのはそれは他でも無い。その商船が進むに連れて支那船も靜かに動き出し、商船の船腹へ近付いて行く。しかも二隻の支那船が、即ち、先刻まで遙か彼方に、燈火ばかりを見せてゐた其支那船も近付いて行く。

二隻の支那船が商船の腹へピタリと横付けに食付くや否や素早く繩梯子は投げられた。猿のや

うな速さでその商船へ彼等の一團は亂れ入つた。

忽ち起る怒號叱咤！ 七八發の拳銃の音！ 入り亂れて鬪ふ人の影！ 五分足らずの格闘で掠奪戦は終局した。珠數繋ぎにされた船員が甲板の上に倒れてゐる。それらを眼下に見卸ろして、大勢の部下に圍まれながら、白髪の高貴人が立つてゐる。部下達の翳さず燈火の光で、その風彩が鮮かに見える。丸龍を刺繡した支那服を纏ひ、王冠を頭に戴いてゐる。小肥の體にやゝ低い身長。鋭い眼光に締まつた口。あゝそれは曾ての大總統、又それは曾ての支那の皇帝、袁世凱の姿ではないか！

商船は船尾を蹴へした。そして異常の速力で元來の方へ引き返へした。かうして一隻の運送船は闇に姿を隠したのである。

程經て水上を巡邏してゐる水上警察署のモーターが何氣なくその邊へ差しかゝつた時、主のな二隻の支那船が波に漂々浮いてゐるのを不思議に思つて調べて見たが、目欲しい物は何も無かつた。勿論例の黒い箱も、もはや其處にはなかつたのである。

一一一

一切を見届けたラシイヌは、直ぐに其處から引き返へして、格闘の場所へ歸つて來た。すると依然としてダンチョンだけは、氣絶したまゝ倒れてゐたが、張教仁の姿は見えなかつた。

「それでは彼奴だけ甦へつて、何處かへ姿を隠したと見える。」

ラシイヌは心で斯う思つて飽氣ないやうな表情をしたが、ダンチョンを抛擲つても置けないので、彼を旅宿まで運ぶための自動車を探がしに街の方へ、大速力で走つて行つた。

ボルネオ航路の英國汽船の一等船室の寢臺には、體中を繃帯で包まれた「描かざる畫家」ダンチョンが情無さうな顔をして、彼の正面に腰かけながら愉快さうに喋舌つてゐるラシイヌの口許ばかりを見詰めてゐた。

ラシイヌは説明を續けて行く。

「……何ね、僕は、それ前から——描かざる畫家のダンチョン君を、誘惑してゐる貴婦人がある。と君から明かされないそれ前から、君のみならず僕等皆んなが、袁更生の一團から狙ひをつかれてゐるといふ事を、ちやあんと知つてゐたのだよ。どうして僕が知つたかと云ふに、教へてくれた人があつたからさ。誰かといふに他でもない北京警務廳の連中さ。つまり彼等は僕のために暗號電報を打つてよこして、北京警務廳の依頼によつて、袁更生の阿片窟を僕が暴露したのを怨みに思つて僕に怨みを晴らすため袁更生の一味徒黨が僕の行先に着き纏ひ上海に渡つたといふことを知らしてくれたといふものさ。その電報を見た時に僕は直覺的に斯う思つたね。いや、彼等が僕等を追つて事實上海へ來てゐるなら、その目的は僕なんかに危害を加へようといふのでは

無くて、僕等が抱いてゐる或目的——云ふ迄もなく南洋へ行つて埋もれてゐる寶を探がさうといふ、其目的を僕等の手から奪ひ取らうといふことが即ち彼等の目的であつて、僕に向かつての復讐などは眼中にあるまいと斯う思つたのさ。何故さう思つたかといふにだね、南洋に埋れてゐる寶に就いて、彼等は僕等とおんなし位の知識の所有者だといふことを、僕が発見したからさ。何處で発見したかといふに他ならぬ彼等の阿片窟さ。どうして阿片窟で知つたかといふに意外にも阿片窟の女部屋で、沙漠の娘と自稱してゐる紅玉といふ美しい土耳其娘を発見したからに他ならない。どうして紅玉がそんな處に捕虜になつてゐたかといふに袁更生の魔術に依つて引き寄せられたものと思はれるね。一旦魔術にかゝつたからは、紅玉と雖も袁更生の意志のまに／＼動かなければならぬ。で僕は紅玉は問はれるまゝに例の埋れた寶の所在を袁更生に話したと思ふ。扱それが事實だとすればだね、爾餘のことは自と解釋出来る。眞先に彼等は僕等の中の誰かを甘く捕虜にして、寶物の所在をもつと詳しく聴取りたいとかう思つて、君に白羽を立てたのさ。君が、モデルにしようとした面紗の女は囧なのさ。」

「それにしても面紗のあの女が紅玉であらうとは思ひませんでした。」

「僕だつて最初は知らなかつた……本來なれば紅玉は、阿片窟征伐のあの晩に張教仁に助けられて安全の所にゐる筈だが、その後袁更生の魔術の手に復讐ひ返へされたものと思はれるね。」

「紅玉ばかりか張教仁まで飛び出して来ようとは思ひませんでした。」

ダンチヨンは今でも痛さうに頭の邊を抱へながら呻くやうな聲で云ふのであつた。

「ほんとにあの男も可哀さうだ。しかし憎めない人間だよ。支那人に似合はない勇氣もあつて、仲々面白い所がある。」ラシイヌは微笑を含みながら「いづれ彼處へ飛び出したのは紅玉を奪ひ返へす爲だつたらう。どうやら張と紅玉とは戀人同志のやうに思はれるぢやないか。しかしそんな事はどうでもいゝ、兎に角このまゝ張教仁だつて黙つて引つ込んでゐないだらう。いづれ南洋へ押し渡つて僕等と競争するだらう。張の競争は恐ろしくはないが、鳥渡手強いのは袁更生だ。暗夜とは云つても黄浦河の上で堂々と汽船を奪つた手並は敵ながら天晴のものだつたよ。しかも手段が支那式で滑稽味を帯びてゐて面白かつた。」

「どんな手段を使ひました？」

「二隻の支那船を綱で繋いで、その綱を水中に張り渡したまゝ獲物の掛かるのを待つといふ、是が彼等の手段だつたのさ。果して汽船が引つかゝつたね。汽船は綱を引つかけたまゝづん／＼先へ進んで行く。汽船が進むに従つて二隻の支那船は近寄つて来る。たうとう汽船の横腹へ二隻の支那船がピッタリと左右から寄つて来て喰つ付いたものさ。一旦喰つ付いた支那船は綱に引かれて容易なことでは汽船の腹から離れようしない。そこで繩梯子を引つかけける。それを傳たはつて甲板の上へ蠡斯のやうに躍り込む。拳銃を五六發ぶつ放す。これで仕事は終へたのさ。どうやら僕の見た所では、敵の大將袁更生殿は、僕の立つてゐた反對の側の支那船の中にもたらしかつ

た。
 「それにしても狸々は何んのために箱の中になんか入ったんでせう！」ダンチヨンは俄かに眼を丸くして恐ろしさうに叫んだものだ。
 「あれか。」とラシイヌは頷いて、「あれには僕も驚いた。しかし後になつて気が付いたが、魔法化された狸々なのさ。そして袁更生の身代なのさ。つまり紅玉の監視者なのさ。」
 「どうも私には解りません。」
 「どうやら僕の袁更生観は最初とは多少變はつたらしい。最初は僕あの男を催眠術師と思つてゐた。しかしそいつは違つてゐた。彼は道教の方士らしい。方士は自分の身代に悪獸を使ふといふことだ。その悪獸に法術を加へて獸の本性を失はせ、反對に自分の意志を注いで自己化した獸にするといふことだ。さうして自己化した其獸を鬮と名付けるとかいふことを本國の圖書館で見たことがある。あの狸々は鬮蕩なのさ。だから狸々は袁更生に代はつて袁更生の役目を務めたのさ。紅玉を操釣つて居たのさ。」

一一一

「皆さんの船がラブアン島邊で、支那の海賊に沈められたと、新聞で讀んだ時の驚きと云つたら、いまだに心臓が躍つて居ります。ところが當の貴郎から一同無事に上陸したと人電した時の嬉しさは言葉で説明なんか出来ません。それで取る物も取り敢へず駆けつけて来たのでございますよ……」

——この一行の探検隊の先乗としてずつと前から、南洋へ渡つてゐたレザール探偵は、ラシイヌ探偵からの電報を見て、ほんとに取る物も取り敢へず、ラシイヌの一行を待ち構へながら滞在してゐたボルネオの首府の、サンダカンから自動車を走らせ、ラシイヌ達が避難してゐる此處クック村の護謨園へ、たつた今到着した所であつた。

「早速来てくれて有難い。」

疲労の様子などは何處にも見えない相變らず元氣のよい言葉つきで、ラシイヌは先づ禮を云つた。それからラシイヌ一流の事務的口調で今度の事件の大體の經過を物語つた。

「……いづれ詳細くは後から云ふがラブアン島の沖合まで僕等の船が来た時にだね、突然島蔭から現はれて發砲しかけた船がある。船の形は商船だが船首と船尾に一門づゝ大砲の筒口が光つてゐるので海賊船とすぐ知れたよ。大砲を二三發打ちかけて置いて停まれの信號をしたものさ。逃げようと思つても向うの船が素晴らしく船脚が速さうだから逃げ了はせることが不可能だ。やむを得ず船は停まつて了つた。賊船はドン／＼近寄つて来る。船客達は騒ぎ出す。號泣、怒號、神に祈る聲！ 愉快な航海が一瞬の中に修羅の巷と變はつたのさ。いづれ海賊と云つた所で黙つて穩なしくしてさへ居れば命まで取らうとは云はないだらう。有金財産みんなやつたらまさか船

は沈めないだらうと斯う僕は心で覺悟を決めて博士やダンチヨン君にも意を傳へて靜かに甲板へ立つたまゝ近寄る賊船を見てゐたところ、何うも近寄るその賊船に見覚えがあるやうな氣がしたので双眼鏡で眺めたものさ。すると見覚えがある筈だ！ 袁更生の一團が黃浦河の上で掠奪した例の和蘭の汽船ぢやないか！ しまつた！ と僕は叫んだね。まご／＼してはゐられない！ みんなの生命に關することだ。僕は博士とダンチヨン君とマーシヤル醫學士とを従へて船尾の短艇へ走つて行つた。遁がれるだけは遁がれて見よう。斯う思つてみんなを短艇へ乗せてそれを海上へ下ろして置いて僕もそいつへ飛び込んだ。それ漕げ！ と、僕の命令と一緒に力任せに漕ぎ出したね。海城どもは其中に此方の船へ亂れ入つてあらゆる掠奪を行つた揚句暴逆なる撃沈を實行して悠々と引き上げて行つたんだが天の佐けといふものか僕等の乗つてゐる短艇の姿を彼等は發見しなかつたらしい。追撃される心配も無く僕等は短艇を漕ぎ進めた。しかし何處まで漕いで行つても陸らしいものゝ影も見えない。そのうちに夜がやつて來た。その夜が明けても陸が見えない。其時の僕等の失望と云つたら……空腹と熱さと喉の乾きとで誰も彼もみんなへたばつたものさ。やがて復もや夜となつた。みんなは漕ぐのを止めて了つて仰向けに船の中へ寝たものだ。僕だつて御多分に洩れはしない。ちつと空の星を見詰めながらあぶなく涙を落とさうとしたね。陸の上なら兎も角も鰐の住む南洋の波の上では腕の振りやうもないからね。そのうち僕はうと／＼とした。幾時間寝たか覺えはないが可成り眠つたことだらう。ハツと眼が覺めて前方を見ると朝陽に

照らされた護謨林が壁のやうに立つてゐるぢやないか！ 思はず僕は飛び起きたね。さうしてみんなを揺り起して船をその岸へ着けたものさ。護謨の林があるからには護謨園があるに相違ない。護謨園があるなら人間があるよう。その人間を探がすことが何より急務だといふことになつて、林の中を分けて行くと果たして護謨園の前へ出た。その時の嬉しさといふものは思はず關聲をあげたくらゐだ。こんな事情で今日まで護謨園の主人に保護されて生活してゐたといふものさ。聞けば護謨園とサンダカンとは、三十哩足らずの道程で自動車も通ふといふことだつたので、園の事務員に御願ひして君の所へ昨日遅く電報を打つてやつたんだが、こんなに早く來て貰つてみんなも心強く思ふだらう。」

ラシイヌはやをら立ち上がつて、窓へ行つて戶外を覗いたが、
「護謨林の様子を見るとか云つて先刻みんな戶外へ出て行つたが、そのうち歸つて來るだらう。」
斯う云ふと長椅子へ腰を下して前途の冒險を考へるかのやうに軽く其眼を閉じたのであつた。
木小屋式の建物の内は暫の間靜かであつた。窓を通して眞晝の陽が護謨林の頂から射して來るのが室の板壁へ班點を着けそこだけ黄金色に輝いてゐる。聞いたこともないやうな南洋の鳥が林から廣場へ飛んで來て、窓の方を横目で見遣りながら透明の聲で唄つてゐるのが、室の中に寝てゐる病人達を慰めてゐるやうにも思はれる。林の中のあちこちから護謨採液の土人乙女の鄙びた唄聲も響いて來る。亡國的の哀調を含んだ加之のびやかな調である……

その時正面の扉をあけてマハラヤナ博士が這入つて來たが、レザールの居るのも氣がつかないやうにセカ／＼とラシイヌに云ふのであつた。

「唄を聞き給へ！ 士人乙女の唄を！」

「先刻から聞いては居りますがね……」

ラシイヌは鷹揚に返辭へる。

「で、君はあの唄をどう思ふね？」

博士の口調は眞面目である。

「どう思ふと訊かれても困りますな。私は西班牙の人間でボルネオ士人ではありませんから、唄

の文句さへ解かりませんよ。」

「成程」と博士は顔を顰め、「これはこの私の誤りぢや……それでは私が譯してあげよう。文句は

極めて簡單ぢやからの。」

それから博士はうたふやうな調子で士人の唄を譯して行つた。

昔、昔、大昔に

二羽の巨鳥が住んでゐた

「人間を作らうぢやあるまいか。」

一羽の巨鳥が斯う云ふと

「そいつはおゝきに宜いだらう。」

他の一羽もかう云つた。

いちばん最初に作つたのは

巨きな巨きな樹であつた

二番目に彼等の作つたのは

堅い堅い石であつた。

「樹から人間は作れないよ。」

「石からも人間はつくれないよ。」

「水と土とで作らうか？」

「おほきにそいつはいゝだらう。」

水と土とで作られたのは

私達の先祖、人間様！
土が積もつて山となり
水が溜まつて湖となる。

山と湖とに守られて

私達の先祖が住んでゐる

湖と山とに囲まれて

先祖の寶が秘藏されてある。

譯して了ふと老博士はラシイヌの顔を眞直ぐに見て熱心な口調で云ふのであつた。

「湖と山とに囲まれて私達の先祖が住んでゐる。山と湖とに囲まれて先祖の寶が秘藏されてあ

る。……この唄の意味をどう思ふね？ 僕等が是から向はうとする寶庫探檢の目的とこの唄の文

句に含まれてゐる一つの暗示的の意味との間に脈があるとは思はないかね？……」

すると、其時まで博士の横に黙つて立つてゐたレザールが、横の方から口を出した。

「大いに有ると思ひますな……實は私もこの唄の意味とそつくり同じ意味のことをボルネオ土人

から幾度となく話して聞かされたものですよ。つまり其爲に濠洲の方を探檢するのを後に廻して

ボルネオから先に探檢べようと、數回手紙や電報でラシイヌさんと打ち合はせて、濠洲のメルボ

ルンへ行く途中、サンダカンへ先に上陸して、兎も角もボルネオの奥地の方を、探檢しようとする人々の間だけでは決定してゐたのでございませよ。どうして／＼私達に取つては土人の唄や傳説は決して馬鹿には出来ません。第一私の目的が、數千年前に生きてゐた沙漠の住民の羅布人が國家の滅びる其際に隠匿したといふ大財寶を、發見しようといふのですから既に立派な昔噺式で傳説的でもあるのです。まして今では發見に就いてのこれぞといふ手懸も無いのですからせめて土人の傳説か俚語でも、手懸の一つにしなかつたら取つ付き場所がありません……」

マハラヤナ博士は驚いたやうにレザールの顔を眺めたが、

「お、君はレザール君か！」

「博士御無事で結構でした。」

「君は濠洲の方に居る筈だが？」

「左様、濠洲の方にも居りました。たゞし只今申し上げたやうなあゝいふ事情がありましたので

少し前から此ボルネオのサンダカン市に来てゐました。」

「成程。」と博士は眉をしかめ、「それぢや何かね、濠洲より先にこのボルネオを探るのかね……僕

は少しも知らなかつたが。」

「絶體の秘密を保つため今迄申し上げないで居りました。」

「それぢや僕等が海賊に襲はれて此ボルネオへ避難したのはあまり損でもなかつたのだね。」

「天の祐けといふものでせう。」
三人は愉快さうに哄笑した。林の中からは乙女の唄が尙のどやかに聞えて来る。眞晝の光で樹の梢は黄金のやうに輝いてゐる。

二四

ボルネオ政廳の玄関には山のやうに人々が集まつてゐた。南國の空はよく晴れて朝陽がキラキラと輝いてゐる。椰子の葉隠れに啼いてゐる鳥も今日の門出を祝ふやうだ。一臺の自動車が見物を分けて静かに前へ送り出た。車内にはラシイヌとダンチョンとマハラヤ博士とマーシャル氏とが元氣の溢れた顔をして悠然と坐席に着いてゐる。この勇敢な探検隊をよく見ようとして群集は自動車の周囲へ寄つて来た。政廳の露臺には州知事をはじめサンダカン市の名譽職達が花束を持ちながら並んでゐる。道路には警官が立ち並んで大聲で群集を制してゐる。家々の門には國旗が樹てられ、街の四辻の天幕張からは樂隊の音色が聞えて来る。
其時知事は露臺の上から、その探検の成功と隊員の無事とを祈りながら花束を自動車へ投げ込んだ。それに續いて名譽職達は手に／＼持つてゐた花束を雨のやうに下へ投げ下ろした。樂隊は進行曲を奏し出す。見物の群集は関を上げる。響と色彩と人の顔とが／＼り亂れてゐる雑沓の間を徐々と自動車は動き出した。やがて市中を出外れると一時間二十哩の速力で自動車は猛然と走り

出した。目差す所は森林である。その森林には探検用のさまざまの道具を守りながらレザールが待ち受けてゐるのである。斯うして自動車は進みに進み其日の正午を過ぎた頃、遙か彼方の護謨林の中に幾個か張られた天幕の姿が白く光るのを見るやうになつた。自動車が近づくに従つて林の中から一行を迎へる歡呼の聲が聞えて来た。純白の天幕を圍繞いて銅色の肌をした土人共が蠅のやうにウヨ／＼集まつてゐる。その中に一人白々と夏服姿の若紳士が小手をかざして見てゐるのは無論レザールに相違ない。
自動車は警笛を吹き鳴らし次第々々に速度を弛めだん／＼林に近寄つて行つた。そして全く停まつた時には自動車の周囲は土人の群で身動きもならない程取り巻かれた。彼等は一齊に手を上げて無事の到着を祝すための奇妙な叫び聲を擧げるのであつた。
ラシイヌの一行は自動車を降りて土人の中を掻き分け乍らレザールの後に従つて天幕の方へ歩いて行つた。林の中の有様は恰度軍隊が野營したかのやうに、活氣と混雜とに充たされてゐる。馬や水牛は草を喰みながら絶えず尻尾を振つてゐる。小蟲の集るのを防ぐためだ。火を焚いてゐる土人がある。いづれも殆ど半裸體で足に藁靴を穿き乍ら、其足でパタ／＼地面をた／＼いてボルネオ言葉で話し合ひ時々大聲で笑ひ出す。弓を引いてゐる土人もある。護謨の林の奥を目掛けてヒューツとその矢を放すと同時に、木立の上から南洋鷹が彈丸のやうに落ちて来た。武器の手入れをする土人もある。銅笛を吹いてゐる土人もある。競走をしてゐる土人もある。

十數の天幕を支配するかのやうに、巨大の天幕がその中央に棟高く一張張られてあつたが、ラシイヌ達の一行はその天幕へ這入つて來た。
ラシイヌは四邊を見廻してから事務的口調で質問だした。
「土人は一人も逃げないかね？」
「そのうちポツ／＼逃げ出すでせうが、今の處一人も逃げません。」事務的口調でレザールも云つた。
「それでは總勢百人だね？」ラシイヌは軽く頷いて、「探検用の道具類は一つも盗まればしないだらうね？」

「一應調べることに致しませう。」
天幕二つに満たされてある道具類の検査が始まつた。一つの天幕には武器の類が順序よく並べて置かれてある。七十挺の旋條銃、一萬個入れている彈藥箱、五十貫目の煙硝箱、小口径の砲一門、五個に區劃した組立船、二十挺の自動銃、無数の鶴嘴、無数の斧、シヤベル、鋸、喇叭、國旗、その他細々しい無数の道具……もう一つの天幕には食料品が山のやうにうづ高く積まれてある。それに蒙昧の野蠻人を歸服させるための道具として數千粒の飾玉やけばけばしい色の衣服類や無数の玩具や箱に入れてこの天幕に隠して置いたが、それら一切の武器や食料は少しも盗まれてはゐなかつた。

その夜は其處で一泊して翌日いよいよ奥地を目指して探検隊は出發した。河幅大略二町もあるパンバイヤ河の岸に添つて元氣よく出發したのである。アチン人種、野來人種、ザンギパール人種、マホメダ人種、さまざまの人種が集まつて出來た土人軍の五十人が先頭に立つて、進む後から、白人の一團が進んで行く、その後を小荷駄の一隊が五十人の土人軍に守られて肅々として歩をすゝめる。數百年來人跡未踏の大森林は空を蔽うて晝さへ夕暮のやうに薄暗く、雑草や能笹や齒朶や桂が身長より高く生ひ茂つた中を人馬の一隊は蠢めいて行く。先頭の一團は斧や鋸で生木を拂つて道を造り岩を砕いて野を開き川を埋めて橋を掛け後隊の便を計るやうにすれば、後隊の方では眼を配つてダイアル人種、マキリ人種などの食人種族の襲撃から免かれしめるやうに心掛ける。先頭の隊で太鼓を打てば後方の隊でも太鼓を打つ、白人隊で喇叭を吹けば土人軍でも喇叭を吹く。そして時々喊聲を上げて猛獸の襲來を防ぐのであつた。白人は全部馬に乗り土人軍でも酋長だけはボルネオ馬に騎がつかつた。曉を待つて軍を進め陽のあるうちに野營した。斥候を放し不眠番を設け不意の襲撃に備へるのであつた。一日の行程僅に二里、目的す土地までは一百里、約二ヶ月の旅である。しかも最後の目的地に果して寶庫があるや否やそれさへ今のところ不明である。それに、もう一つラシイヌ達に執つて、心にかゝることがある。袁更生一派の海賊が矢張りこの島に上陸してゐて、矢張り土人達の唄を聞き又土人達の傳説を聞いて寶庫の所在に見當を付けて、その寶庫を發くため探検隊を組織して奥地に向かつて行きはしないか？ もしも

彼等が行つたとしたら我々白人の探検隊よりも遙かに便宜がある筈である。ボルネオ土人の風習として亞細亞人に好意を盡くすからである。土人の好意を利用して彼等亞細亞人の海賊共は捷徑を撰んで奥地に分け入り、我々よりも一足先に寶庫の發見を遂げはしないか？——これがラシイ又達の心配であつた。それで彼等は一刻も早く奥地々帯へ踏み込まうと土人軍共を鞭撻した。しかしどのやうに鞭撻しても荆棘に蔽はれた險阻の道をさう早く歩くことは出来なかつた。

二五

行く行く彼等は土人の部落——即ち部落へ到着し毎に飾玉や玩具を出して見せて彼等の食料と交換した。米や野菜や鶏や卵や唐辛又は芭蕉の實やコ、アなど、貿易したのである。部落の土人は想像したより彼等に敵意を示さなかつた。貯藏してゐた食料を取り出して来て惜氣もなく彼等と交換した。そして一行を歡待して土人流の宴會を開催してもくれた。羽毛を飾つた兜を冠つて人間の齒の頸飾をかけ、磨ぎ澄ました槍を手に提げ宴會の庭へ下り立つて戰勝祝ひの武者踊りをさも勇猛に踊つてもくれた。尤も時には一行に向かつて敵意を現す部落もあつた。バンバイヤ河の水源のバンバイヤ湖へ來た時に突然葦の繁みから毒矢を射出する者があつた。味方の土人が五六人それに當たつて地に倒れた。それに驚いた味方の土人は一度に後に退いたが旋條銃の狙ひをよく定めてやがて一齊にぶつ放した。次第に消えて行く煙の間から湖水の方を眺めて見ると獨木舟

が凡十五六隻周章てふためいて逃げて行く。多數の死傷者があるらしい。味方の土人は勢ひを得て岸に沿うて敵を追はうとしたがラシイ又はそれを許さなかつた。伏兵のあるのを恐れたからだ。味方の負傷者を調べて見るといづれも傷は浅かつたが、鏃に劇毒が塗りつけてあるので負傷者はのた打つて苦しがる。そして漸時に弱つて行く。マーシャル醫學士は智慧を絞つて負傷者のために盡したけれど、二人だけは其夜息が絶えた。土人の死骸を埋葬してから一行は尙進んで行つた。一つの部落へ着いた時、不思議にも部落は空虚であつた。一人の土人の姿も無い。そこで一行は安心して部落の空地へ天幕を張つて、其夜の旅宿を其處に定め各々眠に就かうとした。恰度眞夜中と覺しい頃、突然部落の家々から一齊に焰を吐き出したので、一同は初めて土人達の計略に落ちたことを感付いた。焰はその間も天幕を包んで四方から刻々に襲つて来る。立ち昇る火の粉を貰いて雨のやうに毒矢が降つて来る。無智の土人達は火を怖れて消さうともせず顛へてる。馬や水牛やボルネオ犬は——いづれも荷物を運ばせるために市から連れて來た家畜であるが——火光に恐れて手綱を切つて焰を目掛けて飛び込まうとする。味方は火薬を持つてゐるだけに危険の程度が大きいのであつた。火焰が天幕を焼くやうになつたら自と火薬は爆發しよう。五十貫の火薬箱がもし一時にも爆發したら、一行百餘人の生命は粉な粉になつて飛んで了うだらう！

ラシイヌもレザールもマハラヤナ博士も、ダンチヨンもマーシャル氏も手を束ねて茫然と火勢を見てゐるばかりでどうすることも出来なかつた。椰子や護謨の樹に燃え移る焰が樹油にパチパ

チ刎ねる音や、燃え崩れる小屋の地響や、敵方の上げる鬨の聲が、千古斧の入れない森林の夜を戦場のやうに掻き立てる。

その時、四人の酋長の中、ザンギパール人の酋長が息せき切つて走つて来たが、マハラヤナ博士を捉らまへて何か早口に話し出した。

それを博士が通辯する……

「飾玉を百個くれるなら敵の土人と和睦して、火事を消し止めてお目にかかるこの酋長が云つてゐるのです。」

「飾玉で和睦が出来たら二百でも三百でも呉れてやりませう！」

ラシイヌは喜んで斯う叫んだ。博士がそれを通辯する。すると酋長は身を翻へして側の椰子の樹へよぢり上り敵の土人を見下したが、そこから大聲で呶鳴り出した。と、不思議にもそれつきり敵の方から矢が来なくなつた。間も無く焰の勢ひが弱つて次第次第に消えて行つた。危険は全く去つたのである。危険が立ち去つたばかりでなく、新たに五十人の味方が出来た。今まで敵であつた部落の土人が、五十人の壯丁を選すぐつて従軍させたいと云ひ出したからで、ラシイヌはそれをすぐ許した。彼等部落の土人どもはザンギパール人であるのであつた。それで此方方のザンギパール人の酋長の提議をすぐに入れて容易く和睦をしたのであつた。

百五十人の探検隊は翌日部落を發足して奥地への旅を續けて行つた。無限に續く大森林！ 森

林の中の山と川！ 底無しの沼や鰐の住む小川！ それを越えて奥へ奥へ既に一月も進み進んで

英國領も何時か越え、和蘭領へ這入り込んだ。斯うして尙も追撃を續け、日差す奥地も間近くなつた。その時慄悍なダイヤル種族の大部落と衝突したのであつた。

幾度かの小戦闘が行はれた。食人人種ダイヤル族は尊に勝さつて猛悪であつた。味方の土人は彼等を恐れ前進しようとはしなかつた。彼等の姿を一目でも見ると手の武器を捨て、逃げるのであつた。それを叱ると罰を恐れて隊から逃亡するのであつた。十人あまりも既に逃げた。逃げる時土人は銃を盗んだり飾玉を盗んだりして逃げるのであつた。

或夜、敵方の陣地から不意に唄聲が聞えて来た。それは意外にもあの詩であつた。

古木天を侵して日已に沈む

天下の英雄寧ろ幾人ぞ

此間何人か是主人

巨魁來巨魁來 巨魁來

この詩を聞くとラシイヌはいま／＼しさうに斯う云つた。

「心配した通り袁更生めがダイヤル族を手なづけて旨く味方に引き入れたらしい。海賊の一味が加はつたからには、ダイヤル族のあの陣地は容易に抜くことは出来ないだらう。仕方が無いから僕等の方でも堅固な砦を築くことにしよう。」

斯うしていよく兩軍の間には持久戦の準備が始められた。

二六

(張教仁備忘録)……どこから私は書いて行かう？ 私の頭は亂れてゐる。何んと言つて私は説明をしよう？ 私は全く五里霧中だ……ラシイヌ探偵の親切で一旦奪はれた紅玉を阿片窟から奪ひ返へして燕樂ホテルへ連れ戻つたのもほんの一時の喜びであつた。或日私の目の前で彼女は窓から飛び出して再び行衛を晦して了つた。袁更生の邪教に誘はれてふたゝび犠牲になつたのだ。それからの私は狂人であつた。袁更生の行衛を追つて北京から上海へ下つて来たのも紅玉を取り返へしたい爲であつた。しかしどのやうに探しても紅玉の行衛は解からない。私は到頭諦らめて南洋に向かつて去らうとした。寶庫を探しに行かうとした。私は費用を使ひ果して此時全くの無一文であつた。そこで私はいろ／＼に考へ私のいつもの十八番の手で南洋航路の英國船の料理人として雇はれた。明日はいよく出航といふその前の日の宵の中を私は公園の柵の外の海岸通を歩いてゐた。公園の中の樂堂では管絃の音が聞えてゐる。青葉を渡る風の音が公園の並木に當たつてゐる。大變和かな夜であつた。私は何氣無く前を通ると面紗を冠つた若い女が足早に向うへ歩いて行く。姿こそ變はつて居るけれど何んで彼女を忘れよう！ それは紅玉に相違ない。それからの私の行動は自分ながら愚劣に思はれる……矢庭に私は走りかゝつて紅玉を腕に引つ抱へ

た。紅玉の背後から追跡けて来た一人の大きな歐羅巴人が突然私の邪魔をした。……不意に其時闇の中から無数の人間が飛び出して来て私と歐羅巴人とを打ち倒し紅玉を箱の中へ入れようとした。……箱から現はれ出た大狸々！ 私はそのまゝ氣絶して再び吸呼を吹き返した時には四邊は寂然と静まり返へり、一人先刻の歐羅巴人が死んだやうに倒れてゐるばかりだ。私の負傷は輕かつたので疲勞れた足を引きづり引きずり、汽船の料理人部屋へ這入り込んで深い眠りに墜ちて了つた。

航海は大變無事であつた。臺灣海峡も事無く通りやがて香港へ到着した。南支那海を南東に向けて再び航海は續けられた。フィリッピン群島を左に見て英領ボルネオの首府サンダカンへ次第に近寄つて行つた。航海はこれ迄は無事であつた。しかし偶々ラブアン島邊へ正午頃船が差しかつた時突然大難が起つたのであつた。即、海賊——袁更生の船が汽船を沈没させたのであつた。

私は海へ飛び込んだ。鯨や悪魚の住んでゐる海へ。それでも私は喰はれもせず暫くの間泳いでゐた。その時短艇が何處からともなく私の側へ漂つて来た。疲勞れた手足を働かせて私はボートへ這ひ上がった。人影は無くて肉の碎片が眞紅に船底を濡らしてゐる。そして其處には一本の權と一挺の短銃と若干の彈丸と萬年筆と手帳とが血に穢れて散らばつてゐる。恐らく誰かゞ短艇に乗つて、賊から遁がれようとしたのだらう。然るに不幸にも賊に見つかつて鐵砲で撃たれて海へ

落ちたのだらう。——死んで其人は不幸ではあるがお蔭で此方は大助りだ！ 斯う思ひ乍ら四邊を見ると既に賊船の姿はなくて今まで乗つて来た汽船の蔭さへ何處の波間にも見えなかつた。私はホツと安堵して夫れからボートを漕ぎ出した。間もなく日が暮れて夜が来た。激しい空腹と疲労とは私を昏睡に引つ張り込む。今眠つては危険である！ 死に誘惑される眠であると、心中では思ひ乍ら何時か眠に捕へられた。

……幾時間私は眠つたらう……

何者か私の全身を摩擦してゐる者がある。嫻かではあるが粗い手で私の全身を擦つてゐる。その快い觸覚が疲労と苦痛とで麻痺してゐる私の肉體を勞はつてくれる。私の意識は次第々々に恢復するやうに思はれた。どうかして一目眼を開かう、眼を開いて私を勞つてくれる親切な人を見ようとしても重い眼瞼は益々重くどうすることも出来なかつた。それでも私は努力した。そして漸く薄目を開けてあたりの様子を見ようとした。すると其時私の體を撫で廻してゐた手が止まつた。いくらあたりを見廻はしてもそれらしい人の姿も無い。たゞ此處に一つ不思議なことには日光から私を防ぐため棕櫚で拵へた大きな笠が私の體を蔽うてゐる。そして砂地に足跡がある。跣足の人間の足跡である。その足跡は海岸の背後の大森林まで續いてゐる。岸邊を見ると繫ぎ止められたボートが水に浮かんでゐて舟の中には元通り短銃や萬年筆が置いてある。私は其處まで這つて行つて其れ等の物を取つて来たが、もう這ふことも出来なくなつた。私は腹を砂の上へ丸

太のやうに轉つてそのまま昏々と眠に入つた。さうして再び目覺めた時には私の側に椰子の果實呑水とが一椀置いてあつた。果實を食つて水を飲むと私は漸く元氣づいた。棕櫚笠を頭に戴いて短銃と彈丸帶を腰に着けて手帳と萬年筆とは下衣に隠して林の方へ這入つて行つた。何より先に蘇生させてくれた恩人の姿を見つけようと足跡を手頼りに進んで行つたが、林へ這入ると雑草に蔽はれ見出すことが出来なかつた。雑草は丈延びて身丈よりも高く林の中は夜のやうに暗い。喬木は轟々と空に延し上がり葉と葉は厚く重なり合ひ數町或は數里に渡つて緑の天蓋を造つてゐる。太古のまゝの静けさが森林の中に巢食つてゐる。鳥も啼かず人影も無く風さへ葉の壁に遮られて林の中までは吹いて来ない。

自然の嚴肅に打ち拉がれて私は茫然と立ち盡した。一體どうしたらいいのだらう？ 是から俺はどうしよう？ 斯う思つて来て自分ながら恐ろしい運命に戰慄した。

二七

何方へ行かうかと森林の中を途方に暮れて見廻した時、またも奇蹟が發現された。此方へ来いといふやうに丈なす草が薊り取られ小徑が出来てゐるのではないか！

「足跡の主に相違ない」

私はすぐに斯う思つた。それで少しも躊躇せず小徑を奥へ歩いて行つた。私は幾時間歩いた

らう！ 體が綿のやうに疲勞れて來た。私は一步も進めなくなつた。此處でこのまゝ倒れたなら
猛獸毒蛇の恐ろしい牙がすぐにも噛みつくと思ひ乍らどうすることも出来なかつた。齒朶の葉の
茂つてゐる地面の上へ私はバツタリ腰を下ろした。すぐに睡眠が襲つて來る。私は眠に落ちたら
しい。眠り乍ら私は手の觸覺を體の全體に感じてゐた。嬾かではあるが粗い掌の絶え間無い觸覺
を感じてゐた。

どれだけ眠つたか私には一向見當がつかかなかつた。眼を開いて見ると朝だと見えて厚く重なつ
た葉の天蓋から二筋三筋日光の縞が黄金線のやうに射してゐた。林の中の諸々の葉は朝風に揺れ
てさも嬉しさうに上下に舞踏を踊つてゐる。そして私の枕元には新鮮な果實が置かれてある。私
は朝飯をそれで済ますと體に勇氣が充ちて來た。やをら私は立ち上がつて森林の旅を續けようと
した。其時何氣なく四邊を見ると私のすぐ側の雜草の中に巨大な一匹のボルネオ虎が毒矢に貫か
れて死んでゐる。私は思はず飛び上がった。身の毛の慄立つ思ひをしながら死骸の側にゐんだ。
「昨夜こいつがこの俺を餌食にしようと襲つて來たのを、例の眼に見えない恩人が毒矢で射殺し
てくれたのだらう。」

私の心は感謝の念ではち切れさうに思はれた。そして私はどんなことをしてもその恩人を發見
だして思ふさま感謝を捧げないことにはどうにも氣がすまなく思はれて來た。私は毒矢を抜き取
つて仔細にそれを調べて見た。土人の使ふ弓矢である。鏃の先には銚色をした毒液がたつぷり塗

りつけてある。記念のために其弓の矢を私は大事に手に持つて先へ的なしに進んで行つた。昨日
のやうに雜草の中に一筋徑が出來てゐる。朝風が止むと林の中はまた音も無く静まり返つて陽の
光さへ幽になつた。草の丈は益々高くなる。喬木はいよ／＼生ひ茂つて何處で盡きるとも想像が
つかない。今の私の境地ほど寂しい境地はないだらう。しかし私は私を守る例の恩人が絶えず何
處かで見張つてゐてくれると思ふので寂しくも恐ろしくも思はなかつた。私は私の恩人に就いて
いろ／＼想像を廻らして見た。毒矢を使ふ上からはこの島の土人に相違ない。しかし私を撫すつ
た時の嫺かな手付を考へて見るに男のやうには思はれない。それでは土人の女だらうか？
「土人の女がこの俺のやうな支那の若者を斯う熱心に保護してくる所以がない。」

斯う思ふに就けてもいよ／＼私はその恩人を一目なりとも見たい希望に燃え立つた。
其日も林で一日暮らして三日目の晝頃になつた時少し林がまばらになつて空の蒼味と陽の光と
が若干か仰がれる小丘へ出た。見ると其丘の頂に三本の檜の木が立つてゐて、二丈あまりの高
い所に風雨に曝らされた木小屋が一ついかにも嚴重に造られてあつて、丈夫な繩梯子が掛かつて
ゐた。小屋の古さに比らべては繩梯子はまだ新しい。私は丘へ上つて行つて注意深く小屋を見
上げて見た。その構造でその小屋が猛獸狩りに用立てるためずつと昔に造られたもので、今はも
ろ誰もその小屋には住んでゐないといふ事が感じられた。猛獸狩りの小屋だけに素晴らしく嚴重
に造られてある。四方の板壁には規則正しく三つ々の銃眼が造られてあるし正面の扉などは錆び

てこそ居れ鐵の一枚板でつくられてある。

私は念のため小屋に向かつて幾度もくも呼んで見た。勿論答へるものもない。そこで私は決心してそろ／＼と繩梯子を上つて行つた。小屋の内には豫想した通り人間の住んでゐる氣配もない。ガランとして空虚である。熱帯蜘蛛の大きな網が到る所にかかつてゐる。床には塵埃が積もつてゐる。そして木椅子や卓子が五人前ちやんと揃つてゐる。室は二つに仕切られてあつた。奥の小部屋は寢室と見えてポロポロの寢具が敷かれてある。

「五人の勇敢な獵師どもがボルネオ虎や猩々や馬來種の猪を獲るために此小屋の中に閉ぢ籠もつて銃眼から獵銃を發つたものらしい。澤山獲物が出来たので小屋をそのまま放擲つて何處かへ立ち去つて行つたのだらう。風雨に曝らされた板壁の様子や床に積もつた塵埃から推すと、三年、五年、もつと以前から小屋は造られてあつたものらしい。

斯う思ひながら尙私は室の様子を見廻した。すると今迄氣が付かなかつたが室の片隅のテーブルの上に、果實がうづ高く積んであつて椰子の實で拵へた椀の中に飲料水さへ盛つてある。鳥渡驚いて眼を見張つたがそれでも直ぐに感付いた――

「眼に見えない例の恩人」が晝食を送つてくれたのだらう。

そこで木椅子へ腰掛けて味の好い賜物を頂戴した。それから小屋に別れを告げて繩梯子を傳つて下りようとした。その繩梯子が見當らない。ほんの先刻まで掛かつてゐた棕櫚繩の梯子が見當

らない。私は呆然と突つ立つたまゝ考へることさへ出来なかつた。

「これは一體どうしたんだ！」私は聲を筒拔かせて無意味に室の中を見廻した。ほんとに是はどうしたんだ！ 棕櫚繩の梯子は私の足許に手繰られて置かれてあるでは無いか！ 一體誰が手繰

つたんだらう？ 云ふ迄も無く「恩人」だ！ どういふ意味で手繰つたんだらう？

「ほんとにどういふ意味だらう？」

私は暫く考へた。

私の胸へ光明が一筋しらくと白んで來た。

「さうだ！」と私は膝を打つた。「小屋に住めといふ謎なんだらう！ 雑草を刈つて徑をつけて此

處まで私を導いて來て梯子を外づしたといふのだから是より他に考へやうはない……住めといふなら住むことにしよう。住みよさうな小屋でもあるし猛獸の害から遁がれることも出来る。的

なしに林を彷徨うより此處に居た方がよさうだ」

私は俄に決心して室の掃除に取りかゝつた。それから自分で繩梯子を掛けて林の方へ枯草を採りに――それで寢床を拵へるつもりで――雑草を分けて這入つて行つた。

其日とそして其翌日と二日かゝつて小屋の中を規則正しく片附けた。今のところ食料と飲料水とは「見えぬ恩人」が持つて來てくれるので心配する必要は無かつたけれど、何時それが中止になるかもしれぬ。自分で食物と飲料水とを供給することに心掛けなければ困難な目を見るだらう

……このやうに私は考へ付いたので果實の所在と泉の出場所とを毎日熱心に探し廻つた。

私はこんな様に考へた……
「こんな嚴重な小屋を造つて猛獸狩りをした位だから、十日か二十日か小屋を見捨て、立ち去つて行つた筈は無い。一月や二月は小屋に籠つて生活してゐたに相違ない。或は半年も一年も此處に籠つてゐたかもしれない。それでは其間を獵師達は市から持つて來た食料や水で、生活をしてゐたらうか？ 五人の獵師の一年間の食料！ それは随分大したものだ。とてもそれだけの大量の物をこの小屋へ貯へては置かれぬ。夫れでは彼等はどうしたらう？ 自分の思ふ所では恐らく彼等は食料や水を小屋の附近の林の中で求めてゐたに違ひない！ だからそいつをこの俺も林の中で見つけよう。」

幸ひにも私のこの考へは間もなく事實になつて裏書された。半哩と離れない林の中で二つとも私は見つけたのであつた。即ち、泉と果物の樹とを……

二八

私の見つけた果樹園には椰子や檳榔樹やパイナップルやバナ、の大木が枝も撓はに半ば熟した果實をつけて地に垂れ下がつてゐるのであつて、その果樹園の中央所に四方を石で疊み上げた人工の泉が湧き出てゐた。苔や木葉に蔽はれてはゐるが、玉のやうな水は濁りもせず掌に掬つ

て飲んで見ると一種の香味と甘味とを備へて大變軟らかな水である。

果樹園と泉とを見つけてからは私は急に心強くなつて生活にも不安が伴はなくなつた。菜食人種の私に執つては、魚肉や獸肉の食はれないといふこともさして苦痛とは思はれない——このやうに私が果樹園を發見したといふことを例の「眼に見えぬ恩人」はどこかで見てゐて知つたと見えて、最早や果物や清水の類を持つて來ることをしなくなつた。その代り或日土人用の弓と矢とを窃り持つて來てくれた。それにもう一つ火打石と火打鎌とを持つて來てくれた。お蔭で私はそれ以來鳥や獸を獲ることが出來て、それらの肉を火で炙つて賞味することが出來るやうになつた。私はその時まあ何んなに一撮みの鹽を欲しく思つたらう！ 鹽を持たないこの私は果物を絞つて其液に浸して僅に肉を食ふのであつた。

私の日々の生活はロビンソン・クルソーそつくりであつた。小屋で備忘録を認める。朝食として食べるものはバナ、三個に無花果に、椰子の果實を四分の一。晝まで私は腰かけたまゝ種々のことを考へる。それから私は獵に行く、腰へ拳銃と彈丸帯をつけて手に土人用の弓を持つて背の中へ矢筒を背負つた姿で林の中へ行くのであつた。私は獵をしながらも例の「眼に見えぬ恩人」を探し出さうと苦心した。そして私はその恩人がどんな所に住んでゐるか、彼の住んでゐる土人部落を發見したいものだと思ひ乍ら林中を縦横に歩くのであつた。半日林中を狩りくらして陽のあるうちに小屋へ歸つて夕飯の仕度にかゝるのであつた。夜は獸油に燈心を浸して乏しい光を

それで取つた。
燈火は点けても心を慰める書物一冊手許には無い！この寂しさは何んと云はう！寂しいと云へば萬事萬端寂しく無いものは一つもない。林を渡る嵐の音、丘で嘯く豹の聲、藪で唸つてゐる狐の聲……

或夜銃眼から覗いて見ると一匹の豹が小屋の扉を一生懸命で掻いてゐる。この邊は木立がまばらなので月光が隙から射して来る。その月光に照らし出された豹の姿の美しさ、軟かな毛並鮮かな斑点、人の兒のやうな優しい手つきでセッセと爪を磨いでゐる。私は暫らく見てゐたが内側から扉を足で蹴ると扉を掻く音をヒタと止めて、少しの間考へてゐたがやがて拔足して小屋を離れて幹を傳つて丘へ下りた。そして林へ這入つて行つた。

林に住んでゐる獸のうち山羊や小猿はよく慣れて毎日小屋の邊へ集まつて来た。そして私から餌を貰つては喜んでそれを食べるのであつた。最初は恐れてゐた小鳥達も次第々々に慣れて来て終ひには銃眼から小屋の内へまで恐れ氣もなく舞ひ込んで来て小鳥らしい可愛い惡戯をして——たとへば糞を落したり椅子のもたれをつゝいたりして——そしてまた同じ銃眼から林の方へ歸るのであつた。或日私は山羊を捉らへて試みに乳を絞つて見た。すると純白の不透明の乳液が、椰子のの實の椀に三杯取れた。それは大變味がよくて極めて立派な飲料であつた。煙草には不自由しなかつた。野生の煙草の木が何處にでもあつて立派な刻煙草になるからである。手製のパイプ

へそれを詰めて惜氣なくそれを吹かす時私は眞に幸福であつた。小憎らしいのは猫々である。遠くの木の下から顔を出して二日でも三日でも見守つてゐる、弓を向けると仰天して周章して葉蔭へ隠れるけれど少し経つと矢つ張り覗いてゐる。嫉妬深い獸の習慣として私と戯れてゐる小猿達を見ると、彼は猛烈に岡焼きして氣味の悪い聲で吠え立て、威嚇さうとするのであつた。
一哩ほど林を行くと蘆の茂つてゐる川がある。そこには幾匹かの鱧がゐて、獲物の来るのを待つてゐる。或日私は友人と一緒に——即ち山羊や小猿を連れてその川の方へ獵に行つた。間もなく川の岸へ出た。その岸を私と友人達とは喧騒きながら歩いて行つた。すると私の目の前にゐた一匹の元氣のよい青年の山羊が、水を飲まうとして川へ下りた。と其瞬間褐色をした一本の材木が首を上げた。カツとその口を開けたかと思ふと山羊の半身は鞠のやうにその口の中へ飛び込んだ。材木と思つたのは鱧であつて鱧はそのまゝ水音を立て、水底深く沈んで了つてどうすることも出来なかつた。また或時のことであるが、矢張り私は友人を連れて沼澤地方を歩いてゐた。藪や薄が生ひ茂つて夫れが身長の倍ほども延びて空に向かつて靡いてゐる。私の友人の猿や山羊は沼澤地方が珍らしいと見えて、私より先に走つて行つて騒がしくお喋舌りを交せてゐる。ところが突然そのお喋舌りが糸を切つたやうに斷ち切れた。

それと一緒に沼の方角で悲しきうな獸の吠え聲がする。そして何物か薄を分けて沼の方へ這つて行くらしい。私は鳥渡躊躇したが次の瞬間には沼を目がけて夢中のやうに走つてゐた。いづれ復きつと鱉のために友達を取られたと思つたからだ。しかし私は十間と走らず思はずギョツと立ち止まつた。あまりの恐ろしさに私の體は一時にゾツと鳥肌立つて頭の髪さへ逆立つた。私の體で役立つものは見開いた二つの眼ばかりで手も足も力を失つて了つた。

一頭の大鹿を横に喰はへた一匹の蟒蛇が蜿蜒と目の前の雜草を二つに分けて沼の方へ駛つてゐるではないか！ 私の友達達の山羊や小猿がお喋舌りを止めた筈である。私さへ一聲も出せなかつた。蟒蛇の姿が沼の中へ全く沈んで了つた時やつと魂を取り返へした。私は初めて悲鳴を上げ沼とは反對の方角へ足を空にして走り出した。すると一度に山羊も猿も私の後から叫び乍ら氣狂のやうに走つて來た。

私のその時の恐怖と云つたら其夜全身發熱して二日といふもの小屋の中から一步も戶外へ出られなかつたといふさういふ事實に徴しても知れる。全くそれは私に執つては産れて初めての恐怖であつた。

しかし間も無く其次に起つた「有り得べからざる奇怪の事件」「人類學上の一大奇蹟」——その怪事件に比較しては殆ど恐怖とは云へないかも知れない。

「人類學上の一大奇蹟」！ それは一體何時起つたのかといふに、鹿を呑む大蛇を眼に見てか

ら十日ほど経つた或日のことで、其日私は小屋に籠つて煙草ばかりボカ／＼吹かしてゐた。小屋の外では山羊や猿や獨唱好きの小鳥などが、私を呼び出さうとするかのやうに賑かに絶間なく喋舌つてゐる。風も無いかして林の中は森然と静まり返つてゐる。

彼等の呼び出しに應じようともせず私は何時迄も室にゐた。

すると俄に彼等の聲が糸を切つたやうに斷ち切れた。糸を切つたやうに絶えた時には何時でも恐ろしい彼等の敵が彼等を襲ふ時である。何物が襲つて來たのだらうと私は耳を傾けた。其時遙林の方から不思議の叫聲が聞えて來た。林に住むやうになつて以來會て一度も聞いたことのない得體の知れない聲である。惡漢に襲はれた若い女が必死の場合に上げるやうな物凄く斷末魔の叫聲に似て夫れより一層悲しきやうな聲だ。私は腰掛から飛び上がった。林に向いてゐる銃眼から聲のする方を眺めて見た。私の見たものは何んであつたらう？ 巨大漢！ 巨大漢！ 否怪物だ！ 漆黒の毛に蔽はれた身丈殆ど八尺もある類人猿がたゞ一匹樹枝を雷光のやうに傳ひ乍ら血走る兩眼に獲物を見捨多黄色い牙を露出しにしてその牙をガチ／＼噛み合はせ乍ら此方に向かつて飛んで來る。彼の著しい特色といふのは長い尻尾を持つてゐることである。その尾は恰度手のやうに自由の運動をするらしい。即ち其尾を枝に巻きつけ全身の重を支へるばかりか時にはその尾を振り廻して行手を遮る雜木を叩くと丈夫の生木さへその一撃で脆くも二つに千切れて飛んで恰鋭い鉞ななどで立ち割つたやうになるのであつた。尾を持つてゐる人類猿！ その有尾人

猿に追ひかけられて悲鳴を上げながら逃げて来るのは土人の若い女であつたり、長髪を背後へ吹きなびかせて恐怖に見開いた大きな眼を小屋の方へ高く向けながら足を空にして走つて来る。赤銅色の逞しい四肢は陽に輝いて白く光り腰の邊に纏つた鳥の羽根は棕櫚の葉のやうに翻へり胸を張つて驅けるその姿は土人とは云へ美しい。追はれるものも追ふものも忽ち林を駆け抜けて丘を巡つた空地へ出た。有尾人猿は樹の枝から巻いてゐた尻尾を放すと一緒に鞆のやうに地上へ飛び下りたが、兩の拳を握つたり開いたり拳の先を時々地につけ牛のやうな肩を前のめりに出して踊るやうにして追つて来る。疲労れを知らない有尾人猿に次第々々に追ひ詰められて土人乙女は恐怖の爲め走る足がだんく鈍くなつた。そして小屋の中にこの私が住んでゐることを知つてゐるかのやうに、兩手を小屋の方へ差し上げて例の悲しうな斷末魔の聲を繰り返へし繰り返し叫ぶのであつた。乙女の叫びに誘はれて私の心は揮ひ立つた。痲痺してゐた手が自由になつた。私は拳銃を取り上げて小屋の扉を蹴開いて繩梯子を傳はつて丘へ下りた。それから少しの躊躇もせず乙女の方へ走つて行つた。斯うして乙女を背後へ圍ひ有尾人猿の猛惡な姿へヒタと銃拳を向けた時私の勇氣は挫けなかつた。

不意に私が現はれたことが尾の有る人間を驚かせたと見えて彼は一瞬間立ち止まつた。しかし其次の瞬間には雷のやうな嘯きを上げながら疾風のやうに飛びかゝつた。彼の兩手が私の體へ將に觸れやうとした時に私の拳銃は鳴り渡つた。しかも續け様に三發まで。

有尾人猿の山のやうな體がもんどり打つて地に倒れると、それ迄隠れてゐた山羊や小鳥や小猿の群が林の中から八釜しく喋舌りながら現れて來た。人猿の周圍を取り巻いて彼等は一齊に廻り出した。丁度凱歌でも奏するやうに廻りながら叫聲を上げるのであつた。

土人乙女は何處にゐるかと思はれ背後を振り返つた。すると乙女は今迄の恐怖が一度に無くなつた爲でもあらうが、兩手をダラリと脇へ垂れて人猿の姿を見守つてゐたが、振り返つた私の顔を見ると南洋土人の熱情を現はし唐突私へ飛びついて逞しい腕で私を抱へて私の胸へ顔を押し當て全身を顫はせて絞めつけた。感謝の抱擁には相違ないが餘りに強い腕の力で無二無三に絞め付けられ思はず悲鳴を上げようとした。乙女はそれに氣がついたと見えて腕の力を弛めたがその代り今度は私の體を隙間無く唇で吸ふのであつた。乙女のやるまゝに體を委かせて私はちつと立つてゐたが夢中で接吻する乙女の顔へ思はず瞳を走らせた。どうして蠻女の顔だなどと輕蔑することが出來ようぞ！ 何んといふ調つた輪廓であらう！ 土人特有の厚い唇もこの乙女だけには惠まれてゐない。歐羅巴人のそのやうに薄く引き締まつてゐるではないか。そして其色の紅いことは！ 珊瑚を砕いて塗りつけたやうだ。高く盛り上がった厚い鼻も情熱的の大きな眼も南洋の土人といふよりも歐洲人に似てゐるのであつた。

彼女の情熱が和んでから手眞似でいろ／＼話して見た。その結果私の知つたことは、眼に見えない私の「恩人」といふのは彼女であつたといふこと、四哩を隔てた森林の中に土人の部落があるといふこと、今その部落は合戦最中で敵の軍中には白人があるるので手剛いなどといふことであつた。

そこで私は彼女に従いて彼女達の部落まで行つて見ようと早くも決心したのであつた。

其日私と土人乙女とは部落を差して出立した。道々私は尙手眞似でいろ／＼のことを聞き出した。私を一番驚かせたのは土人部落に私と同じやうな支那人があるといふことであつた。しかも大勢の人数であつて、その大勢の支那人達は部落の土人に味方して白人達に引率ゐられてゐる侵入軍を向うに廻して戦つてゐるといふことであつた。

兎に角部落へ行つて見たら萬事明瞭りするだらうと歩きにくい道を急ぐのであつた。この美しい土人乙女が縁も由緒もないこの私を、どうして助けたかといふことも手眞似によつて知ることが出来た。彼女は私を一目見ると——即ち海岸のボートの中に命も絶々に氣絶してゐた私の姿を一目見ると、南洋熱帯の乙女らしく憐れな姿の私に對して戀を覺えたといふことである。だから私を助けたので、さうでなければ却つて私の肉を食つたらうといふことである。こんな恐ろしい事件を彼女は卒直の手眞似を以て一向平然として語るのであつた。人の肉を食ふダイヤル族！

いかに彼女が美しくとも土人の血統は争はれない。私はつく／＼斯う思つた。そして恐ろしい蠻女に依つて戀ひ慕はれるといふことがこの上もなく苦痛に思はれた。しかし一方私に執つて彼女は命の親である。燃えてゐる彼女の熱情に向かつて、無下に冷水を注ぐといふことも義理として私には出来なかつた。しかし私には紅玉がある。紅玉！紅玉！あゝ紅玉！紅玉は何處に居るのだらう？ 森林の中に生死も知らず斯うやつて暮らしてゐる間も一度として忘れたことはない！ 息のある限りはどんなことをしても屹度必ず探がし出して見せる！……

それにしても蠻女が私に對する熱情と誠實とを何うしよう！ 彼女はいつでも私の前を用心しいしい歩いて行く。毒蛇や猛獸の襲撃から私を防がうためである。鱈の居りさうな川まで來ると彼女は私を背に負つて素早く水を渡るのであつた。

僅か四哩の道程を殆ど十時間も費して土人の部落へ着いた時には既に眞夜中に近づいてゐた。夜中の満月は空にかゝりその蒼茫とした月光の下に、茅葺の小屋が幾百となく建て連らなつてゐる一劃が即ち土人の部落であつた。侵入軍を相手として合戦中であるからでもあらう部落の中は騒がしかつた。私は木蔭に身を隠しながら部落の様子を窺つた。諸所で焚火をしてゐると見えて薔薇色の火光が天に上り蒼白い煙が立ち上つてゐる。土人達の叫び聲や矢を放す音や小銃の音さへ聞えて來る。

この私の驚いたことは夫れらの雑音に打ち混つて立派な支那語の話聲が明瞭り聞えて來ること

であつた。尙一層私を驚かせたのは北京で聞いた例の詩があざやかに聞えて來ることであつた。
古木天を侵して日已に沈む

巨魁來巨魁來巨魁來

「袁更生一味の海賊共が彼方にゐるに違ひない！」
私は直ぐに斯う思つた。體中の血汐が復讐の念に思はずカツと燃え上がった。

三一

その時土人の部落を越えた遙か向ふの森の中から鬨聲がドツと上がったかと思ふと、其れに答へて部落からも太鼓を打つ音が鳴り響き、凱旋踊りでもするやうに女子供までが廣場へ出て薔薇色の火光を浴び乍ら足を空へ上げて踊り出した。

土人乙女は其時まで私の側に立つてゐたが、部落の光景を眺めるや否や、矢張り足を空へ上げて狂氣のやうに踊り出した。そして私を引つ張りながら部落の方へ走り出した。部落に近づくに従つて、何が廣場で行はれてゐるかそれを明瞭り知ることが出來た。

廣場に一本の杭があつて一人の人間が縛られてゐる。たつた今向ふの森の中で捕虜にされたものと見えて、頬の邊に生々しい切傷の跡がついてゐて其處から生血が流れてゐる。純白の服はズ

タズタに千斷れ肌さへ露骨に現らはれてゐる。蠻人どもはそれを巡つて凱旋踊を踊つてゐるのであつた。私は捕虜の顔を見た。ダンチョン氏の顔であらうとは！ 紛ふ方も無い其捕虜は一緒に沙漠を探検した西班牙の畫家のダンチョン氏だ！ さう感付くと直ぐ私は土人等が敵として戦つてゐる白人に率ゐられた侵入軍とは、ラシイヌ探偵やレザール探偵達の探検隊に相違ないことのやうに忽ちに連想した。

「それでは西班牙の探検隊はすぐ向ふまで來てゐるのか。それにしてもどうしてダンチョン氏は土人の捕虜になんかたんだらう？ 捕虜になつたといふことをラシイヌ探偵達は知らないのだらうか？ 探検隊の人達には私は恩を受けてゐる。殊にラシイヌ探偵には生命をさへ助けられ

てゐる。袁更生達の阿片窟に紅玉を尋ねて迷ひ入つた時、私に迷路を教へたのは他ならぬラシイヌ大探偵だ。ラシイヌ探偵の仲間の一人のダンチョン畫家が、土人のために今や生命を取られようとしてゐる。それを目前に見てゐる以上義理としてども救はなければならぬ。しかし何うして助けよう？ どうしたら救ふことが出来るだらう？」

私は立つたまゝ考へ込んだ。土人乙女はそれを見ると、踊つてゐた手を急ぎ止めて手眞似で私へ話しかけた。

「心配することは何んにもない。あなたは私を有尾人猿から救つてくれた恩人ですから、私達部落の人達はあなたを歓迎するでせう。」

彼女が熱心に話しかける手真似の意味はかうであつた。しかし私は動かない。矢つ張りちつと考へてゐる。すると彼女は復手真似でこのやうに私へ話しかけた。
「あなたが不安に思ふなら私が先に部落へ行つてあなたのことを話させよう。」

それでも私は黙つてゐた。

乙女は小首を傾けて私の顔を見守つたが、急に體を翻へして部落の方へ走つて行つた。私が此處にゐることを部落の人達に告げるためであらう。

彼女の姿が綿の木の花で暫く蔽はれて見えなくなつた時、私は咄嗟に決心して舊來の方へ走り出した。袁更生の一團が土人部落にゐる以上は捕つたが最後私の生命は失はれるに決つてゐる。

それが恐ろしく思はれたからだ。

しかし私の逃げた時は既に機會を失つてゐた。部落の方から追つかけて来る土人達の叫聲が刻一刻背後の方から聞えて来る。私は方角を取り違へてたゞ無茶苦茶に逃げ廻つた。突然行手の藪地の中から支那語の叫聲が聞えて來た。袁更生の一味の者が先廻りをしてゐたに相違ない。背後からは土人が追つかけて來る。彼等の持つてゐる槍の穂先が月光にキラ／＼光つて見え鳥の羽根を飾つた兜の峰が雜木の上から覗いて見える。

私は進退谷まつた。それからの私といふものは無茶といふよりも夢中であつた。腰の拳銃を抜き出して土人軍に向かつて連發した。確かに二三人射殺したらしい。驚いて逃げ出す土人を見捨

て、藪の中へ兎のやうに潜ぐり込んだ。どこをどのやうに歩いたものか、ほのぼのと四邊が明るいのでハツと驚いて前方を見ると、何んといふことだ、眼の前に土人部落の例の廣場が篝に照らされて擴がつてゐる。そして不幸なダンチョン氏は杭に矢つ張り縛られてはゐるが四方には土人の姿もない。

私は義侠心に揮ひ立つた。

「ダンチョン氏を助けるのはこの機會だ！」

そこで私は雜草を分けて廣場の方へ近寄つて行つた。しかし其時私の心を他へ振り向けるものがあつた。……私の横手の遙か向うの木立の蔭から女の聲が、夢にも忘れない戀人の、紅玉に好く似た笑ひ聲がさも楽しさうに聞えて來た。それに續いて獸の鳴聲がこれも楽しさうに聞えて來た。

私は雷にでも打たれたやうに今居る位置に突立つたまゝその笑聲を聞き澄ました。繰り返へし繰り返へし女の聲と獸の聲とは聞えて來る。どうやら女は獸を相手に戯れてゐるらしい。

私は四方へ注意を向け踊る心臓をしつかり抑へて聲のする方へ忍び寄つた。

三三二

明るい満月に照らされて、土人の小屋の裏庭の様子が手に取るやうに眺められた。霜の降つた

やうに白く見える庭の地面に銀毛を冠つた巨大な猩々が空に向かつて河瀬のやうに飛んでゐる。その猩々をあやすやうに、両手を軽く打ち合はせてゐるのは白衣を纏つた少女である。振り仰ぐ顔に月光が射して輪廓があざやかに浮び出た。まがふ方なき紅玉である！
前後の事情をも打ち忘れて私は前へ走り出た。
「紅玉！」
と私は絶叫して彼女を両手で抱かうとした。すると猩々が走つて来て二人の仲を遮つた。鈴のやうな眼で私を睨み紅玉を背後へ庇はふとする。

「どなた！」

と紅玉は、聞くも慕しい昔通りの聲で訊いた。

「どなたつて俺に訊くのかい。張教仁だ！ 張教仁だ！」

しかし紅玉は感動もせず、私の顔を見守つたが、

「張教仁さんて！ どなたでせうね？ ……さうさうやつと思ひ出しました。さういふお方がありましたわ、ずつとく昔にね……羅布の沙漠で逢ひましたつけ、芍薬の花の咲く頃まであなたと一緒に居りましたわ……そして桐の花の咲く頃にあなたの所から逃げましたわ。けれどたうとう發見つて好きな好きな阿片窟からあなたの所へ連れ歸へられてどんなに悲しく思つたでせう……それから又も逃げました。さうよ、あなたの所からよ……私には戀人がありますのよ。可愛い

可愛い戀人がね！ さあ銀毛や飛んでごらん！ 私の戀人はお前なのよ！ さあ銀毛や飛んでごらん！」

すると彼女の命ずるまゝに魔性の獸の猩々は空に向かつて幾回となくヒラリ／＼と飛ぶのであつた。

空には満月、地には怪獸、女神のやうな戀人が白衣を纏つて立つてゐる……所は蕃地で人食人種のダイヤル族の部落である……

……私はグラ／＼と目が眩んだ。發狂するんぢやあるまいか！ 一方でこんなことを思ひ乍ら片手で拳銃を握りしめ銃口を猩々に差し向けた……

……それから私は何をしたら判然り自分でも覚えてゐない。兎に角私はダンチヨンと一緒に土人に追はれながら逃げてゐた。ダンチヨンの繩を誰か解いたのか（勿論私には相違ないが）どうして解くことが出来たのか、それさへ判然とは覚えてゐない——私の覚えてゐることは拳銃を打つたことである。一體誰に打つたのか？ 猩々に向かつて射つたらしい？ 何のために猩々を射つたのか？ 紅玉を誰かす悪獸であるところのやうに思つたからである。何故そのやうに思つたのかどうして説明出来ようぞ！ たゞ直感で思つただけだ！ 私の射つた拳銃の弾は不幸にも悪獸には當らなかつた。たゞ驚かせたばかりである。驚いた悪獸は一躍すると紅玉の體を引つ抱へた

そしてスル／＼と立木に上ぼつた。大事さうに紅玉を抱いたまゝヒラリと他の木へ飛び移つた。かうして次々に梢を渡つて林の中へ隠れ去つた。それつきり彼等とは逢はないのである……。

私とダンチヨンは物を云はず土人の聲の聞えない方へ力の續く限り走つて行つた。そして全く力が盡きて二人一緒に倒れた時には夜が白々と明けてゐた。猛獸の害も毒蛇の害も疲勞れた私達には怖くもない。そこでグツスリ寝込んだのである。

其日の晝頃やうやくのことで私は小屋を探がし當てた。しばらくは二人とも無言である。木椅子へグツタリ腰かけたまゝダンチヨンも私も黙つてゐる。幾時黙つてゐただらう？ それでもやつとダンチヨンは懶い聲で話し出した。

私はダンチヨンの話によつて探検隊の一行が土人部落から一哩離れた護謨林の中に戦闘のため岩を造つて立て籠もつてゐて、今日かもしくは明朝あたり焼打の計で土人部落の總攻撃をやる筈だと、左様いふ事を知ることが出来た。それにもう一つその探検隊の目的といふのを知ることが出来た。話によれば此小屋から西南の方角へ十哩行けば其處に険しい山があつて山の麓には湖がある。その湖の底にこそ私達が長らく探がしてゐた彼の羅布人の一大寶庫が隠されてあるといふことであつた。

「これは最近の發見だが、博言博士のマハラヤナ老がダイヤル土人の捕虜の口から斯う云ふことを聞いたさうだ——それは湖底のその寶庫を有尾人といふ原始人が守つてゐるといふ事だがね。

それが犖猛の人種でね、さすが兇暴のダイヤル族も有尾人にだけは恐れてゐて接近することを忌むさうだ。」

「有尾人なら僕は見たよ。」
 私は先日の出来事を搔撮んで彼に物語つた。それから私は彼に訊いた。
 「全體どうして土人になんか君は捕虜になつたんです？」

「それがね。」とダンチヨンは苦笑して、「ラシイヌさんやレザール君が（描かざる畫家ダンチヨン）だなんて僕に綽名をつけるので、一つこの島の風景でも描いて名譽恢復をしようと思つて、夫れで昨日もカンヴァスを持つて林をブラ／＼歩いてゐるうちに土人の部落へ出て了つたのさ。」
 ダンチヨンは暢氣さうに笑ふのであつた。

その日の夕方、林の彼方に噴煙が高く上がるのを見た。焼打に遇つた土人部落が火事を起してゐるのでもあらう。夜に入ると焰の舌が、空にヒラ／＼現はれた。

林の鳥獸は火光に恐れて小屋の根元へ集まつて来た。猪は鼻面で土を掘つて其中へ自分を隠さうとする。栗鼠は木の幹を上り下りしてキイ／＼聲で鳴きしきる。山鳩は空を輪のやうに舞つて一齊に下へ落して來てもすぐ復空へ翔け上がる。豹は岩陰で唸つてゐるし水牛は萱の中で顛へてゐる。

火光は益々擴がつた。部落を悉く焼きつくして何うやら林へ移つたらしい。
南洋原始林の大山火事！
鹿や兎や馴鹿は自慢の速足を利用して林から林へ逃げて行く。小鳥の群は大群を作つて空の大
海を帆走つて行く。斑馬の大部隊は鬚を揮つて沼の方角へ駈けて行く。
火足は次第に近着いて来る。煙は小屋を引き包んだ。
私は拳銃をひつ掴み、土人乙女が置いて行つた弓矢をダンチョンに手渡すや否や二人は小屋か
ら飛び下りて、走る獸の中に混つて風下の方へ逃げ出した。

三三三

恐怖に充ちた人間の叫びが背後の方から聞えて来た。振り返へる間もなく、私達の横を飛鳥の
やうに駈け抜けて行くのはダイヤル部落の土人達で武器さへ手には持つてゐない。勿論私達を認
めても襲つて来ようとしなかつた。火足から遁がれよう遁がれようと夫ればかり焦せつてゐる
やうだ。
火足は間近に迫つて来た。恰度紅でも流したやうに深林の中は眞紅である。熱に蒸されて私の
背中は瀧のやうに汗が流れてゐる。この大危険の最中にも私はこんなことを考へた。
「土人と一緒に逃げてはならん。土人の行く方へ行つてはならん。彼等蠻人の常として何時心が

變はるかもしれん。幸ひに深林を出外れて假へ草原へ出たところで、其處で土人に襲はれたら矢
つ張り命を失つて了ふ。土人の逃げて行く反對の方へどうしても俺達は逃げなければならん。
私はダンチョンへ呼びかけた。
「西南の方へ！ 西南の方へ！」
するとダンチョンが叫び返へした。
「其方へはもう火が廻つてゐる！」
「黙つて従いて来い！ 黙つて従いて来い！」
さう云つて西南へ方向を變へて狂人のやうに走り出した。ダンチョンも後からついて来る。
見渡せば成程西南一帯一面に焰の海である。しかし焰の海の中に恰も一筋の水脈のやうに暗黒
の筋が引かれてある。どうやう一筋の谿らしい。そこ迄行くには私達は迂廻をしなければなら
なかつた。大迂廻をするもよいけれど、向ふの谿まで行きつかない前に火事に追ひつかれはしな
いだらうか？
と云つて、他には方法が無い。
運に任かせて私達はその大迂廻をやり出した。天の佑けとでも云ふのならう、私達が谿まで行
きついた時火事もやつぱり行きついた。
谿には河が流れてゐた。何より先に私達は河へ體を浸したのであつた。

斯うして岸に沿ひながら静かに下流へ泳いで行つたが、行手は晝のやうに明るくてお互の顔の睫毛まで見えた。幾時私達は流れ泳いだらう。可成り急流の河の水が全く水勢を無くなした時私達は河から這ひ上がつて四邊を急いで見廻した。火事の光は射してはゐるが、火事場からは既に遠退いてゐる。薔薇色の火光に暈かされて人間界ならぬ神祕幽幻の氣が八方岩石に圍繞された湖の面に漂つてゐるやうだ。目前に鏡のやうに湖が擴がつてゐるのではないか！

「湖！」

と私は呟いた。その聲は恐ろしく顫へてゐた。

するとダンチヨンも云ふのであつた。

「湖！ 違ひない、あの湖だらう！」

到頭私達は來たのであつた。寶庫を秘してゐる湖へ！

三四

蕃界の夜は明け始めた。私とそしてダンチヨンとは黙つて湖畔に立つてゐた。曉の寒さが身を襲ふので私達はブル／＼身顫ひをした。空は次第に色着いて來た。鼠色、薄黄色、薔薇色……と湖水を圍繞いてゐる原始林は夢から醒めて騒ぎ出した。葉は葉と囁き枝は枝と揺れ幹と幹とは擦れ合つて化鳥のやうな聲を上げる。風が征矢のやうに吹き過ぎる。雲のやうに塊まつた鳥の群

が薔薇色の空を右に左に競争するやうに翔け廻はる。湖水もだん／＼色着いて來た。鉛色、鱗色、淡黄色、そして次第に桃色になり原始林に太陽が昇ぼつた時には深紅の色に輝いた。

高原に圍まれ林に蔽はれ湖水を湛へた此別天地は、斯うして夜が明け太陽が出て全く晝となつたのであつた。恐ろしい昨夜の大山火事は何方の方向へ燃えて行つたものか、そんな恐ろしい山火事などは全然どこにもなかつたやうに此別天地は静かであつた。

しかし私にはこの別天地があまり静かであるが爲めに却つて物凄く思はれて來た。豹の鳴聲でも聞えるといふ、猪が林からでも出て來るといふ、さうしたら若干南洋のボルネオの島に居るのだといふ境地に對する安心の念が自然に心に起るだらうに。あまりに四邊が静かであるため却つて恐怖心が起るのであつた。

私と同じ恐怖の念がダンチヨンの心にも起つてゐると見えて、疑惑に充ちた眼付をして彼はあたりを見廻はしてゐるが、突然私の脇を突いて噎れた聲で囁いた。

「見給へあれを！ あの顔を！」

何故か私は「顔」といふ言葉が此時ゾツと身に沁みだした。それで私は眼を躍らせ彼の指差す方向へ周章して視線を走らせた。

顔！ 顔！ 人間の顔！ しかも一つや二つでは無い。殆ど幾十といふ人間の顔が藪地の木間

から私達の方を瞬きもせずに見詰めてゐる。それは確かに人間の顔だ。人間の顔には相違ないが、

それが人間の顔だとすると何んといふ奇怪な顔だらう！ 普通の人間の顔から見ると殆ど二倍の大きさはある。そして其顔の五分の三はセピア色の毛で蔽はれてゐて、巨大な鐵槌で打たれたかのやうに低く額は落ち窪み無智の相貌を現はしてゐる。それに反して唇は感覺的に膨れ上がり鼻より先に突き出てゐる。鼻翼ばかりが擴がつて全然鼻梁の無い畸形の鼻は眼と口の間に延び縮みして護謨細工の玩具でも見るやうである。

私は餘りの恐ろしさに思はずダンチョンへ縋らうとした。

「妖怪だ妖怪だ！ いや蕃人だ！」

私は思はず呻いたが、妖怪だと思つたその蕃人の、一番前にゐた一匹が藪地からヒラリと飛び

上がつて喬木の幹へ抱き付きスル／＼と梢へ昇るのを見て、それが妖怪でも蕃人でもなく思ひも依らない類人猿の有尾人種であることを知つた。

「ピセカントロップスだ！ 有尾人種だ！」

私は復も斯う呻いて、俄に失望した眼を見張つて、何處かに救ひ主はあるまいかと前後左右を見廻はした。すると同じ恐怖の爲めに氣絶しかゝつてゐるダンチョンは、私の手を堅く握りながら怯えた聲で叫び出した。

「百匹！ 五百匹！ 一千匹！ 狒々めが四方から押し寄せて来る！」
成程、さう云へば私達を圍んで、木間や藪の蔭や丘の上から黒雲のやうに叢がつて、蛇のやう

な尻尾を頭の上へピンと押し立てた人猿どもが、私達へギリギリと迫つて来た。

緑の森林、澄み切つた湖水、繪のやうに美しい此世界は、一度人猿の出現に依つて恐怖の地獄と變つたのであつた。しかし私はどんな事をしても恐ろしい人猿の爪と牙から遁れなければならぬと決心した。とは云へ何うして遁がれたものか？ 彼等の群へ飛び込んで行つて人猿どもと格闘して彼等の群から脱しようか？ しかし體量五十貫もある森林の原人と闘つて打ち勝つ希望があるだらうか？ そんな希望は絶対に無い！ それでは湖水へ飛び込んで泳いで對岸へ逃げようか？ しかし對岸へ行き着いた所で、その對岸の森林には矢張り人猿が住んでゐるだらう！
それでは何うして遁がれよう？ どうしたら逃げる事が出来るだらう？

一瞬の時間も無駄にせず私は此處まで考へて来た。そして到頭行き詰まつた。その間も兇暴の有尾人種は蕃人特有の狡猾さを以て一步一步私達に近寄つて来た。斯うして彼の間隔が十間餘になつた時、彼等は一齊に立ち上がった。何んといふ立派な體格であらう！ もしも彼等に尾がなかつたなら、そして全身に毛が無かつたなら勇ましい立派な武人であらう……彼等は私達を取り巻いて忽然と踊を踊り出した。私達二人を中心にして最初グル／＼と左へ廻はり夫れから今度は右へ廻はり、又もグル／＼と左へ廻はり夫れから又も右へ廻はる、恰も大水が渦巻くやうに何時までも何時迄も廻はるのであつた。

「こいつが彼奴等の策戦だな！」
 斯う思つた時には最う私達は彼等の渦に巻き込まれて催眠状態に墜ちてゐた。
 ……緑……大空……人猿の顔……そして彼等の叫聲……湖水……日光……毛だらけの手……澤山の澤山の毛だらけの手が私達を地上から持ち上げた。そして緑の林を縫つて何處かへ私達を運んで行く……緑がだんく深くなる。日光が次第に薄くなる……忽然、一人の老人が私達の前に現はれた。何んといふ智識的の顔だらう。何んといふ立派な白髪だらう。人猿達の先に立つて其老人は走つて行く。人猿を指揮してゐるのだらう。神か？ 豫言者か？ 救世主か？ 神よ我等を助け給へ！……林の中は闇になつた。再び日光が射して來た。緑の壁が揺れ動く。どこへ運ばれて行くのだらう？……

それは昔のことであつた。今からざつと三十年も遡らなければならなかつた。その頃一人の青年がボルネオの島を歩いてゐた。それは英國の動物學者で兼ねて考古學にも通じてゐた、青年の名はデヨンソンと云つて流石英人であるだけに冒険心に富んでゐた。彼は考古學と動物學との此兩様の學説を深く研究した結果に依つて、どうしても南洋のボルネオかイラン高原の大森林中

に巨大な尾を持つた人間が棲息してゐるに違ひないといふ一つの確信を持つやうになつた。で彼は自分の學説が果して確證を得るや否やを實驗しようといふ決心した。そこで數人の同志を募り最初はペルシヤの方面からイラン高原を探検した。しかし其處では夫れらしい有尾人種にも逢はなかつた。數人の同志は失望して其儘英國へ歸つて了つたが、デヨンソンだけは決心を變へずに單身ボルネオへ渡つたのであつた。
 彼は蕃人の襲撃や猛獸毒蛇の難を避けて長い日數を費した揚句、漸く奥地までやつて來たが有尾人種の影も見えない。自信の強いデヨンソンも最う斯うなつては自分の説を押し通すことは出來なくなつた。有尾人種などいふものは淺臺な自分の妄想であつて、世界のどこを探がし廻はつたところで其處ものは實際には存在しないと斯う諦めざるを得なかつた。
 彼はすつかり失望して何うしてよいか解からなくなつた。猛獸の難を避けるため高い護謨の樹の頂へ小屋を造つて其中で彼は幾日も考へたが、どうもこのまゝ此處を見棄て、立ち去ることが残念に思はれ、矢張りこのまゝ此地にとどまり、有尾人種は居ないにしても他に珍らしい動物どもが澤山群れ住んでゐるに依つて、せめてそれらを研究しようといふ決心した。で彼は眞先に自分の住む小屋の修繕に着手した。それから食物と飲料水とを小屋の近くに發見してそれに改良を加へたりした。體を保護する武器としては拳銃一挺に彈藥若干とそして一振の洋刀だけで他には何にも持つてゐない——虎の啼聲、豹の呻き、月影蒼い夜な夜な群れて襲つて來る狼な

どの物凄しい吠聲に怯かされながら、斯うして蕃界奥地の生活がデヨンソンの上に始まつたのであつた。

一年二年——三年五年——五年の月日が経過した。森林に住んでゐる鳥や獸の殆ど總てと親しくなり殆ど總てを研究した。彼に執つては虎も豹も恐ろしいものでは無くなつた。性來壯健の肉體が蕃地の氣候に鍛練され猛獸と格闘することによつて一層益々壯健になり猿族と競走する事に依つて彼は恐ろしく敏捷となつた。さうして彼はもう此時には有尾人種の存在に就いては全く前説を否定して考へさへもしなかつたが、彼、即ち、デヨンソン自身が恰度人猿そのものゝやうに完全の野人になり切つてゐた。森林を走るに、枝から枝幹から幹を傳はつて風のやうに速く走ることも出來た。高い梢の頂上から藪地の土へ飛び下りても少しも怪我をしないほど軽く其身を扱ひもした。

何んといふ愉快な生活だらう。何んといふ原始的の生活だらう。これが即ち我等の祖先——人猿そのものゝ生活なのだ！ 自然の食物、自然の飲料、自然の遊戯、自然の睡眠、此處には何等の虚榮もない。そして何等の褥禮もない。過去に於て自分が生きてゐたあの歐羅巴の社會生活も是れに比べたら獄屋のやうなものだ。自分は心から謳歌する。この森林の生活を……
デヨンソンは實際斯う思つて此蕃界の生活を恐れるどころか愛してゐた。そして再び歐羅巴などの虚飾に充ちた社會生活へは歸つて行くまいと決心した。

彼は鳥獸を愛しみ鰐魚をさへも手慣れた。彼には鳥獸の啼聲や或は其眼の働きや若くは肢體の廻らし方に依つて其感情を知ることが出來た。そして彼等が何を要求し何を嫌ふかを察すること出來た。で彼は彼等の要求する事を飽きもせず彼等にしてやつた。その代り彼等も彼の爲めにいろ／＼の用事を足してやつた。

三六

或る天氣のよい日であつたが、彼は其時小屋を出て小丘の上に坐つてゐた。

突然前方の森林の中から鳥獸の悲鳴が聞えたが、それと一緒に藪地を分けて虎が一匹走り出した。その虎の跡を追つかけて同じ藪地から出て來たのは——思ひも依らない有尾人猿で、それと知つた彼の驚きは形容することも出來なかつた。彼は矢庭に飛び上がり、其人猿に向かつて行つた。鋭い咆哮！ 烈しい叱咤！……さしもの人猿もデヨンソンの爲めに胸を蹴られて轉がつた。斯ういふ出來事があつてから數日経過した或日のこと、何時も小屋にゐたデヨンソンの姿が何處へ行つたものか見えなくなつた。そしてデヨンソンと慣れ親しんでゐた無數の鳥獸を悲しませ

た。
既に此時は、デヨンソンは、生捕つた人猿を案内にして原始林と湖水とで飾られた太古の儘なる神仙境へ足を踏み入れた時であつた。

幾年か〜時が経つた。
巴里や倫敦では幾萬の人が此世から死に又産れた。……
勿論、蕃地の南洋でも、鳳梨の實が幾度か熟し無花果の花が幾度か散つた。そして老年の麝香
猫や怪我をした鱈が死んだりした。

幾度か年は過ぎ去つた。青年も老人になる頃である。金髪も白髪となる頃である。若い英國の
動物學者がボルネオの奥地へ小屋を造つて、鳥や獸を相手にして自由の生活をしてゐた時から既
に三十年も経つてゐた。それでも矢つ張り護謨の樹の上には木で造つた小屋が立つてゐた。

……この頃、湖水と原始林とで美しく飾られた神仙境——即ち人猿の住居地には、有尾人以外
に老人が——紛れもない歐羅巴の人間が恰も人猿の王かのやうに彼等の群に奉仕されて、いとも
平和に住んでゐた。

岩窟の内は暗かつた。獸油で造つた蠟燭が一本幽に灯もつてゐて私達二人と老人とをほのかに
照らしてゐるばかりで、戶外から射し込む陽光は此處までは届いて來なかつた。

私とそしてダンチヨンは有尾人猿の王だといふ不思議な老人の捕虜となつて岩窟の中へ連れ
て來られ、老人の傳奇的の經歷を老人の口から聞かされて何んなに不思議に思つたらう。しかし
私達は疲勞れてゐた。それで老人の話の間にいつか昏々と眠つたらしい。

やがて漸く目覺めた時には翌日の眞晝になつてゐた。私達は老人の許しを得て岩窟の外へ出る

事にした。

日光の洪水！ 青葉の輝！ そして紺青の湖の底の知れない深い色！ それらの色彩に眩
惑されて私達は暫く佇んだ。藪地の中から聞えるものは人猿達の聲である。それさへ今日は穩し
い人間の聲のやうに思はれる。

私達二人は湖岸へ行つて其處でまたもやイんだ。

「神祕の湖水！ 神祕の湖水！」

私は思はず斯う呟いてダンチヨンの顔を見返つた。「さうだ。」とダンチヨンも呟いて私の顔を見
返した。

「私達二人が眞先に神祕の湖水を見付けたのだ。だから今度は眞先に湖底を探ぐる權利がある……
……羅布人の寶庫、巨億の寶が底に隠されてある筈だ。」

ダンチヨンの聲は感激のために弓の絃のやうに戦慄した。私はそれを手で制して無言で湖水を
見守つてゐた。其時、眼前の湖水の水が左右に山のやうに盛り上がり見る／＼崩れた其中から丘
のやうなものが現はれた。と見て取つた一瞬間、水中の丘から十間も離れた水藻の浮いてゐる水
面から水沫を颯と上げ乍ら空中にヒラ／＼と閃めいたのは、蟒蛇に似た顔である。

「雷龍！」と私の口から驚嘆の聲が飛び出した。

其時ダンチヨンは遙か向ふの森林を指で差しながら、

「大きな蜥蜴が飛んでゐる！」
 と恐怖に充ちた聲で云つた。
 全く彼の云ふ通り、二十尺もある大蜥蜴が肩に付いた翼を羽搏き乍ら木から木へ龍のやうに飛んでゐる。そして其側の藪を分けて、豹と象とを合はせたやうな八九間もある動物が二本の角を振り立て振り立て野性の鼠を追つかけてゐる。それは確に恐龍である。雷龍といひ又恐龍と云ひいづれも今から十數萬年前、地球に住んでゐた動物で、それは人猿と同じやうに數十萬年前のその昔に悉く滅びた筈である。それなのに人猿と相伴なつてボルネオの奥地に棲息し二十世紀の今日まで生存へてゐるようとは正に世界の驚異である。
 私とダンチヨンは此驚異にすつかり魂を怯かされて湖水の岸から逃げ出した。
 そして岩窟へ歸つたのである。

三七

猛悪の人猿の社會にも幾個かの不文律が行はれてゐた。自分の所有でない雌性に對しては決して亂暴をしない事。人猿以外の敵に對しては一同團結して對うこと、食物は一時に貪らずに一ヶ所に集めて貯へる事……これらが主なるものであつた。この不文律の執行者が彼等の王たる老人で、老人の課する刑罰をば人猿どもは怯ぢ怖れた。

人猿達の生活は極端に自由で快活であつた。彼等は木の上で生活し又木の上で睡眠を取りそして木を渡つて遊戯した。彼等の日常の食物は木實、草の根、鳥獸などで、彼等は勤勉によく働いて澤山の食物を漁るのであつた。湖水を中心に原始林は十里四方に擴がつてゐたが十里四方の大森林こそ人猿達の王國であつた。彼等は廣大の此森林で數十萬年の昔から數十萬年後の今日まで、子を産み、育て、繁殖し、ダーキニズムより超越して、原始的生活の範疇内で其生活を存續し、今日に迄至つたのであつた。それにしても何うして長く逞しい尻尾を持つて居るのだらう？それは格別不思議でもない。恐らく彼等はあの尻尾を數十萬年の昔から數十萬年後の今日まで、盛んに使用して來たのだらう。その爲め尻尾があのやうに立派に發達したのであらう。利用即發達の大眞理が、此處で用立つた譯である。

或日、私とダンチヨンは森林の中を彷徨つてゐた。私達の跡を追ひ乍ら澤山の人猿が木を渡つていつ迄もいつ迄も従いて來た。森林の案内に通じてゐない私達を警戒するのでもあらう時々私達の先へ立つて、方角を指で差したりした。行くに従つて森林は益々厚く繁茂して陽光さへ通らない。私達の足音に驚いて狐や兎が逃げ出したり、臭猫が茨を潜り乍ら狐猿の隠れた同じ穴へ周章てふために飛び込んだり、群れて遊んでゐた手長猿が一度にギャツと叫び乍ら枝から枝へ遁がれたりした。

不意に私達の面前へ大狸々が姿を現はした時には恐怖のために足を止めた。しかし危険は些少

も無い人猿が私達を守つてゐる……果して私達の頭上からヒラ／＼と恰度蝙蝠のやうに人猿達が下りて来た。そして悲壯な格闘が大狸々との間に行はれたが、ものゝ十分も経たないうちにゴリラは三つに引き千切られた。

森林が開けて陽が射してゐる大きな沼へ来た時に復も私達は前世紀の怪獣の一つに遭つた。十間もあるらしい長身の背一面に角の生えた尾と頸の長い動物で、其尾と後脚とを利用して立つたまゝヨチ／＼歩いてゐる。私達の姿を見付けるや否や一躍して水中へ飛び込んだが其儘姿は見えなくなつた。私達二人は沼の岸を静かに歩いて進んで行つた。キキ！キキと木の梢で悲しげな聲で鳴くものがあるのので何気なく仰いで梢を見た。眼玉の飛び出た鱈の長い八尺あまりの鯨のやうな魚が鱈で木の幹を攀ちながら悲しげに鳴いてゐるのであつた。

私達は尙も彷徨つて行つた。鰐の住む濁つた河を涉り鴨嘴の群れてゐる湿地を越えて足に任せて彷徨つた。

復も森林が途絶えして、前方遙に砂丘が見え、熱帯の太陽が赭々と光の洪水を漲らせてゐる何んとなく神々しい別天地が私達の前へ展開した。

光の洪水に洗禮された其の前方の砂丘の上には一個の祠が安置されてあつて恰もそれを守るかのやうに石で刻まれた狛犬が、肩に焰を纏ひながら祠の前に坐つてゐる——その光景を眺めた時、私は卒然と羅布の沙漠の緑地で見た同じ祠を井の中に描き出した。

眼

「おゝ何んと同一ではあるまいか……！……ロブの沙漠のあの祠とボルネオの奥地のこの祠とは！」
私は感激に胸を顫はせ釘付けのやうに突つ立つたまゝちつと祠を眺めてゐた。すると私のこの感激を一層高潮に誘ふやうな不思議な事件が突發した。それは、今まで梢の上で私達を守つてゐた人猿達が、祠の姿を見るや否やバラ／＼と梢から飛び下りて人間の様に跪いて祠を遙拜することであつた。

あゝ其熱心さと敬虔さとは何んに例たらよいだらう？ 古代、佛教の信者達が佛陀の尊像を堅く信じて祈願を籠めた熱心さと敬虔さとに例へやうか。それにしても何うして人猿達が遙拜の仕方などを知つてゐるのであらう？ 誰か彼等に教へたのか。それとも、自然に覺えたのか。そして一體あの祠には何が祭つてあるのだらう？ 彼等の神か？ 寶物か？ そして大きなあの丘はたゞ砂の堆積つたものだらうか？ それとも何かゞあの丘の中に隠されてあるのではあるまいか？

「神祕！ 神祕！ 要するに神祕！ 湖水と同じくたゞ神祕！」
私は心で呟いて四邊の様子を見廻はした。すると私はこの邊一體——勿論砂丘も引つ包めて土地の低いのに氣が付いた。

人猿と老人とに養はれた私達は十日を経過した。或朝、人猿の騒ぐ聲が物々しく岩窟まで響いて来た。そして意外にも大砲の音が湖水の向ふから聞えて来た。私達はハツと飛び起きた。

そして岩窟から走り出た。私達は何を見つけたらう？……

朝陽に輝く湖水を越え、原始林の縁を背中にして遙か向ふの湖水の岸に五六十人の人間が、大砲の筒口を此方へ向けて群像のやうに立つてゐる。

「ラシイヌ探偵の一行だ！」

ダンチヨンが嬉しさうに斯う叫んだ。

「しかし。」

と私は躊躇した。

「袁更生かもわからない。」

二人は熱心に眺めやつた。

危険に對して敏感な、人猿どもは大砲の音に、すっかり度膽を抜かれたと見えて森林の奥へ逃げ込んで一匹も姿を見せなかつた。私とダンチヨンとは佇んだまゝなほ熱心に眺めやつた。距離

が距たつてゐるために袁更生の一味ともラシイヌ探偵達の一隊とも見分ることが出来なかつた。しかし間もなく其一群がもう一度空砲を打ち放し此方の様子を窺つてから、危険が無いと思つ

たものか徐々に此方へ近寄つて来たので、その一群が何者であるかを私達は漸と知ることが出来た。

——彼等は私達の味方であつた……

情熱的の挨拶が双方の間に取交はされ不思議の奇遇が言祝がれた。それから双方争ふやうにして今日までの経験を物語つた。彼等の話す話に依つてあの恐ろしい山火事がどうして起つたか知ることが出来た。蠻人の爲めに捕虜になつたダンチヨンの命を助けようため彼等が放した砲彈が蠻人の部落に命中して萱葺小屋を焼いたのがその原因だといふことである。そして彼等はあの素晴らしい焦熱地獄の火の中で土人と戦つたといふことであつた。そして到頭土人どもを全く屈服させた揚句、袁更生の一團をボルネオ島の北の端れへ息も吐かせず追ひかけて行つて、そこで鏖殺にしたさうである。しかし残念にも袁更生だけは取り逃がしたといふことであつた。

この惨酷な屠殺戦では、可成り味方も傷いたので重い負傷者の若干を土人の部落に預けて置いて、負傷かない壯健の者ばかりが此處まで来たといふことであつた。

「君の方で僕等を裏切つても、どんなに僕等から逃げ廻はつても、僕等の方では君のことを些少も悪くは思つてゐない。さうぢや無いかね張教仁君……」

いつも寛大なラシイヌ探偵が、斯う云つて快活に笑ひ乍ら、力強く私の手を握つた。その時は實際私の顔は恥かしさの爲めに赧くなつた。

「そればかりでなく……」と大探偵は私の顔をつくつく見て、「僕等の友人ダンチョン君を蠻人の毒手から救つて呉れた君の義侠心に對しては心からお禮を申し上げる。」

斯う云つて彼は叮嚀に頭を私に下げさへした。私達二人は湖水の岸の倒木の上に腰かけて互に話し合つてゐるのであつた。ダンチョンはレザーやマハラヤナ博士に人猿と老人とを紹介しようとして、皆んなを引き連れて森林の中へ先刻這入つて行つたまゝいまだに歸つて來ないらしい。

それで四邊は静かである。

湖水は平らに輝いてゐる。

恐龍も雷龍もトラコドンも大砲の音に驚いたと見えて水から姿を出さうともしない。樹々の倒影、雲の往來、みんな水中に映つてゐる。

風が窈かに渡つたと見えて水面に漣がもつれ合つた。

しかし再び静かになり湖水は黄金色に輝いてゐる。神祕！ 神祕！ 正に神祕！ この平和らしい湖水の底にこの平凡な湖の中に、羅布人の寶が、巨億の富が、果して埋もれて居るとしたら何んといふ夫れは神祕であらう！ 神祕！ 神祕！ 正に神祕！ しかも價値のある此神祕を

今や我等は開らかうとして湖水の畔に集まつてゐる。

神祕が神祕であつたなら、我々は財産家になれるだらう。さうだ素晴らしい財産家に！
私は湖水を眺め乍らこんな空想に更けつてゐた。
すると、ラシイヌ探偵が、何か口の中で唄ひ出した。

山と湖とに守られて

我等の祖先が住んでゐる

潮と山とに圍まれて

祖先の寶が祕藏されてある。

突然ラシイヌは立ち上がった。そして嚴かに斯う云つた。

「湖水へ船を浮かべよう！ 皮で作つた船がある！ そして湖水の底を見よう！ 湖水の祕密の

第一歩を兎に角探ぐつて見ようではないか！」

三九

探検隊の一行は私を蕃地へ残したまゝ元來の方へ引き返した。探検隊の人達は——わけでもラシイヌ探偵は自分達と一緒に來るやうにと熱心に私に進めたけれど私は同意しなかつた。どうして同意しなかつたかといふに、それには私だけの理由があつた。

一行がいよいよ湖畔を去つて深い原始林へ這入つて行くや、今まで姿を見せなかつた有尾人どもは木や草の中から醜惡の顔を覗かせて賑かに喋舌をやり出した。そして人猿と殆ど一緒に何處へか姿を隠して了つた動物學者の老人も何時の間にか岩窟に歸つてゐた。私は今迄はダンチョンと一緒に蠻地に停まつてゐたのであつたが、其ダンチョンも一行と一緒に原始林の中へ消えて行つて私は文字通り一人ぼつちになつた。だから私の友達と云へば豫言者のやうな老人と尾を持つてゐる原始人と湖底の怪物トラコドンなどで、友達と云へば友達ではあるが、いづれも縁遠い者共であつた。

私は矢張り以前の通りに老人と一緒に老人の岩窟で朝夕を送つてゐるのであつたが、今度の事件が起つて以來は、其老人も以前のやうには私に好意を示さなくなつた。それで私は自分の住家を岩窟の外へ求めようとした。老人は長い間考へてから漸く私の希望を容れて小屋を造ること許してくれた。老人の命令に従つて有尾人達は私の小屋を湖水の見える林の中の高い木の上へ造つてくれた。人猿達は腕力に任かせて巨大の生木をピシ／＼折つたり鐵より強い藤の蔓を糸でも切るやうに引千切つたりして、ものゝ半日と經たない中に私の小屋は出來上つた。何より私の喜んだことは老人にも人猿にも妨げられずにたつた一人で小屋の中で熟考することが出来ることだ、私は終日其處に坐はつて是非とも是から行つて見ようと思ふ計畫に就いて考へた。この計畫が有つたればこそ、ラシイヌ探偵の進めにも應ぜず一人落地に殘つたのである。

併し私の計畫に就いて此備忘録へ記すより先に、何故探險隊の一行が此土地を見捨てて立去つたかを書き記す方が順序らしい。

探險隊の一行が私達の面前へ現はれた日のその翌日のことであつたが、ラシイヌ探偵の指揮の下に革船を一隻湖水に浮かべて湖底の様子を探らうとした。折疊式の革船で八人乗りの大きさであつた。湖水に浮かべる船としては是以上勝れた船はない。軽く漂々と水に浮かんで燕のやうに軽快である。

ラシイヌ探偵とレザール氏とマハラヤ博士と醫學士とダンチョン畫家と二名の土人、そして私とが船に乗つた。湖底の雷龍が首でも上げて船を覆さないものでもない。ラシイヌ探偵は心配して、岸に集まつてゐる土人軍に命じて時々大砲を撃たせることにした。勿論それは空砲で、ただ臆病の雷龍をその音響で威嚇していつ迄も湖底に止どまらせるのがラシイヌ探偵の望みであつた。

陰々と鳴り渡る大砲の音に私達の船は送られて湖心に向かつて漕ぎ出した。行く行く私達は水眼鏡で湖水の中を覗いたが、珍奇な水草と畸形の魚とで水中は恰も人世に於ける五月の花盛りそつくりである。

原始林が風を遮るので湖水の面は漣も立たず恰度瞻攀でも溶かしたやうに蒼くどろりと透き

通つてゐる。岸に近い水面は木立を映して嵐に騒ぐ梢の様子が宛然に水に映つて見えてゐる。船の進むに従つて水尾が一筋水面に走りそこだけキラ／＼と日光に輝き銀色をなして光つてゐる。無数の水禽が湖心の邊に一面に浮かんで泳いでゐたが、船が近づくのも知らないやうに場所から他へ移らうともしない。

私達は湖水の中心へ来た。そこで暫らく船を留めて湖底の様子を窺つた。しかし到底水眼鏡などでは幾丈と深い水の底を突き止めることなどは出来なかつた。靡く水草、泳ぐ魚、僅にそれらが見えるばかりだ。

そこで今度は岸に添うて湖水の周圍を調べようと土人軍達が屯ろしてゐる其岸を指して船を漕いだ。土人達は殆ど間断なく空砲を空に向けて撃つてゐる。その陰森たる大砲の音は人跡未踏の神祕境のあらゆる物に反響して木精となつて返つて来る。

斯うして私達の革船が岸から十間ほどに近付いた時、俄に船が動かなくなつた。そして其次の瞬間には、反對に船は速く走つて後方へ後方へと戻るのであつた。

思ひがけない此出来事はどんなに私達を驚かせたらう！ 半分飽氣にとられながら夫れでも腕力を糧に込めて岸へ近付かうと漕ぎつゞけた。すると今度は後方へも戻らず勝つて前方へは進まうともせず岸から十間の距離をただて、只岸姿に横へ横へと恰も湖水を巡るかのやうに急速に革船は廻り出した。

其時ラシイヌの鋭い聲が私達の耳を貫いた。

「水を見ろ！ 水を見ろ！ 水を見ろ！」と

私達は一齊に湖上を見た。湖水は湧き立つてゐるのではないか！

四〇

今迄は小さな漣さへ無かつた碧玉の湖水が白泡を浮かべて奔馬のやうに狂つてゐる。そして不思議にも湖上の水は巨大な渦巻を形造つて湖心を中心にして廻はつてゐる。私達の船は其渦巻の一番外側の輪の中にあつた。船はその輪の水勢に連れて湖岸に添うて走つて行く。

船が走るに従つて岸上の土人軍は驚嘆の聲を口々に鋭く叫び乍ら船の後から追つかけた。しかし水勢には及びもつかず見る／＼船と彼等との距離は遠く遠く隔つた。

湖水を一周した頃には船は渦巻の第二の輪をいくらか渦巻の中心の方へ傾きながら走つてゐた私達はあらゆる努力をして渦巻の外へ出ようとしたが、蟻地獄へ落ちた蟻のやうにどうすることも出来なかつた。船は岸上に屯してゐる土人軍の前を過ぎようとした。その時土人達は口々に叫んで標欄繩を一筋投げてくれたが船首を僅に掠めたばかりで空しく水中へ落ちて了つた。いつか私達は渦巻の輪の第三番目に這入つてゐた。水は輪なりに走りながら時々高く盛り上がり次の瞬間には波を立て、低く低く落ち窪んだ。私達の船が波に乗つて高く空中へ盛り上がった時、私は

素早く眼を遣つて渦巻の中心を見たのであつた。其邊一體は白泡に閉ざされ數千の白馬が鬚を振つて踊を躍つてゐるやうに見えたが、其白泡の眞中所に直徑半町もあらうかと思はれる蒼黒い穴が開いてゐて、湖中の水は其處を目掛けてたゞ直向きに押し寄せてゐた。穴は恰も漏斗のやうに圓錐形を呈してゐて、落ち込む水が其處へ這入る瀧のやうに直ぐに落下せず矢張り漏斗形に廻り廻はつて靜かに地底へ潜ぐるのであつた。

私は船が波の頂に一瞬間とゞまつてゐる時には是れだけのことを見て取つたので、波が崩れて谷が開け其水の谷へ眞一文字に私達の船が突き入つた時には最う水穴は見えなくなつた。

この間も船は水穴を目掛けて刻々に進む水勢に引かれて湖水をグル／＼廻つてゐる。何氣なく岸の方を眺めて見ると遙か彼方に斷崖のやうに赭黒い色をして聳えてゐる。いつもは岸に擦れ擦れになつて湖水の水が湛へてゐるのに、今は一丈餘の斷崖となつて森林を背負つて立つてゐる。つまり夫れだけ湖水の水が地下に吸ひ込まれて了つたのである。

斯うして私達はどれほどの時間湖水の面に漂つてゐたか考へて見ることも出来なかつたが、遂に船が渦に巻かれて湖心に出来てゐる水穴の中へ正に落ち込まうとした時に、天佑とでも云ふのであらうか、忽然と水穴が閉ざされ大渦巻が運動を止め湖面は再び鏡のやうに日光を吸つて輝き出した。

私達は初めて元氣付いて力を極めて船を漕いだ。そして土人軍の屯ろしてゐる湖水の岸へよち

登つた時、蘇生したやうな氣持がした。

湖水の水はその容積の三分の二餘りを減じてゐた。水草が水面に旗のやうに流れ、幾匹かの恐龍と雷龍とが巨大の首を水から出して私達の方を眺めてゐる。水禽は一羽も居なかつた。岸に近い水は森林を映し、岸に遠い水は空をひたしていつも平和に澄んでゐる。

あの素晴らしい渦巻の恐ろしかつた光景はどこを眺めても見當らない。水はいかにも減じてはゐるが、太古のまゝの夢を孕んで森然と靜まり湛へてゐる。

私達は互に眼を見合せ一言も物を云はなかつた。豪雄のラシイヌ探偵さへ空しく湖水を眺めるばかりで、陽に焼けて黒い其顔には驚異の情ばかりが浮かんでゐる。

斯うして私達は湖水の岸に暫くの間佇んでゐた。

其時、復も湖水の面に以前と同じ奇蹟が行はれた。湖心のあたりに蒼黒い穴が忽然と一つ現はれたが、其處を目掛けて湖中の水が渦巻きながら押し寄せて行く。

何んといふ奇觀！ なんとといふ壯大！ 湖中に流されて眺めるのと湖岸に立つて見渡すのと、斯うまで相違があるものであらうか！

……見渡す眼下の湖水の水は何物にか引かれてゝもゐるかのやうに渦の外輪は大波を立て、渦の内輪は獨樂のやうに澄み切つた速さで廻はつてゐる……名も知らぬ畸形の海獸や巨大な水牛やトラコドンは、その渦巻に巻かれまいと水沫を立て、狂ひ廻りながら加之水勢には争ひ難く矢

張り渦巻に巻かれたまゝ蒼黒い水穴——死の漏斗へ、一刻一刻近寄つて行く、……死の水穴の縁のあたりには落ち込む水が軋り合つて水蒸気の雲を濛々と立て陽に輝いて眼も眩むやうな鮮か虹を懸てゐる……虹の花輪に飾られた蒼黒い漏斗、死の水穴は、落ち込む水を直ぐ捉らへて、漏斗に入れられた酒や水が漏斗形にグル／＼廻りながら下の容器にしたゝるやうに捉へられた水は穴の内面を眼にも止まらぬ勢ひで漏斗形に寝々と馳せ廻り、次第に下へ次第に下へグ／＼廻はつて落ちて行く……

四一

……今、水牛が穴の中へもんどり打つて投げ込まれた。水勢は忽ちそれを捉らへて穴の内面を漏斗形にグル／＼グル／＼とぶ／＼廻はした。跪く事さへ出来ないと思つて四足を高く持ち上げたまゝ餘りに水勢が劇しいため水中に深く沈むことも出来ず全身を水面へ露出したまゝ虹の花輪のその真下で死の輪舞を續けてゐたがやがて次第に水勢に巻かれて下の方へ下の方へと落ちて行き忽ち姿は見えなくなつた。次から次と様々の獸が今の水牛と同じやうに渦巻に散々採まれた揚句例外無しに水穴へ落ちると、同じやうに漏斗形に廻り廻はつてやがて地底へ引き込まれて行く……そして水穴の縁の邊には水蒸気の雲が立ち迷ひ虹がキラ／＼と輝いてゐる。……見る見るうちに水は減り周囲の岸が高く峙立ち、湖底が徐々に露出れて来た。

——私の書き記す備忘録には少しの偽も記して無い。偽を書かない備忘録へ私は此後の光景を實に次のやうに書いたのである。……

やがて湖水は全く涸れて、いつか渦巻も消えて了つた。そして其後へ残つたものは鬱々たる原始林に取り囲まれた火山岩で造られた大穴である。所々の水溜には小魚がピチ／＼刎ねてゐるし水草が岩石にからまつてゐる。底には砂礫が溜まつてはゐるが泥は殆ど見あたらない。砂礫に埋もれて恐龍の死骸が幾個もあちらこちらに轉がつてゐる。

私達始め土人達は湖水の跡へ下りて行つて各々勝手の探検をした。私達は渦巻の起つたほとりの湖水の底とも覺しい邊へ急いで足を向けて行つたが其處には直径一町もあるやうな大磐石があるばかりで穴らしいものゝ影もない。ダイナマイトを取り寄せて念のため大石を砕いて見たが岩の破片が飛ぶばかりで大磐石は動かうともしない。

それから一體湖水の水は何處へ流れて行つたのであらう？ そして巨大な獸とは何處へ行衛を眩ましたのであらう？

空は蒼々と照り渡り森林は肅然と立つてゐるが、私達の疑問は解けようともしない。誰も彼も黙然と押し黙つて四邊を見廻はすばかりである。